ある双子兄弟の異常な日常　第二部

葉月香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある双子兄弟の異常な日常　第二部

【Ｎコード】
Ｎ２９０７Ａ

【作者名】
葉月香

【あらすじ】
双子の兄弟クリスターとレイフが１３才となったある日、彼らの学校に新任のカウンセラーがやってくる。弟との関係について誰にも打ち明けられない悩みを抱えたクリスターは助けを求めてそのカウンセラーに近づくが、それは彼の心の闇を暴き出す結果となる―。不思議な絆で結ばれた双子の成長物語、中学生編です。

SCENE1（前書き）

この作品には同性愛や兄弟相姦といった禁忌に触れるテーマが含まれています。
また物語の流れ上、一部に性的な描写も出てくると思いますので、ご注意ください。

SCENE1

『あの時』の自分の顔を覗き見たいと思ったことはあるか。
普段鏡の中で見る自分の顔と、それはどう違うのか。
快感に体が変化していくのに合わせて、やはり変わっていくその顔を見ても、自分のものだと思えるだろうか。
後ろめたいと感じながらも、きっと誰もが密かに見たがっている。
そう、肉体がのぼりつめ、ついに解放されて、果てる、あの刹那にさらけ出した己の本当の貌を。

「ふふん」
レイフは浴室に持ち込んだカセットデッキのスイッチを押し、今はやりのポップなダンスミュージックを流した。
「うん、やっぱり、マイケルは最高だな」
夕食の前に先にシャワーを浴びてくるよう母親から言われたレイフは、誰も見ている者がいないことを幸いとばかりに、リズミカルな音楽に合わせて服を脱ぎだした。
今学校でも一番はやっているナンバーだ。
「オレはワルだ」
ふんふんと口ずさみながら脱いだシャツを頭の上でくるくる回し、浴室の隅っこに投げる。同じように、ジーンズもぽい。靴下も下着も、ぽい、ぽい。
どうせ後で拾い集めなければならないのだが、取り合えず、そんなこと、クールなワルは気にしない。
「よしっ」

素っ裸になったレイフは、浴室を大股で歩いていくと壁の大きな鏡の前に立った。
鏡の中には、いかにも大人ぶって眉間にしわを寄せてしかめ面をしている、背の高い少年が立っている。
これでまだ13歳には見えないだろう。アメフトで日頃鍛えた体は、この年にしては立派なものだ。腕を曲げてみると一人前にちょっとした力こぶくらいできるし、昔は細っこかった脚も最近たくましくなってきた。こうして胸をそらすと肋骨が浮き出てしまうのは、まあ、ご愛嬌だ。今は身長が伸びる方に栄養がいってしまうらしく、どんなに食べても期待ほど筋肉はついてくれないのだ。
（それに…）
レイフは、ちらっと自分の下腹部の方を見下ろした。ちょっと赤くなった。
（ここだって、父さんほどじゃないけど、なかなか凄いものさ。もう立派な大人の男だぜ、オレは）
生憎、まだ一度も使ったことはないけれど。
鏡の中の自分の顔が一瞬自信なさげなものになるのに、レイフはふるふると頭を振った。
（つまらないこと、考えるのはよそうっと）
レイフも思春期の少年なので、女の子のことは興味があるし気にもなるのだが、女の子と話したり、ましては付き合ったりするのは苦手だった。緊張を隠すためについ乱暴な態度を取ってしまうため、同じクラスの女の子からの受けも悪かった。
体は早熟でも、彼の中身は実に初心でおくてだったのだ。
（えい、最大ボリュームだ）
レイフは、自分を高揚させようと音楽をいっぱいに鳴り響かせた。
母さんが怒るかもしれないけれど、ちょっとくらい構うものか。
そうだ、母親の小言にびくびくするなんて、男らしくない。
調子に乗って、レイフは鏡の前からシャワーの方までムーンウォークなどしてみた。

ついでに、ちょっと腰も振ってみた。
リズムに合わせて、あっちに振り振りこっちに振り振り。
最後に決めポーズだ。
オレって、カッコイイ？
レイフが浴室のドアの方に体を向け、びしっと決めた姿で静止した、その時―。
「レイフ」
平然とした声がレイフを呼んだ。レイフとそっくり同じ声質だ。
レイフはぎょっとなって目を見開く。
「シャンプーがきれているはずだから、持っていってやれって、母さんが」
いつの間に、浴室のドアを開いたのか。
レイフの双子の兄クリスターが、シャンプーのボトルを手にすたすたと中に入ってきた。
「シャワーを浴びる前に、そのくらい確認しろよ。世話が焼けるな」
全裸のままで、変なポーズのままで、非常に気まずい思いをして凍りついているレイフの胸に、クリスターは、何事もなかったかのようにシャンプーのボトルを差し出した。
「あ…あり…がと…」
うつろな声で、レイフは言った。
「どういたしまして」
にっこりと、どこか取り澄ました顔でクリスターは笑う。
その目に何かしら哀れむような表情がうかんでいる気がするのは、レイフの錯覚だとは言い切れなかった。
「うっ…うっ…」
レイフの顔が、さっと紅潮した。
「お、おまえ…クリスター、人がシャワーを浴びてる時に…いきなり入ってくる奴があるかっ…ノ、ノックくらいしろよ…！」
「したよ、ノックなら」
たしなめるような調子で、クリスターは言った。

「お前が気がつかなかっただけじゃないか。素っ裸で、マイケル・ジャクソン気取りで腰を振って踊るのに、夢中でさ」
レイフの顔から、火が出た。
「こ、この…＆＃§★○◎っ！」
言葉にならない罵声を浴びせて、レイフは手に持ったシャンプーのボトルを双子の兄に向かって投げたが、クリスターは素早く浴室の外に退避していた。
シャンプーのボトルはドアにあたって跳ね返り、呆然と立ち尽くすレイフの足元に転がってきた。
「あ、兄貴のアホー！」
真っ赤な顔で地団太を踏んで悔しがるレイフは、本人は認めたがらなかっただろうが、全く子供のようだった。
少なくとも、レイフの兄ならば、裸踊りを目撃されたくらいで動じまい。
いや、そもそも、そんな馬鹿なまねをクリスターがするはずもなかったのだが。
そう、13歳になった双子兄弟はこんな具合で、相変わらず、兄が弟の一歩も二歩も前を歩いているのだった。
生まれた時から少しも変わらない、彼らの位置関係だった。

SCENE2

大人というものは、時として非合理かつ不条理極まりない存在だ。
「早く、早く、バスに遅れるよ、レイフ」
慌しく家を飛び出し、近くのスクールバスの停留所まで全力疾走した双子兄弟は、今まさに出発せんとしていたバスに間一髪飛び乗った。
「ああー、よかった、間に合って」
空いていた座席に着くなりぜいぜいと息を切らせながら呟く弟を、クリスターはちょっと恐い顔で睨みつけた。
「おまえがもう３０分早く起きていたら、こんな目にはあわなかったんだよ」
「だってさあ」
不満げに頬を膨らませるレイフに、クリスターは溜め息をついた。
「いいよ、もう。そんなに眠ければ、学校に着くまで寝たらいいんだよ、レイフ。どうせ４０分もかかるんだから」
以前は、同じ学校に着くのにその半分の時間しかかからなかった。これも、去年行われた小中学校の統合と再編成のおかげだ。
クリスターとレイフが通うセタウケット・アカデミー中学校は、もともと、その生徒の大半が中流クラス以上の白人家庭の子供達で占められていた。それが、肌の色や階層が異なる子供達を幼い時から一緒に教育することが望ましいとする州の方針によって、今学期から黒人やヒスパニック系が多い別の中学校と統合再編成されることになったのだ。
この決定には反対する親達も多かった。人種差別的な感覚からくる抵抗もあっただろう。また、低所得者層の家庭の子供達が同じ学校に来ることで校内の風紀が乱れるのではないかという不安の声もあった。
一方、子供達にとってもそれは仲のよかった友達や慣れ親しんだ

教師と場合によっては別れることを意味したため、歓迎する者はほとんど皆無だった。
そして、このスクールバスだ。もともと社会階層ごとに住み分けが進んだ地域で新たな学校の振り分けなどを無理に行ったものだから、以前に比べて一つの学校がカバーする学区はずっと広くなった。それを限られた数のバスが生徒の送り迎えのために回らなくてはならない。そのために登下校にかかる時間もかなり長くなったのだ。
「全く、教育庁のやり方にはうんざりするよ。民主主義には大賛成だし、自由平等も大いに結構。けれど、大人達の強引な決定の皺寄せを一番くうのは誰かというと当事者である僕ら子供なんだからさ！」
始まってもう7ヶ月にもなる新システムに、いまだにクリスターは時々腹を立てる。朝の３０分は、彼ら中学生にとっても貴重なものなのだ。
「ううーん、そんな難しいこと言わないで、もっと寝たかったって素直に言えばいいのにさ、兄ちゃん」
レイフは本当にうつらうつらし始めた。
クリスターは反論しようとするが、バスが揺れた拍子に彼の肩に頭を預け本格的に居眠りを始めるレイフに何も言えなくなってしまった。
（全く、いつまでたっても子供なんだからさ）
中学生になって、成長の早い彼らの体はぐんと大きくなった。横幅はそれ程ないものの、同じ学年の子供達の中でとびぬけて背は高く、高校生によく間違えられた。体格だけを見れば、子供だとはもう言えなくなっていた。
その辺りの自覚はレイフにもあるのか、この頃やたらと大人ぶった言動が目立ってきた。しかし、それもクリスターの目から見れば、一生懸命自分をよく見せようと背伸びをしていることが丸分かりで、微笑みを誘うものだった。
この頃になっても、二人の子供部屋は以前のままだった。しかし、

さすがにベッドも狭くなり、大人に近づいてきた彼らが一緒に生活するのは限界に近かった。
今年も双子達の誕生日が近くなれば、また父親のラースが言い出すだろう。いい加減、別々の部屋を持ったらどうだ、と。
クリスターにしてもレイフにしても、早く大人になりたいとは思っている。反面、子供時代を脱することにまだ抵抗がある。彼らがずっと共有してきた、安心できる二人だけの小世界である、あの部屋を失いたくはなかったのだ。
クリスターは、自分に寄りかかってすやすやと寝息を立てている弟を困ったように見下ろした。小さな囁き声が聞こえたのでそちらを見ると、斜め前の座席に座った女の子達がこちらを盗み見していた。見分けがつかないほどそっくりな双子達が仲良く寄り添いあっている様子を、彼女らはどんなふうに捕らえたのだろうか。
クリスターは何だか恥ずかしくなって一瞬レイフを揺り起こしかけたが、気持ちよさそうな彼の寝顔を見て、気を変えた。
（別にいいや。見たい奴には、勝手に見させてやればいいんだ）
クリスターは目をつむり、自分も眠ったふりをして、弟に軽く頭をもたせかけた。
いつの間にか、クリスターの機嫌は直っていた。実際、レイフの体の温かさと慣れ親しんだ匂いに浸りながら過ごす、学校に着くまでの一時は、こうしてみれば決して悪くはなかったのだ。
やがて、スクールバスは学校に到着した。
短い春休みが終わり、昨日から新学期が始まったところだった。先生の入れ替わりやクラスの変更が若干ありはしたが、それ以外は特に変わったことはない。
バスから降りた生徒達に混じって、クリスターとレイフも校舎に向かう。クラスメートや同じクラブの友達の顔が見つかれば、互いに挨拶を交わす。
いつもと同じ朝の光景だ。
だが、この日は一つだけいつもと違う出来事が起こった。

「やあ、君達、ちょっとすまないね」
学校の玄関ホールに入ったところで、クリスターとレイフは後ろから誰かに呼び止められた。
「はい？」
２人は同時に足を止め、振り返った。彼らを初めて見る人間は、これをやられると大抵衝撃を受ける。同じ顔に同じ体。声までもが、別にしめし合わせたわけでもないのにぴたりと重なった。
だが、この相手は特にひるんだ様子は見せなかった。
「校長室はどこにあるのか、教えてもらえないか」
クリスターは、目をすっと細めて、この見知らぬ男を眺めた。
全く驚いていないわけではない。双子を見て、ほんの一瞬、男の瞳は揺らいだ。しかし、あっという間に自分をコントロールして、驚愕を抑えこんだのだ。
年は３０代後半だろうか。スーツを着てきちんとした身なりをしているが、茶色の髪はおざなりに櫛を通しただけのようにおさまりが悪い。銀縁の眼鏡の下にあるブルーグレーの瞳は思慮深げだが、気のせいか、何かにひどく倦み疲れているような、冷めきった印象を与えた。生徒の父兄というわけではなさそうだ。新任の教師か事務職員だろうか。
「校長室なら、この廊下をまっすぐに行って右に曲がってすぐの所にありますよ。事務所と保健室の先です」
愛想よく笑って男に校長室への行き方を説明しながら、クリスターはその顔にどこかで見覚えがあることにふと気がついた。
「ありがとう」
男はクリスターの注視に気がついたのだろうか。微笑みながら頷き返して、自己紹介をした。
「私はデイビット・アイヴァース。新任のカウンセラーなんだ。今月から産休に入った前の先生の代わりにね」
「ああ、そう言えば、春休みの前にもらった学校からの手紙に、そんなことが書かれていましたね」

クリスターは、男がスクールカウンセラーであるということにも興味を引かれた。それに、やはりこの顔はどこかで見たことがある。
「デイビット・アイヴァース先生…」
クリスターは男の名前を繰り返した。
「以前どこかでお会いしたことは…ありませんか？」
傍らのレイフがこのやり取りに焦れたように、クリスターの腕を軽くつついた。
「いや、そうは思わないな」
デイビット・アイヴァースは一瞬怪訝そうに眉をひそめたが、すぐにもとの物静かで穏やかな顔に戻った。
「子供相手の仕事をして長いが、君達のような目立つ子のことは一度会ったら忘れないと思うよ」
そう言い残すと、新任のカウンセラーは、クリスターが示した方向に歩き去っていった。
行きかう生徒達の向こうにアイヴァースの痩せた背の高い姿が遠ざかっていくのを、クリスターはしばし立ち尽くしたまま、じっと見送った。
「クリスター、どうしたんだよ、あの先生がどうかしたのかよ？」
「どうもしないよ」
クリスターは上の空で答えた。
「クリスター！」
「あ、ああ…」
レイフが首に腕を回しぎゅっと締め付けるのに、クリスターはやっと我に返った。
「本当になんでもないって。ただ、前のジーン先生の代わりに入ってきたカウンセラーっていうから、どんな人だろうって考えてたんだよ」
「ジーン先生は優しい、いい先生だったけれど、今度の先生は何だかインテリ風でとっつきにくそうだな」
「そう？」

「オレはちょっと苦手なタイプだよ。でも、クリスターは好きそうだな、おんなじインテリ気取りの理屈屋だもんな」
「そんなに理屈っぽいかな、僕は」
クリスターはむっとして、レイフの体を肘で軽く小突いた。
その時、始業を告げるベルが鳴った。
双子達は、慌てて教室へと走っていった。

「やっぱり…」
その日、学校から帰ってすぐに、クリスターは自分専用の本棚を探しまくって、一冊の分厚い本を引っ張り出した。
その裏表紙には、著者の簡単な経歴と共に小さな写真が印刷されていた。
デイビット・アイヴァース。ボストン市から数々の表彰をもらった、著名な児童専門の精神科医だ。
そして、その写真の顔は、紛れもなく、今朝学校で出会ったあの新任のカウンセラーのものだった。
クリスターは、しばし食い入るようにアイヴァースの写真を見つめ、それから、気持ちの昂ぶりを静めようとするかのごとく肩で大きく息をついた。
この本は、最近クリスターが愛読する心理学関係の本の中でも、特に強い印象を彼に与えたものだった。この本に出会ったことをきっかけに、クリスターはドクター・アイヴァースの他の本も図書館や本屋に通って読み漁った。

まさか、自分の愛読する本の著者とこんな身近な所で出会うことになるなんて。
それから、ふと不思議に思って、クリスターは首をかしげた。
ドクター・アイヴァースは、名だたる児童心理学者で一流のセラピストだ。傷ついた魂の癒し手であり、実際多くの患者達を救ってきた。そんな優れた専門家が、多少の悩みはあっても健康な、ごく平凡な子供達が通う中学校のスクールカウンセラーなどを引き受けるとは、一体どうして？
クリスターは、アイヴァースの著書を裏返して表紙に目を落とした。
黒いカバーに赤く印刷されたタイトルに、クリスターの眼差しは一瞬暗く翳った。

『ＴＨＥ　ＤＥＡＤ　ＲＩＮＧＥＲＳ』

心に問題を抱えた、ある双生児を研究対象にしたノンフィクションだ。
内容は非常に興味深かったが、『瓜二つの存在』を意味するこのタイトルは、クリスターはあまり好きではなかった。
『死（デッド）』の不吉なイメージを内包するような気がした。双生児にまつわる昔からの不気味な迷信じみた言い伝えとも、無関係ではないのかもしれない。双子は凶兆であるとか、しばしば敵対関係に陥り一方が他方を殺すとか。アベルとカイン。ロムルスとレムス…。
実は、この頃クリスターが悩まされている、説明しがたい不安の源がそこにあった。ふとした折に喚起される『双児』のイメージ。人間の本性の二面性。光と闇、善と悪、生と死。連想は更なる連想を招き、歯止めが利かず、しかし、どこに行き着くのかを考えるといつも恐ろしくなり、クリスターは無理やり思考を中断した。
そんな考えに一端捕らわれると、クリスターは心臓を冷たい手でつかまれるような恐怖心を覚えた。馬鹿げているとは思いながらも、

ともすれば心の中に蛇のように忍び込んでくる不安を完全に消し去ることはできなった。
（嫌だな、またこんな訳もない不安感に僕は捕らわれてる。ちょっと強迫症じみてないか？　論理的に考えれば、全く根も葉もない嘘っぱちだと分かるのに…どうして…？）
クリスターは、胸の奥底から噴出しそうな得体の知れない恐れの気持ちをねじ伏せるように、本のタイトルを手で隠し、そのまま本棚に突っ込んだ。
「馬鹿げているよ」
クリスターは自分で自分を笑い飛ばしてみたが、もやもやとした気持ちの悪さは残っていた。心細く、心許ない気分だった。
誰もクリスターのこんな危うい心を知らなかった。教師達や友人連中には無論、両親にも、誰よりも近しいレイフにさえも、クリスターは打ち明けていなかった。むしろ、レイフにだけは話したくないと思っていた。
年の割に大人びたクリスターには、自分の問題くらい自分で解決できるという自負があった。それに、周りの大人の理解力や問題解決能力を彼はそれ程信用してはいなかった。当惑するばかりで的外れでありがちな答えしか返せそうにない大人を相手にするくらいなら、自分なりに解決法を探した方がまだしもだ。そうして、クリスターは心理学や哲学等答えの見つかりそうな本を読み漁って、自己分析などを試みてみたのだが、無駄な知識が増えるばかりであまり役に立っているとは思えなかった。
正直、自分の中に溜め込んでおくのは辛くなってきていた。
そんな折だったからか、思いも寄らない今日の出会いに、クリスターは彼らしくもなく胸をときめかせている。
（ドクター・アイヴァースは、少しは話の分かる大人だろうか。相手が子供だと見れば初めから舐めてかかる、底の浅い『先生』達やしたり顔のカウンセラーよりは、少しはましな相手だろうか…？そうであればいいんだけれど…）

大人のことをかなり舐めてかかっているクリスターではあったが、自分の心を誰かに打ち明けてみたいと、本当は、少しだけ思っていたのかもしれない。

SCENE3

「ああ、遅れちゃう、遅れちゃう」

その日、放課後の楽しいクラブ活動のために、レイフは体育館に急ぎ向かっていた。

フットボールのシーズンの終った今は、スピードと筋力をつけるためにと陸上と重量挙げのクラブに、レイフはクリスターと一緒に入っていた。

午後からの選択授業では、レイフとは別のクラスを取っているクリスターは、先に体育館に行っている筈だ。

数学の宿題を忘れた罰として居残りで問題を解かされていたレイフは、それでクラブの時間が削られるのはもったいないとばかりに、ロッカールームまでの近道にと校舎から外に飛び出し、グラウンドを突っ走っていった。

体育館が見えてきたところで、しかし、レイフは突然足を止めた。校舎からは隠れて見えない体育館脇で、数人の少年達が何やら争っている様子だったからだ。いや、よく見れば、それは喧嘩ではなかった。体格のいい少年達が、4人がかりで1人のひ弱そうな少年を苛めていたのだ。

（あいつら…！）

レイフは不愉快そうに鼻にしわをよせて、舌打ちをした。『クールでタフな男』を目指すレイフにとって、この世で何が嫌いかといって、自分より弱い奴をいたぶる卑怯者だ。

レイフは肩を怒らせ、1人の小柄な少年を取り囲み小突いたり蹴ったりしている少年達に、まっすぐに向かっていった。

「おいっ！」

レイフが大声で呼びかけるのに、少年達はぎょっとなって振り返った。

そのうちの1人にレイフは見覚えがあった。確か、ジョン何とか

って奴だ。レイフより1つ上の8年生で、少し前までボクシング部に入っていた。結構強かったらしいが、喧嘩沙汰を起こして退部になったはずだ。後はジョンの子分どもだろう。
真ん中でうずくまっているヒスパニック系の少年は知らない。学校の統合後、セタウケット・アカデミー中学にかわってきた子だろう。小柄で、痩せていて、いかにも苛められっ子タイプだ。転校してきた先でこんな乱暴者達に目を付けられるなんて、可哀想に。
「何だよ、おまえ、俺たちに何か用があるのかよ？」
一瞬ひるんだ少年達だが、レイフが1人と見るや、たちまち態度を変えた。
「おまえらに用などあるもんか。ロッカールームに行く途中なんだよ。邪魔だから、そこ、どけ！」
レイフは目を吊り上げて、少年らをじろりと見回した。すると、彼らは迷うような素振りを見せた。レイフは、彼らがよってたかって苛めていた少年とはあまりにも違う。背は1つ年上の彼らよりも高く、強靭で、いかにも攻撃的な雰囲気だ。
「ふん、あの赤毛の双子の片割れだな」
挑戦的な口調でレイフに答えたのは、ジョン何たらだった。さすがに、もとボクシング部はレイフ相手に臆するつもりはないらしい。確かに、身長はレイフに及ばないものの、とても中学生とは思えないたくましい体をしている。
「兄か弟か、どっちだ？」
「弟のレイフだよ」
「まあ、どっちでも一緒だけれどな、おまえらの場合。いつも兄貴にくっついているおまえが一人でいるなんて、珍しいな…本当に1人か？」
ジョンは頭をぐるりと巡らせ、レイフが本当に1人きりなのか、どこかにクリスターがいるのではないか確認した。
「間違いない、な」
ジョンは、何やら仲間に耳打ちをした。

「何だよ」
レイフは不審そうに眉根を寄せた。
そんなレイフを、ジョンは値踏みでもするかのようにつま先から頭の天辺まで眺め回すと、不適に笑った。ふいに、ジョンは足元に這いつくばっているヒスパニック系の少年の脇腹を蹴った。
「ひいぃっ」
少年はたまらず泣き叫び、脇腹を押さえて地面を転がった。
「何をしやがるっ！」
あまりな仕打ちに、レイフはかっとなった。肩に引っ掛けていたリュックサックを地面に落とすと、怒りのあまり震える拳を握り締め、じりっと少年達に詰め寄った。
「だってさ、こいつ、俺らがそばに来るといつもおどおどしやがってさ。見ているとイラつくんだよ。こんなに弱かったら、大人になっても世間を渡っていけないだろうから、今のうちに俺らが鍛えてやっているのさ」
「な、何が鍛える、だ。おまえらのやってるのはただの苛めだろっ。しかも、1人を相手に4人がかりで。恥を知れ、この卑怯者、男の風上にも置けない奴め！」
「何だ、俺らに喧嘩を吹っかけようというのかよ、レイフ・オルソン」
ジョンはニヤニヤ笑いながら、レイフの激昂ぶりを眺めた。他の3人の少年達は互いに頷きあうと、レイフを取り囲むようにした。
「前からおまえらのことは気に食わないと思ってたんだ。父親がもとフットボールの選手で、その才能を受け継いでるって、皆からちやほやされて。もとプロ選手なんて言ったって、ほとんど成績を残せなかったんだろ、おまえの親父。そんなの、意味ないじゃん」
レイフの顔色がさっと変わった。父親のラースは若い頃ＮＦＬの選手だった。期待の新人だったが、不幸にもシーズン中に車の事故にあい、選手生命を絶たれたのだ。父親を愛しているレイフには、これは許せない侮辱だった。

「てめえ…よくも…！」
その時、ジョンの仲間の1人がレイフの腰に飛びついた。よろめいたレイフの顔に素早く動いたジョンのパンチが炸裂した。
「馬鹿か、おまえ。ヒーロー気取りで現れて、４人も相手にどうするつもりだったのさ」
更にもう一発、ジョンはレイフの腹にパンチを見舞った。レイフはううっと呻いて、うずくまった。
「おまえもこいつと一緒に袋叩きにしてやるよ、レイフ」
痛みに顔をしかめてレイフが横を見ると、ジョンに足蹴にされていた少年の血と涙に汚れた怯えきった顔があった。
レイフはギリッと歯を食いしばった。許さない。
「うわっ」
さっきレイフを羽交い絞めにしていた少年が脚を払われ、転倒した。素早く起き上がったレイフは、身を起こそうともがく少年の喉に見事なエルボードロップを食らわせてやった。声もなく、少年はその場で失神した。
「てめえらぁぁっ…！」
ゆらりと向き直ったレイフは、鬼の形相をしていた。怒り心頭、鼻血を吹きながら、あっけに取られるジョンとその仲間達をねめつけた。
「ブチ殺す！！」
体育館脇に、悲鳴があがった。
レイフは、柔道教室で習いたての背負い投げでジョンを一発勝負、打ち負かした。更には、蜘蛛の子を散らすようにグラウンドの方向に逃げ出す残りの苛めっ子達を自慢の俊足であっという間に追いつき追い詰め、得意のタックルと飛び膝蹴りで叩きのめした。
「正義は勝つ！　ざまあみろ、わはははっ！」
すっかり頭に血が上ったレイフは、この騒ぎに校舎から出てきた野次馬連中やグラウンドでクラブの練習中だった生徒達が遠巻きにしているのにも気がつかなかった。粉砕した敵の体に足をかけたま

ま、グラウンドの真ん中で鼻血まみれになりながら、勝利の雄叫びを上げていた。
グラウンドのあちらこちらでのびていたり泣きながら呻いたりしている子供達と今のレイフを見比べて、どちらが正義で悪なのかと問われても、見ている者達にとっては答えに窮するところだったろう。
レイフが我に返って自分の置かれた状況を理解するのに、数分を要した。

「ク、クリスター？」
事態が大ごとになってしまったことにさすがに恐れをなしたレイフは、体育館脇にあるロッカールームに逃げ込んだ。
すると、とっくに重量上げクラブの練習に出ていると思っていた双子の兄が、彼を待ち受けていたのだ。
「ど、どうして？」
顔だけでなく体のあちこちに傷を作って、鼻血の跡も生々しいレイフの姿に、クリスターは眉をひそめた。
「何となく、嫌な感じがしたんだよ」
何となく、分かった。それは、彼ら双子兄弟の間ではしばしば起こることだった。
「それで、一体どこの誰と、どうして喧嘩なんかしたんだい？」
クリスターはロッカールームの隅っこの戸棚から救急箱を持ってくると、レイフを長椅子に座らせ、傷の手当てをしてやった。
「喧嘩じゃない。苛めっ子の奴らをぎゃふんと言わせてやったんだ。

ほら、8年生のもとボクシング部のジョン何とかって奴だよ」
　レイフは、ことの顛末をクリスターに話して聞かせた。レイフはあまり筋道を立てて事情を説明することが苦手な上、話すうちに気持ちが昂ぶってくるものだから、他人が彼の主張を理解するのは難しかった。しかし、その点、クリスターはさすがによく分かることができた。
「成る程、その子が苛められているのを見て可哀想になったのと、弱いもの苛めをするそいつらに腹が立ったんだね。それで止めるつもりで声をかけたら、そいつらが殴りかかってきた。だから、やり返した、と」
　クリスターは、レイフの主張をうまくまとめて、ゆっくりと確認するように繰り返した。
「それで、そいつらはどうなったんだい？」
「もちろん、ギッタンギッタンに叩きのめしてやったさ！」
　ガッツポーズをして叫んだとたんにまた鼻血が吹くレイフに、クリスターは素早くティシュペーパーの箱を差し出した。
「全く、そのすぐにカッとなる癖は何とかならないものかな」
　溜め息をつくクリスターに、レイフはむっとした。
「オレは、何も悪いことはしていないぞ。悪いのはあいつらなんだ」
「ああ、確かにね。おまえは苛めをやめさせようとしただけなんだ。それを、あいつらはおまえが1人なのをいいことに、集団でリンチにしようとした。全く、最低のクズみたいな奴らだよ。けれど、それでも僕は、おまえは手を上げるべきではなかったと思うよ」
「ど、どうして？」
「まず、第一に相手は大勢だった。今回は運良く勝ったからいいものの、本当なら取り囲まれ押さえ込まれて袋叩きにあっていたかもしれないんだよ。レイフ、おまえは考えが足りなすぎる」
「う…でも、オレはあんな奴らに負けない…」
　言い返そうとするレイフを、クリスターは手で制した。
「二点目。おまえはちょっと勝ちすぎた。苛めっ子どもはおまえに

返り討ちにあって、怪我をしたんだろう？　怪我をしたのはおまえも一緒だけれど、最初にあいつらがおまえに喧嘩を吹っかけてきたところは誰も見ていない。他の生徒達が見たのは、おまえが、泣き喚きながら逃げる彼らを追い回して叩きのめした場面だけだ。傍から見ていれば、おまえの方こそ乱暴な問題児のようだったかもしれないよ」

「あいつらに苛められていた、あのヒスパニック系の子がいるよ。名前は知らないけど、あの子なら、オレが助けようとしたんだってことを証言してくれる」

「そう願いたいけれど、もしかしたら期待できないかもしれないよ。その子が苛めっ子のグループに目をつけられてどのくらいになるのかにもよるけれど、苛められっ子が、自分にそんな酷い仕打ちをした奴らを先生や親に訴えるのはとても勇気がいることなんだ。仕返しを恐がって、黙ってしまうかもしれない」

「そんな…」

クリスターと話しているうちにレイフの頭も次第に冷えてきた。これからどうなるのかを考え始めて、レイフは不安になってきた。

「どうしよう…喧嘩って、確か、理由を問わず停学になるんだよな。どうしよう…父さんや母さんに怒られる…」

「自分の主張を先生達にしっかり伝えることだよ、レイフ。おまえは、基本的に間違っていないんだからね。そのことをカッとならずに説明して分かってもらえれば、何も停学なんてことにはならないと思うよ」

「別に喧嘩をしたかったわけじゃないんだ、オレ。父さんのことまで悪く言われて、殴られて、カッとなってしまったけれど…あそこまでするつもりはなかったんだ。それに…ジョンの奴につい背負い投げをかけてしまったけれど…あれはまずかったと後悔もしてるよ。スズキ先生がいつも言ってるよね、柔道の技を喧嘩なんかに使うのは武道者失格だって…」

先程までの勢いはどこへやら、しゅんとうなだれるレイフに、ク

リスターは慰めるように囁いた。
「それだけ分かっているのなら、おまえには何も後ろめたく思う必要はないよ、レイフ。けれど、おまえに叩きのめされた奴らの主張もあわせて聞いて考えるだろう大人たちを説き伏せて、おまえが正しいと納得させるには、それなりに理論武装をしておかないと」
「りろん…ぶそう…何それ？」
頼りない反応をするレイフに、クリスターは溜め息をつくと、腕組みをして、1人何やら考え込んだ。
「よし。今日だけは僕が何とかしてあげるよ。おまえが問題児のレッテルを張られてこれから先学校で何かと不利な立場に立たされるのは、僕も我慢ならないからね。レイフ、服を脱ぐんだ」
「えっ、ふ、服？」
戸惑うレイフを見下ろして、クリスターは頼もしげに頷いた。
「僕がおまえの身代わりになって、おまえの言い分を先生達にちゃんと伝えるよ。こういうことは初めが肝心だからね。癇癪を起こしたり、おどおどしたり、動揺したりして、相手に悪い印象を与えたら駄目なんだ。僕がおまえになって、ことの真相を伝え、先生達を納得させてみせるよ」
「だ、駄目だよ、クリスターがオレの身代わりに怒られるなんて…これは、オレがしでかした失敗なのに…」
「別におまえをかばって嘘をついたりするわけじゃないよ。正しい事実を誤解のないように伝えるだけだから、何も悪いことじゃない。それに、言っておくけれど、身代わりは1回だけだからね。後はおまえがちゃんと自分で引き受けるんだよ」
「う…うん…」
レイフはまだ納得しきれていなかったが、有無を言わさぬクリスターの口調に圧倒されて、結局従った。クリスターが言うと、何となくそれが一番正しいことのように、レイフは思ってしまうのだ。
「おまえは僕になりすまして、このまま家に帰るんだ。クラブのコーチには、後で僕が家から電話して適当に言い訳をするよ」

血と土で汚れたレイフのティーシャツとジーンズを身に着けたクリスターを、レイフは心配そうに見つめた。
「やっぱり、やめたほうがいいんじゃないか、クリスター。もしばれたら、おまえまで叱られる」
「ばれやしないよ」
自信たっぷり、クリスターは言いはって、救急箱の中から絆創膏を取り出し、レイフと同じ右頬に張った。髪も手でくしゃくしゃにして、いかにも大暴れをしてきましたという格好にしあげた。
「僕は大丈夫だから安心して、レイフ」
「兄ちゃん」
レイフはクリスターをとめたかった。しかし、クリスターがレイフを引き寄せ、なだめるように抱きしめるのに、何も言えなくなった。
「そんなに深刻に考えるなよ、レイフ。双子は何かと便利だって、それだけのことなんだから」
がやがやと人々の話し声と足音がこのロッカールームに近づいてくるのが、分かった。レイフは一瞬身を固くし、クリスターの体をぎゅっと抱きしめた。
クリスターはレイフの体を離し、軽く押しやった。
「行くんだ、レイフ」
レイフは唇を噛み締めた。意を決し、傍らの荷物を引っつかむと、大人たちが近づいてくるのとは逆の出口目指して駆け出した。
「レイフ・オルソン、そこにいるのか?!」
後ろの方で、扉が開け放たれ、先生が大きく呼ばわる声がする。
ごめん、クリスター。レイフは兄に対してすまない気持ちで一杯になりながらも、振り返ることはなく、ロッカールームから飛び出していった。

「それじゃあ、君は苛めを止めようとしただけで、喧嘩をするつもりじゃなかったというんだね、レイフ」
校長室。レイフになりすましたクリスターは、いかにも緊張していますといった風情でソファにおとなしく座っていた。
「だが、ジョン達は、先に手を出したのは君だと言い張っている」
校長のプリルは、クリスターに探るような眼差しをあてたまま、考え込むように黙り込んだ。
「それは…ジョン達が嘘をついているんだ…！」
クリスターは、レイフそっくりに感情を昂ぶらせた様子で叫んだ。
「こら、そんな大きな声を出すんじゃない、レイフ」
担任のロスが軽くたしなめるのに、クリスターはさっと顔を紅くして、うつむいた。
「ごめんなさい」
クリスターが素直に謝るのに、彼の前のソファに腰を下ろしている大人達はほっと和んだようだ。体は大きくても、やはり子供なのだと安心したのだろう。
クリスターは殊勝げに顔をうつむけたまま、そんな大人たちを冷静に観察していた。校長のプリルは教育熱心で人がいいが少々単純なところがあるし、担任のロスは体育教師で、スポーツ万能のレイフを可愛がっている。この相手なら、ことをレイフにとって有利な方向に運ぶのは、それ程難しくない。ただ問題は―。
クリスターはそっと視線を動かすと、斜め横の席で静かに話を聞いているカウンセラー、デイビット・アイヴァースを盗み見た。アイヴァースは、まだこの場で一言も発言していないし、その凪いだ湖面のような無表情からは彼の考えも読み取れない。クリスターの芝居を、まさか見抜かれているということはないだろうが。

「君が苛めを受けているのを目撃したというアルビンなんだがね、そんな事実はないと言ってるんだよ。顔には殴られた跡があるし、誰かに暴行を受けたのは間違いないんだがね」と校長。
「オ、オレがやったって？　違う、オレは自分より弱い奴に、あんなひどいことはしない。オレは、そんな卑怯なマネは大嫌いなんだからっ」
「決め付けてはいないよ。だが、君も含めて6人の生徒達がそれぞれ怪我をしている。喧嘩なり苛めなりがあったの確かだ。その事実を、先生達は確認したいんだよ」
　クリスターは、少しの間考え込むふりをした。膝の上でぎゅっと手を握り締め、やがて思い切ったように口を開いた。
「あの子…アルビンっていうんだね、すごく怯えきっていた…あんな大柄な奴らに4人がかりでぼこぼこにされたんだから、そりゃ恐かったろうって思う。たぶんもうずっとジョン達に苛められてたんじゃないかな。だから、たぶん本当のことを言うのが怖いんだと思うよ…仕返しされたらどうしようって…アルビンが思って黙り込んでしまうのも仕方ないのかもしれない」
　校長達は小さく息を吸い込んだ。
「まあ、確かに…そういうこともありうるだろうね…アルビンの担任は誰だったかな」
「確かシェリルですよ。でも、彼が苛めにあっているという報告がなくても、不思議じゃないでしょう。レイフの言うとおり…苛めにあっている子達が仕返しを恐れて黙り込んでしまうためにことの発覚が遅れるというのは、よくあることです。実際、とても難しい問題なんですよ」
　その時、長い間沈黙を守っていたアイヴァースがふいに口を差し挟んだ。
「アルビンは、今、保健室にいるんでしたね。私が行って、少し話を聞いてきましょう」
　淡々と告げてソファから立ち上がるアイヴァースを、クリスター

は思わずまじまじと見た。
「おお、そうしてもらえると助かりますよ、先生」
アイヴァースをカウンセラーにと自ら推した校長は、期待に満ちた顔で彼を見上げている。彼の著作を、校長も読んだことがあるのだろうか。
アイヴァースは、「失礼」とだけ言って、校長室を出て行った。そのすらりと背の高い痩身を見送りながら、クリスターは己の心臓の鼓動が早くなっているのを意識した。
「レイフ」
校長に呼ばれて、クリスターは慌ててそちらに意識を戻した。
「君は正義感から苛めっ子どもを成敗したのだと主張するが…仮にそれが本当だったとしても…彼らに怪我をさせたのはよくないことだよ。先生を呼びに行くとか、他にやりようはあったはずだ」
「それは…今から考えたらそうした方がよかったって分かるけれど…あの時は、とっさに、そんなこと思いつかなかったし…ましてや集団でかかってくる奴ら相手に手加減なんて、とてもじゃないけれど、できないよ…何だか、これはやばいって死に物狂いで抵抗しているうちに頭がカッとなっちゃって…後はもう何が何だか…気がついたら、あいつら全員叩きのめしてて…」
「本当に孤立無援だったんだな、レイフ、それは…おまえが動転するのも無理はない…」
担任のロスが同情的に呟いた。
「だが、暴力で問題を解決しようとすることは認められんぞ」
渋い顔で言い聞かせる校長の前で、クリスターはしおらしげに肩を落とした。
「はい…オレも今は反省してます。オレ、今柔道教室に通ってるんです。そこで、いつも先生に、技を喧嘩に使うな、人に対して暴力を振るうことは武道家の恥だって教えられてて…それなのに、とっさにジョンを柔道技で投げ飛ばしてしまった。あれは、やってはいけないことだったと、すごく後悔しています…」

「ふむ…そこまで後悔しているのなら、レイフ、今回の暴力沙汰については私も大目に見てやりたいが」
喧嘩と聞いて初めは恐い顔をしていた校長も、段々気持ちを和らげてきたようだ。『レイフ』が嘘をついているようには、彼には見えなかったのだろう。確かに短気なところはあるけれど、気性のまっすぐな、素直ないい子ではないか。そんな想いが、彼の目のうちには読み取れる。
穏やかな空気が流れ始めた時、校長室の扉がノックされ、アイヴァースが入ってきた。
「おお、アイヴァース先生、アルビンは何と言ってましたかな？」
アイヴァースは、クリスターの傍らに腰を下ろし、相変わらず落ち着いた、本心の見えない顔で言った。
「ジョン達から苛めを受けていることは、アルビンは否定しました。やはり、彼らのことを考えると、パニックを起こすようです。けれど、彼はこうも言いました。レイフは何も悪いことはしていない、と」
ロスが、ぽんと手を叩いた。
「やっぱり。校長、レイフはアルビンを助けようとしたんですよ」
「うむ…そのようだな」
校長は、顎を手でさすりながら何やら考えると、クリスターに向き直った。
「レイフ、どうやら君の主張は正しいようだ。君は苛めをやめさせようとした。そこを相手に殴りかかられため、正当防衛をした。だが、それでも君が生徒達に怪我をさせたのは事実だ。ご両親にはその旨を連絡し、厳重注意をさせてもらうが、いいね」
「うう…どうしよう、父さんに怒られる…」
顔を引きつらせてみせるクリスターの肩に、ロスが励ますように手を置いた。
「事情は先生からも説明してやるよ、レイフ。おまえのやったことは手放しで褒められないが、理由のあったことだと、正義漢の君の

お父さんなら分かってくれるだろう」
今にも泣きそうな顔をするクリスターに、校長とロスは笑いを押し隠し、目配せしあった。可愛いものじゃないか。やっぱり子供だ。
「さて、では今日はもう帰りなさい、レイフ・オルソン。明日からもしばらく、君を呼び出して事情を確認することはあるだろうがね。アルビンに対する苛めの問題も解決しなければならないし、そうなると君に協力を求めるかもしれない」
「それは、もちろん構わないよ。オレにできることがあれば、何でもするよ」
クリスターは、にっこり笑った。心の中で、彼はレイフのようにガッツポーズで快哉を叫んでいた。
大人って、案外ちょろい。
「レイフ」
黙ってことの成り行きを見守っていたアイヴァースが、いきなりクリスターに向かって呼びかけた。クリスターは幾分ぎょっとして、彼を振り返った。
「帰る前に、私の部屋に少し立ち寄ってくれないかな。アルビンが苛めを受けていた状況について、もう少し詳しく聞きたいんだが」
「そ、それは…もちろん構わないけれど…」
レイフそっくりに戸惑ってみせるクリスターの内心にも、実際不安のさざなみが立っていた。
校長室を出、アイヴァースと2人きり、彼のカウンセリングルームに向かう間、クリスターは、自分の目の前を歩く男の、どこかよそよそしいものを感じさせる背中を凝視していた。
アイヴァースは長身で、クリスターよりまだ少し背が高い。弱々しい感じはしないが、痩せぎすなくらいで、ジャケットの袖口から除く手は骨ばっていて冷たそうだ。
「入りなさい」
アイヴァースはカウンセリングルームの扉を開いて、クリスターを招じ入れた。

部屋の内部は、基本的に前任のカウンセラーの時と変わっていない。落ち着いた色のカーテンにソファセット。その後ろには書きものをするためのデスク。壁に大きな鏡があるのは、前任のカウンセラーがまだ若い女性だったからだろう。奥には流しとコンロのある小部屋がある。変わった所は、本棚に並んだ分厚い専門書の多さだろうか。

本好きのクリスターの注意は、ついその本棚に注がれていた。だから、アイヴァースの鋭い眼差しが自分を観察していることには、気がつかなかった。

「クリスター」

アイヴァースがそう呼びかけるのに、クリスターは小さく身を震わせた。振り向こうとした瞬間、伸びてきたアイヴァースの手が彼の右頬から絆創膏をむしりとった。もちろん、そこには傷などない。

アイヴァースは、すっと目を細めた。

「やはりね」

特に何の感慨もなさげに、アイヴァースは言った。

「あ…」

身代わりを演じていたことを見破られたクリスターは、よろめくようにアイヴァースから後退りした。

「どうして…どうして分かったんです…？」

必死になって自制心を取り戻そうとしながら、クリスターはアイヴァースが興味なさげに肩をすくめるのを用心深く見つめた。

「校長もロス先生も気づかなかったのに、僕達のことなどほとんど知らないあなたがどうして…？」

「先入観というのは、案外くせものなんだ」

アイヴァースはクリスターに背を向けると自分のデスクの方に歩いていき、どさりと椅子に腰を下ろした。

「レイフは、君がついさっき演じていたような、気は荒いけれど素直でまっすぐな、子供らしい少年なのだろうね。私はそんなレイフのことも、その双子の兄のクリスターについても何も知らない。だ

からだろうね、校長室での君を何の思い込みもなく見られたのは。さっきの君と校長達のやり取りを第三者の目で眺めていて、私は何やら違和感を覚えた。校長もロス先生も、君にうまく誘導され操られているような気がしたんだ。それにね、君はひどく動揺して不安そうな子供のふりをしていたけれど、目だけは最初から最後までずごく冷静だったよ。まるで全てが計算づくであるかのようにね」

ひたすら絶句しているクリスターに、アイヴァースは薄い笑みを漏らした。

「いや、実際はそこまで考えたわけではないよ。だが、よく入れ替わって人を騙す双子に関わったことは、以前にもあったのでね。ピンときたんだ」

クリスターの頬が紅潮した。今度は、芝居ではなかった。

「このことを校長先生達に報告するんですか？」

固い声でクリスターは尋ねた。

「いや、そんなつもりはないよ」

アイヴァースは、別にクリスターを安心させるためでもなく、ただ淡々と告げた。

「君の弟が起こした騒動はうまく解決に向かっているというのに、それをわざわざ波立てるような面倒なまねはしないよ。君の正体を確かめたのは、ただ私の推測が正しいかどうか確かめたかったからだ。私には君が弟の身代わりを演じたことになど何の関心もないから、安心したまえ」

クリスターは眉間にしわを寄せた。

「僕がしたことについては目をつぶると？　いいんですか、カウンセラーの先生がそんなことをして？　本当なら、問題行動として担任と校長に伝える義務が、あなたにはあるはずですが」

「報告して欲しいわけじゃないだろう、クリスター？」

クリスターは黙り込んだ。

「…あなたのことは知っていましたよ、ドクター・デイビット・アイヴァース。あなたの本を僕は読んだことがあります」

「それは光栄だね」
あまり嬉しくもなさそうに、アイヴァースは唇をゆがめて笑った。
「一流の児童精神科医のあなたとこんな所で出会えるなんて、思ってもみませんでしたよ」
「今はただのスクールカウンセラーだよ」
クリスターはアイヴァースにもっと質問を投げかけたかった。しかし、アイヴァースは、クリスターとの会話を打ち切るようにデスクから立ち上がり、窓の外を眺める素振りで背中を向けた。
「君はそろそろ帰った方がいい、クリスター。これ以上私に用があるわけではないだろう。君が私に話したいことがあるのなら、後日改めて聞いてあげるから、そこの予約表に名前を書いていくといい」
クリスターは、デスクの上に置かれているカウンセリングの予約ノートに視線を落とした。唇を噛み締めた。
「あなたのその態度、がっかりですよ、アイヴァース先生。もっと違うふうな人なのかと思っていたのに」
「君がどんな期待を抱いていたのか知らないが、今の私はこんな人間だよ」
アイヴァースはクリスターを振り返りもしない。その素っ気無い背中を見つめているうちに、クリスターは段々本気で腹が立ってきた。
クリスターが興味を抱いたドクター・アイヴァースは、決して、こんなやる気のない、情緒欠陥の薄情者ではなかったのだ。
クリスターは、挨拶もせずにくるりと踵を返して部屋を出て行こうとした。しかし、ふいに立ち止まり、デスクの上の予約表を睨みつけた。
アイヴァースはやはり動かない。
クリスターの琥珀色の瞳が、次第に何かしら挑戦的な光を放ち始めた。
彼は、無言のままデスクに歩み寄ると、予約表を開き、明日の放課後の一枠に自分の名前を書きこんだ。

クリスターが黙って部屋を出て行っても、アイヴァースはついに最後まで何の反応も返してこなかった。

SCENE4

アイヴァースに見破られたことを除いては一応成功した身代わり作戦をレイフにバトンタッチした後は、クリスターは子供同士の喧嘩のようなつまらない問題は脇に押しやった。

今、彼の頭を占めているのは、アイヴァースのことだった。

愛読していた本の著者であるということで、アイヴァースにはクリスターはもともと興味を持っていた。下手をすれば親でさえ騙されてしまうクリスターの芝居に、アイヴァースだけが気がついた。何よりも、クリスターが漠然と抱いていたアイヴァースのイメージとは違う、とてもやり手のセラピストには思えない、他人に対して無関心な心を閉ざした態度に腹が立った。

（あれが本当の性格なら、とても子供相手のセラピーなんてできるはずがない。本から受けた印象では、信頼できる専門家で、仕事に対する情熱に溢れていて…それが会ってみたら、あんなふぬけだったなんて、がっかりだ）

レイフの手前、自分がアイヴァースに軽くあしらわれたなどとは、クリスターは口が裂けても言えなかった。弟ときたら、クリスターが見事に作戦を成功させたのを、やっぱり兄貴はすごいと無邪気に褒めまくるのだから。

「アイヴァース先生、クリスター・オルソンです」

クリスターがカウンセリングルームに入ると、タバコの臭いが彼の鼻を突いた。

デスクに座ってゆったりとタバコをふかしていたアイヴァースは、クリスターの顔を見ると、ふっと苦笑いをした。

「本当に来たのか」

「…退屈そうですね」

「ここは、とても平和な学校だからね。昨日起こった喧嘩と苛めくらいだよ、私が赴任してから問題らしい問題が起こったのは。カウ

ンセリング希望の生徒も、まだちらほらと言ったところだ。新任のカウンセラーがどんな人間なのか、まだ様子をうかがっているところなのかな。まあ、どうせ、進路についての相談や、友人関係、恋の悩み、もっと深刻なものでも苛めや両親の離婚など家庭環境の問題、その程度のものだからね、私が扱うのは。それ以上は、学校ではなく、ケースワーカーやもっと専門的な施設の担当だから」

クリスターがカウンセリングにやってきたのに、まだアイヴァースは悠然とタバコを吹かせている。クリスターは不愉快そうに顔をしかめた。

「学校内は禁煙のはずですが」

「だから？」

アイヴァースは少しも悪びれず、口からタバコの煙をふっと吐き出した。

その姿を睨みつけながら、クリスターはふとあることに気がついた。タバコを持つアイヴァースの指先が微かに震えている。別に緊張のためでも意識的にそうしているふうでもない。そう言えば、去年亡くなったクリスターの祖父の手も同じようにいつも震えていた。祖父の場合はパーキンソン病の症状だったが、まだ若いアイヴァースが同じ病気を患っているとは考えにくい。

「そこに座ってもいいよ、クリスター」

アイヴァースはやっとクリスターにソファに座るよう促すと、タバコを灰皿に押し付けて、立ち上がった。

「コーヒーを飲むかい？」

「お願いします」

アイヴァースは隣の部屋でコーヒーを煎れて、持ってきた。

「砂糖とミルクは？」

「ブラックで」

本当はミルクとコーヒーを半々で割って砂糖も少し入れたのが好みなのだが、クリスターはつい大人ぶってしまった。

アイヴァースはテーブルの上にカップを置くと、デスクの方に戻

り、引き出しから小さなブランデーのボトルを取り出した。目を真ん丸くするクリスターの前で、アイヴァースは自分のコーヒーの中にどくどくとブランデーを注いだ。
「学校内でタバコを吸ってお酒も飲む先生なんて、聞いたことがない」
「コーヒーに香り付け程度に入れるだけだよ」
香り付けという量ではなかった気がするけれど。ブランデー入りのコーヒーをすました顔で飲んでいるアイヴァースに、クリスターは呆れ返った。
「それなら、僕にも少し入れてくれませんか、ブランデー」
「子供には駄目だよ」
クリスターは正直カチンときたが、ここで怒ってみせるのもそれこそ子供じみていたので、ぐっと堪えた。
アイヴァースと向き合って黙ってコーヒーを飲みながら、クリスターは己の中で緊張が高まってくるのを意識した。
アイヴァースは全く落ち着き払っている。クリスターがいようがいまいが、どちらでも構わないといった風情だ。
それにしても、アイヴァースは、年のころはクリスターの父親とそれ程変わらないはずだが、タイプは全然違っていた。高い教育を受けたインテリ学者。単純明快な父親のラースと違って、見るからに知性的で、性格も複雑そうだ。どちらかというと母親のヘレナに近い人種かもしれない。
「アイヴァース先生」
ついに沈黙に耐えかねたように、クリスターは口を開いた。
「あなたの本を読んだことがあると、僕は言いましたよね」
「ああ。私は、児童書を書いた覚えはないのだがね」
クリスターは奥歯をぐっと噛み締めた。
「心理学に興味があるんです。あなたの本で、初めて手に取ったのは、問題行動繰り返す双子の姉妹について書かれたものでした。それで、他の著作にも興味を抱いて、読み漁って…とても強い印象を

覚えました。内容もよかったけれど、あなたのこの分野に対する熱意が伝わってくるようで…」
　アイヴァースはちらりとクリスターを見やった。その目は、相変わらず無関心なままだった。
　クリスターは胸の奥から抑えようのない怒りがせり上がってくるのを感じた。
「どうして、そのあなたが…天職を捨てて、スクールカウンセラーなんかになったんです？　あなたの患者達はどうなったんです？」
「クリニックはこの1年ほど開店休業状態でね」
　怒りに燃えた目で睨みつけてくるクリスターに、アイヴァースは軽く肩をすくめてみせた。
「君の期待を裏切って悪いが、私は以前のような情熱を仕事に対して燃やさせなくなってしまったんだ。この仕事をやる者にはよくあることだ。燃え尽き症候群という奴さ。仕事を投げ出して、のらりくらりしていたが、さすがに全く収入を断たれては困るので、この学校のカウンセラーの募集に飛びついたんだ。校長のミスター・プリルは私のかつての名声を知っていたので、学校勤めの経験がなくても私を雇ってくれた。私もここなら、まあ、そこそこやれそうな気がするよ。もう心に傷や病気を抱えた子供に関わるのはごめんなんだ。ここは幸い、荒れてもいない、とても平和な中学校だからね。私も気楽に仕事ができるというものさ」
「退屈じゃないんですか？　ここは、あなたのようなプロが能力を発揮できる場所だとは思えない。あなたがこれまで積み上げてきた実績を考えると―」
　アイヴァースの顔に、初めて感情らしいものがうかんだ。ひどく苦いものだった。
「私の仕事や研究はそれなりの成果をあげたんだろうがね。しかし、実際には、皆が思っているような、たいしたものじゃなかったんだよ。親を含めた周りの大人達にはどうしてやることもできず、傷ついた心を抱えて助けを求めている子供達に、私は救いの手を差し伸

べ、それなりに成功はした。しかし、全てが成功だったわけじゃない」
アイヴァースの口調にこもる忌々しげな響きに、クリスターははっと息を呑んだ。
「アイヴァース先生…」
一瞬気持ちを昂ぶらせたアイヴァースは、クリスターの呼びかけに我に返ったようだ。その顔は、再びもとの無表情な仮面に戻った。
「幻滅しただろう、クリスター」
アイヴァースはジャケットのポケットからシガレットケースを取り出すと、クリスターに断りもせずにタバコに火をつけた。
「さて、セッションの時間は終わりだよ」
「カウンセリングらしいこともしなかったくせに」
「君は、別に私のカウンセリングなど受けたかったわけじゃないだろう。ただの冷やかしだった」
アイヴァースはソファの背にもたれかかるようにして、クリスターを眺めながら、皮肉に口元を歪めた。
「私も、子供相手に無意味なおしゃべりをしたい気分じゃないんだ。それに、校長にも呼ばれている。アルビンに対する苛めの件でね」
出ていけとのあからさまな意思表示に、クリスターは悔しげに唇を噛み締めた。
「アイヴァース先生、僕は冷やかしのつもりでここに来たわけじゃない」
クリスターは視線を床の上に落とし、しばし逡巡した後、言った。
「例えば、こんな話をあなたに聞いてもらいたかったんです。以前僕が母親の蔵書の中で見つけた本のことです」
「君の読書感想など聞く時間はないよ、クリスター」
クリスターは、構わず続けた。
「プラトンの『饗宴』という本なんですが、先生は読まれたことはありますか？」
古代ギリシャ哲学の本など持ち出すクリスターを、アイヴァース

は怪訝そうに見つめた。
「その中に、こんな話があるんです。昔、神々の時代の人間は今のような姿ではなく、倍の大きさと力を持ち、1つの体に男と女、男と男、あるいは女と女と2つの性を持っていた。ところが人間達の驕慢さに怒ったゼウスの神は、罰としてそれら人間達の体を2つに引き裂いてしまう。かくして、人間は今のような1つの性だけを持つ体になったというんです」
　クリスターは、寒気を覚えたように、己の体に腕を回した。
「ところが、本来1つの体を断ち割られた人間達は、皆自分の半身を求めて一緒になってしまうんです。そうして、再び己が半身と一心同体になろうとしてかき抱きまつわりあって、他のことは何一つしなくなってしまう。相手と抱き合うこと以外はしたくなくなっていつまでも離れようとはせず、生きるために必要なことも放棄して、ついには飢えて死んでしまうんです」
　語りながら、クリスターは額にうっすらと冷たい汗がうかんでくるのを意識した。どうしようもない震えが足元からじわじわと全身に広がっていくのを、必死で抑えていた。
「その話を読んだ時、僕はとても恐くなったんです。何度も夢に見て、うなされて…忘れようとはしたけれど、この恐怖感からは逃げられなくて…だって、まるで僕達のことが書かれているみたいだったから…」
　込み上げてきた吐き気を堪えるように、クリスターは口元を押さえた。実際、彼は真っ青になっていた。
　クリスターが顔を上げると、アイヴァースが彼を正面からじっと見つめていた。先程までの投げやりな感じは影を潜め、眼鏡の下で僅かにみはられた瞳は鋭く、真剣そのものだ。
　しかし、クリスターがそう思ったのも束の間、アイヴァースは自嘲するように笑うと、これ以上クリスターの話を聞くことを恐れるかのごとく顔を背けた。
「時間だよ、クリスター」

アイヴァースは顎をしゃくって、後ろのデスクの上にある予約表を示した。
「その話以外にも何かあるのなら、次の機会に聞こう」
クリスターは失望感を隠し切れずに溜め息をつくと、立ち上がった。それでも、アイヴァースに言われたように次のセッションの予約を取ると、短く礼を言ってカウンセリングルームを出て行った。
アイヴァースの注視が背中に注がれているのを意識したが、振り返って確かめたい衝動を、クリスターは最後まで抑え続けた。

クリスターが家に着いた頃には、もう夕方に差し掛かっていた。
「レイフ？」
テレビの音声が聞こえてくるリビングを覗き込むと、案の定、レイフがテレビをつけっぱなしにしてソファの上でうたた寝をしていた。足元には柔道の胴着の入ったリュックが２つ。今日は近くの柔道教室に行く日で、クリスターを待ちながら寝入ってしまったのだろう。
「先に行ったらいいのに、今からじゃ間に合わないよ」
クリスターは溜め息をつくが、本当は少し嬉しかった。
レイフの眠るソファの前に膝をつくと、彼は弟の寝顔を覗き込んだ。
レイフの眠りはいつも深い。悪夢にうなされて起きてしまうなんてことも、彼にはないのだろう。
（僕は、アイヴァース先生に、今まで誰にも話したことのない、あの秘密を打ち明けたけれど、それでも、１つだけ彼にも黙っていたことがあるよ）
幸せで健康そのものの弟の寝顔を見つめながら、クリスターは胸のうちで囁きかけた。

（あの神話めいた話は僕をとても恐がらせたけれど、半身と抱き合って1つになったまま飢えて死んでしまった人間達を哀れとも思ったけれど…同時にこんなふうにも感じたんだ。それでも、彼らはたぶん幸せだった、失われた半身を探して世界中をさ迷い歩くよりかは、ずっと満ち足りた人生だったんだって）

レイフが小さく寝言を言ったので、それを聞き取ろうとクリスターは顔を近づけた。温かいレイフの吐息がかかるのに、クリスターは目を細めた。ふと、レイフの濡れた唇や血色のいいつやつやした頬に触れてみたくなった。

幼い頃は、クリスターとレイフはよくくっついて眠っていたのだ。レイフの肌の感触や匂いは、今よりもっと近かった。

クリスターが弟の上にそっと身を屈めようとした、その時、玄関で鍵をあける音がした。

「クリスター、レイフ？」

仕事から帰ってきた母親のヘレナの声だった。

「今日は柔道教室のある日でしょう、まだ家にいるの？」

クリスターは、慌ててレイフの眠るソファから飛びのいた。ひどく後ろめたい気分で呆然とクリスターが立ち尽くしていると、レイフがうーんと伸びをして目を覚ました。

「あ、あれ…クリスター、帰ってたんだ…ああっ、もうこんな時間だ！　柔道教室、早く行かないと！」

レイフは瞬時にソファから飛び起きた。

「もう、クリスターの帰りが遅いからだよっ。今まで何してたんだよっ」

慌てふためいて上着とリュックを引っつかみ、早く早くと急かす弟に、クリスターは動揺を押し隠しつつ、黙って従った。

SCENE5

ランチタイム前の３０分は、いつも読書の時間になっていた。図書室から思い思いの本を借りて読む時間は、兄と違ってあまり読書は好きではないレイフにとっては退屈なものだ。しかし、この時は違った。

レイフは机に座って一応形だけは本を広げていたが、実際ページに書かれた文章など読んではいなかった。彼の全神経は、今、机の中に隠してある『プレイボーイ』誌に集中していた。さっきの休み時間、友達から回ってきたものだ。友達が父親の秘密の戸棚から内緒で失敬してきたものだから、今日中に皆で回し見しなければならない。レイフに与えられたのは、この読書タイムだけだ。

レイフは鋭い目を監督の先生の方に向けた。ミセス・クーパーは、黒板の前の席で熱心にテストの採点を行っている。

よし、今がチャンスだ。

意を決し、レイフは机の中に隠していた大人向け雑誌をそろそろと引っ張り出して、膝の上に置いた。

どくどくと心臓の鼓動が鳴り響いている。派手派手しいあおり文句が飛びかう表紙でポーズを決めるビキニ姿の女の人を見ただけで、頭の中がかあっとなってくる。レイフが震える手でページをめくった、次の瞬間、何もつけていない金髪美女のグラビアが目に飛び込んできた。その素晴らしすぎる巨乳は、成人女性の体に免疫のないレイフにとっては、アッパーカットをまともにくらったような衝撃だった。

（うっ）

レイフの頭が爆発した。視界が真っ赤になった。いや、本当にレイフは血の色を見ていた。

ぽとりと金髪巨乳モデルのナイスバディの上に生々しい血が飛び散った。レイフはとっさに手を上げ、鼻を押さえた。

「ああ、レイフが鼻血を吹いてるーっ」と叫んだのは、誰だったろうか。
怪訝に思ったクーパー先生がやってくるのに、焦りまくったレイフは、雑誌を床の上に落としてしまった。
もう、最悪。
その後は、クラスメートの笑い声と先生の小言の中で、レイフは頭を抱えるばかりだった。全く、恥ずかしいことこの上ない、読書の時間だった。
「本当に何をやってたんだよ、レイフ。大人向けの雑誌を回し見ているのを見つかっただけならまだしも、巨乳モデルの裸に興奮しすぎて鼻血を吹いたなんて、僕は恥ずかしくて情けなくて…」
ランチタイム。
大勢の生徒達で込み合うカフェテリアの片隅で、双子達はサンドイッチを食べながら、先程のちょっとした事件について話し合っている。
「だ、だって…だってさ、本当に…すごかったんだから…あんな…あんな…」
言っているうちに、レイフは思い出してしまった。
また顔を赤くして鼻を押さえるレイフに、クリスターはとっさに身構えた。
「本当に、おまえは可愛いね、レイフ」
クリスターはふっと微笑んだ。
「あんな雑誌、今時珍しくも過激でもないのにね。皆、隠れて見ているし、中には古雑誌を学校に持ってきて売っている奴もいる」
「そ、そうなんだ…はぁ…」
皆すごいんだと感心しながら、レイフは胸を手で押さえ、溜め息をついた。
「クリスターは…そういうの平気なのかよ？」
「だって、ただのグラビアじゃないか。本当に裸の女の人に抱きつかれでもしたのなら、ともかく。それに、スタイルがいいだけなら、

うちの母さんなんか、今でもそこいらのモデルに負けないと思うよ」
「ば、馬鹿、母さんを巨乳モデルと一緒にするなよ！　家に帰った時に想像したら、どうしてくれるんだっ」
　ひいっと叫んで青ざめて、それこそムンクの『叫び』にそっくりなポーズで身をよじるレイフに、クリスターは口をすぼめた。
「そうだ、レイフ、僕は今日も放課後にちょっとだけカウンセリングルームに寄るから、クラブにはおまえ1人で先に行っててくれ」
　コーヒーを飲みながら、思い出したようにそう言うクリスターに、レイフは不服そうに眉を寄せた。
「また、カウンセリングルームかよ。ここの所、しょっちゅうじゃないか。そんなに、あのアイヴァースって先生が気に入ったのかよ。前のジーン先生の時は、一度もカウンセリングになんか行かなかったのに。大体、あのインテリ先生相手に何を話してるんだよ」
「レイフには興味のないだろう話だよ。心理学とかセラピーとか、先生の専門の分野ことを色々聞かせてもらっているんだ」
「ちぇっ、クリスターはセラピストにでもなる気かよ。オレと一緒にフットボールの選手になるんじゃないのかよっ」
　ぽっと出の新任カウンセラーに兄を取られたようで、レイフは悔しかった。しかし、そんなレイフをクリスターは慰めるふうもなく、椅子から立ち上がった。
「さあ、そろそろ午後の授業が始まるよ、レイフ」
　午後は選択授業で、レイフとクリスターは別になる。それに、能力別クラスでトップの成績を独走中のクリスターは、数学と語学では既に高校生レベルのものを学んでいて、年を追うごとに、彼ら双子兄弟が共有できるものはどんどん少なくなっていた。
「やだな」
「えっ？」
　楽天的なレイフも、時には不安で落ち込んだ気分になる。兄に置いていかれると思った時だ。
「何でもない。クリスターのことなんか、知るもんか。勝手にアイ

ヴァースのところでカウンセリングでも何でも受けたらいいんだっ」
癇癪玉を爆発させて、椅子からいきなり立ち上がると、レイフはクリスターをその場に残して駆け出した。これが小学生の頃なら、こんな時、クリスターは慌ててレイフを追いかけてきた。
しかし、クリスターがレイフの後を追ってくることは、もうなかった。
双子ももう13才の大きな中学生になっていたのだから、仕方がなかった。

放課後、クリスターがカウンセリングルームを訪れた時、アイヴァースはそこにいなかった。約束の時間だというのに、どこに行ったのだろう。扉の鍵は開いていたので、クリスターは勝手に中に入って待たせてもらうことにした。
クリスターがここを度々訪れるようになって、もう半月以上になる。しかし、アイヴァースの態度は相変わらず事務的で、いっかな打ち解けてはこない。だからと言って、クリスターの訪問を拒むわけではなく、彼が思いつくまま話すのに耳を傾けてはくれた。もっとも、それは大抵たわいのない雑談ではあったのだが。
（全く、あのやる気のないカウンセラーは、どこに行ったんだろう）
クリスターはちょっとイライラしてきた。初めはソファにおとなしく座って待っていたのだが、退屈だったので、立ち上がって本棚にずらりと並んでいるアイヴァースの蔵書を物色し始めた。
（こんなにすごい専門書をただ飾っておくだけで、実際にはセラピストとしての仕事などとっくに放棄しているくせに…）
それとも、こんな本を傍に置いておくということは、自分がかつて情熱を燃やした仕事に対して未練なりこだわりなりが残っているからだろうか。

クリスターはそれらの本を取り出してはぱらぱらとめくってみながら、頻繁に会って話すようになっても未だに本心の見えてこないアイヴァースについて、思いをめぐらせていた。
「あっ…」
一冊の古びた心理学の本を何気なく紐解いていた時、クリスターはページにはさまれていた一枚の写真を見つけた。アイヴァースが1人の若者と一緒に写っている。一体誰だろう。とても親しげに寄り添いあって。しかも、アイヴァースの顔には、クリスターが見たことのない明るい笑みがたたえられていた。
クリスターは写真を取り上げて見つめながら、ゆっくりと息をした。何気なく裏返してみて、彼ははっとなった。写真の裏には、乱れた字体で1つのメッセージが走り書きされていたのだ。
『僕は、あなたにとって、悲しむべき失敗例だったのかな、デイビット』
失敗例？
クリスターは再び写真を表にして、そこに写っている2人、アイヴァースと謎のメッセージを残したと思しき若者を凝視した。
若者もアイヴァースと同じように笑みをうかべているが、その表情はどことなくぎこちないもののようにクリスターの目には映った。カメラに向かって作り笑いをしているような。
その時、この部屋に向かって近づいてくる足音が聞こえた。クリスターは、一瞬迷ったが、写真をポケットの中に入れ、アイヴァースの本はもとの場所に戻した。
「クリスター、来ているのか？」
アイヴァースの声がし、扉が開かれた。クリスターは本棚の前で固い表情で立ち尽くしていた。
「どうした、そんな恐い顔をして」
「…約束の時間はとっくに過ぎていますよ」
時間に遅れたことを怒っているのだということにして、クリスターは己の動揺を押し隠した。

「それは、失礼なことをしたね、クリスター」
謝るのは口先だけで、本当は少しもすまなくなど思っていないいくせに。クリスターはくっきりと形の綺麗な眉を僅かに吊り上げた。
アイヴァースはいつものようにコーヒーを煎れて持ってきた。クリスターにはブラックで、自分のものにはブランデーをたっぷり注いで。
めったに話を振ってきたり自分から質問したりしないアイヴァース相手に話しかけるのは、もっぱらクリスターの方だった。さもないと、セッションの間中、気の重い沈黙が流れることになってしまうだろう。
そして今日の話題は、なぜかクリスターの家族のことになっていた。
「…だから、父さんは僕達兄弟がフットボールをやるのをすごく喜ぶんです。昔から、試合がある時には、仕事も放り出して応援に駆けつけてくれて…レイフが将来はプロになるなんて言うと涙ぐまんばかりにまた喜んで、いつまでも子供みたいなところがある人なんですよ。レイフの性格は、そんな父さんに似たんでしょうね。僕も父さんのことは好きですよ。ただ、物事を単純に表面的にしか捉えられない人だから、何でもかんでも父さんに打ち明けて相談するわけにはいかないけれど。父さんは僕達を宝物みたいに大事に思って愛してくれるけれど、理解してくれているかというと、そうじゃないんです」
「成る程ね。では、君のお母さんも、やっぱり君のことを理解できないのかな」
「いえ、母さんは、その点、口には出さないけれど分かってくれていると思います。僕らの母さんは、時々どうして結婚したんだろうって思うくらい、父とは対照的に物静かで、聡明な、目から鼻にぬけるような人なんです。結婚と出産のためにキャリアを捨てざるを得なくなったけれど、もともと、とても優秀な化学者だったんです。そのせいか、僕らに高い教育を受けさせることには熱心ですよ。僕

はどちらかと言うと、母さんとうまがあう気がします」
「そのお母さんになら、では、君は何でも相談できるのではないのかな？」
「僕が話せば、どんな悩みでも母さんはびっくりもせずに聞いてくれるし、分かってくれるだろうと思います。でも、僕自身が、そんな弱くて情けない姿を母さんに見せるのが、たぶん嫌なんです。僕はいつもしっかりしているし、大丈夫なんだって、思っていて欲しい」
「父親には分かってもらえない、母親にはよく見られたい、か。それでは、弟のことは、どう思っているんだい、クリスター？」
「大好きです」
　思わず即答してしまった後、クリスターは口をつぐんだ。珍しくもクリスターに自分から質問らしい質問をしてきたアイヴァースを、探るように見つめた。
「どうした？」
　クリスターは何となく面白くなかった。アイヴァースに対して、クリスターだけが自分のことを打ち明ける、質問されたらそれに素直に答える。一方で、アイヴァースは少しも自分のことを話さないし、心も開こうとしないのに。
「ゲームをしませんか、先生」
　クリスターの琥珀色の瞳が、挑戦的な光をたたえてくるめいた。
「ゲーム？」
「ええ、まず僕が先生の質問に答える。その後で、今度は先生が僕の質問に答える。答えるのが嫌なら答えなくてもいい。でも、自分が知りたい秘密を相手から聞き出すには、自分も相手の好奇心を満足させなくてはならないんです」
　アイヴァースの顔がふっと翳った。彼はたぶんこんな子供じみた提案など拒否するだろうとクリスターは思った。しかし―。
「分かったよ、クリスター。ただし、答えたくない質問については、お互い答える必要はないということだね」

クリスターは、正直びっくりして、アイヴァースのどことなく楽しげな表情にまじまじと見入った。
「君が質問してもいいよ、クリスター。今まで君は私に色んな話を聞かせてくれたからね」
クリスターは不覚にも頬が赤らむのを覚えた。気を取り直し、呼吸を整えると、ずっと胸の中に抱え込んでいた問いをアイヴァースに投げかけた。
「どうしてセラピストの仕事をやめたんです？」
息を詰めて待ち受けるクリスターの前で、アイヴァースは愛用のシガレットケースからタバコを取り出して、火をつけた。煙草の煙を深く吸い込み、しばし己の思索にふける様子だった。
そのしなやかな手に、クリスターは注意を引かれた。これもずっと気になっていることなのだが、老人のような無意識の震えを示す指先は、病的なものでないとしたら、何なのだろう。確か、ある種の薬物の副作用にもパーキンソン病に似た症状を示すものがあったはずだ。
「私も、かつて理想に燃えた精神科医だった」
アイヴァースが淡々と語り始めるのに、クリスターの考えは中断された。
「病み、傷つき、悩んで助けを求めている子供達を救うことが私の使命だと考え、この道に入った。がむしゃらにやってきて、少しずつだが私の仕事が世間に認められるようになった。たくさんの子供達を診てきたよ。どの子に対しても、私はやれるだけのことをやった。それなりの成果をあげ、小児専門のセラピストとして表彰も受けた。大勢の子供達はよくなった。しかし、すべてが成功だった訳じゃない。私の手にも負えない、重い精神疾患にかかっていた不幸な子供も中にはいた。一番口惜しいのは、私が治療の継続を望んでも、親がそれを望まなかった場合だ。それに、私自身も完璧ではない。時には治療の仕方や判断を過つこともあった。そんな子供達の悲惨な姿を私は忘れることができない。はるかに多くの成功例に目

を向け、忘れようとしても、どうしても、それら哀しい失敗例の子供達の存在は、私の心に亡霊のように取り付いて、離れてはくれない。重くて、重くて…他人の心を癒すセラピストとしてはもう限界にきてしまったのだと思うよ」

「失敗例…」

クリスターは、ポケットに隠した、あの写真を思い出した。アイヴァースを『デイビット』と呼んだ、あの若者は何者なのだろう。

「クリスター」

名を呼ばれて、クリスターは慌ててアイヴァースの方を振り返った。

「今度は、私が君に質問する番だよ。いいね？」

「は、はい」

クリスターは、つい緊張して、身構えた。アイヴァースはタバコを灰皿に押し付けると、ソファの背にゆったりと身を預けるようにした。

「クリスター、君は、生まれてからこれまで、弟と離れ離れになったことはあるのかい？」

ちょっと予想外の質問に、クリスターは目をぱちぱちさせた。

「僕達が離れ離れになったことですか？」

クリスターは首を傾げて、考え込んだ。

「僕達は…小さい時からいつも一緒で片時も離れたなどなかったけれど、そうですね、それでも、一度だけ離れて生活をしたことがありました。ほんの半月足らずのことだけれど、弟なしで暮らしたことは、あれが初めてで…とても辛くて不自由なものでしたよ」

「どうして、そんなことになったのかな？」

「父さんと母さんが大喧嘩をしたんです。いつもはすごく仲のいい夫婦なのに、父さんの馬鹿が一度だけ浮気をして、それがばれて…怒った母さんは、僕を連れてコネティカット州の実家に帰ってしまったんです。でも、レイフのことは父さんが離してくれませんでした。僕達が１１才の冬休みでした」

クリスターは、ふっと遠い目になって続けた。
「別に祖父母の家で暮らすことは初めてじゃなかったし、母さんもいてくれたわけだけれど、レイフがいないことに僕はどうしても慣れることができなくて落ち着かなくて…それどころかどんどん精神的に不安定になっていったんです。心と体の半分をどこかに置き去りにしてきたようで、何を見ても聞いても分厚い硝子越しに接しているようで実感が沸いてこなくて…僕は一体どうしてしまったんだろうって恐くなりました。それが、ある日電話をかけてきたレイフの声を聞いた時に、分かったんです。レイフを取り戻さないといけない、でないと、僕は本当におかしくなってしまうって。その後すぐに、僕は家出をしました」
「家出？」
「ええ、母の実家を逃げ出して、1人で長距離バスに乗って、レイフがいる家に戻ろうとしたんです」
クリスターはにっこりした。
「僕は年の割に体も大きかったから、別に1人でバスに乗っていても、昼間ならそれ程不自然じゃなかったけれど、さすがに長距離を移動するバスとなると家出少年だと疑われそうで冷や冷やしましたよ。でも、やらないわけにはいかなかったんです」
アイヴァースは、もはや口を挟むこともなく、クリスターにじっと見入ったまま、彼が語ることに耳を傾けている。
「あの場所はどこだったんだろう、距離的には半分くらい過ぎていたと思う。冬のことだから、日が暮れるのも早くて、もう真っ暗になっていました。バスがサービスエリアでとまっていた時のことです。窓の外には同じようなバスが一台とまっていました。僕は窓際に座っていたんだけれど、その時、何かにくいっと引っ張られたような感じがして、窓の外を見たんです。すると、そこにとまっているバスの窓に、僕の方を同じように振り返ってびっくりした顔をしている男の子がいたんです。見つけた瞬間に、僕は荷物を引っつかんで、バスの外に飛び出しました。隣のバスからも、やっぱりその

男の子が血相を変えて飛び出してきて…レイフだったんですよ。レイフも僕と同じことを考えて、実行に移していたんです。僕に会うために家出をして、祖父母の家に向かう途中だったんです」
　勝利を告げるラッパのような誇らしげ声で、クリスターは言った。
「僕達は抱き合って、サービスエリアの駐車場でわんわん泣いて再会を喜びました。あの時の感動はちょっと言葉にできないくらいで…割れてしまった皿の半分がぴたりと継ぎ目なくあわさった、そんな感じで…父さんや母さんが何をしようが、僕達はもう離れないって誓い合ったんです。それで、これからどうしようかって話になって…家に帰ったら、また引き離されるかもしれない。2人でどこかに逃げようって決めました。僕達はしばらくサービスエリアのカフェにいたんだけれど、夜遅くだというのに子供達だけでいることを怪しまれて、捕まえられそうになったところをまた逃げ出しました。それで、ハイウェイ沿いの野原を一晩さ迷って…早朝、疲れきって動けなくなったところをパトロール中の警官に保護されたんです」
　クリスターは、何か激しいものが胸の奥から込み上げてきたかのように言葉を切った。
「君達は、どこに行くつもりだったんだい？」
　どことなく呆然としたアイヴァースの問いかけに、クリスターは半ば夢見るように呟いた。
「それは分からないけれど、たぶん…」
「たぶん？」
「行けるところまで行ってみようと…2人一緒にいられる場所が見つかるまで…世界の果てまでも…」
　クリスターは黙り込んだ。彼の心は、レイフと一緒にさ迷った冷たい冬の夜に引き戻されていた。寒くて凍えそうになりながらも、心は温かい幸福感に満たされていた。世界から隔絶された、どこまでも広がるかに見えた平原のただ中で立ち尽くしながら、しっかり手をつなぎ合った弟の存在だけをクリスターは感じていた。
　アイヴァースがライターでタバコに火をつける音に、クリスター

はやっと現実に戻った。
「アイヴァース先生…」
アイヴァースが自分の告白について何と言うのか、クリスターは息を詰めて待ち受けた。
アイヴァースはタバコをふかしながら、しばし考え込んでいたが、やがてふっと笑って、軽くかぶりを振った。
「もう時間だよ、クリスター」
クリスターの顔に激しい落胆がうかんだ。アイヴァースは、とことん彼に対して無関心を通す気らしい。今の話にはかなり心を動かされたはずなのに、関わりを持つことを恐れている。
（この卑怯者…！）
クリスターはぎりっと歯噛みをした。
だが、アイヴァースは素知らぬふうを装ってタバコを吹かすばかりで、クリスターを見ようともしない。
クリスターは、腹立たしげに立ち上がった。そして、アイヴァースのデスクに近づくと、そこにあった予約表に、いつもどおり自分の名前を書き込んだ。
「子供相手に、何をそんなに恐がっているんです？」
クリスターの挑発にも、アイヴァースは乗ってこなかった。
クリスターはついに諦め、カウンセリングルームを出て行った。
部屋の外で、ほっと息をついたクリスターは、ポケットの中から例の写真を取り出した。謎めいたメッセージを残した若者の顔を、問いかけるかのごとく見つめた。
（ここに写っているアイヴァース先生は、今とは全く違って見える。どうして彼があんなふぬけになってしまったのか、この写真に隠された秘密を探れば何か分かるかもしれない）
そうして、クリスターは探偵をすることを決意した。

SCENE6

探偵には、やはり助手がつきものだ。
探偵をするにあたって、クリスターの頭にはそんなことがうかんだ。
レイフが一緒だったら面白いだろうなどと想像してみた。しかし―。
「兄ちゃん、待てよ！」
金曜の夜、恨めしげで不満たらたらな顔をしたレイフが詰め寄ってくるのに、すぐさま彼は頭の中でその考えを否定した。
（却下）
レイフにそんな隠密活動などできるはずがない。騒がしくて、落ち着きがなくて、秘密を黙っていられない弟に話したら、すぐに他の人間にも双子が何かやっていると分かってしまうだろう。それに、この件については、クリスターはレイフを関わらせたくないと思っていた。
「明日のサイクリング、どうして急に行かないなんて言い出すんだよっ。約束だったじゃないか。クリスターの嘘つきっ」
明日の休みは、双子達は友達と一緒にサイクリングと釣りに行く予定にしていた。しかし、クリスターはこの土日を探偵活動にあてることにしたので、弟との約束は反故にしなければならない。
「悪いけど、他にしたいことができたんだよ。おまえはマイケル達と約束どおり出かけたらいい。双子だからって、いつも一緒に行動しなければならないわけじゃないんだから、たまには僕なしで遊んでおいで」
「何だよ、それ」
レイフは不満そうに頬を膨らませた。
「一体、1人でどこに行って、何をするつもりなんだよ。こそこそと何を企んでいるのさ」

案外鋭いところをついてくる弟に、クリスターは一瞬困った。
「…探したいものがあるから、ボストンの公共図書館まで行こうと思うんだよ。一緒に行きたいならおまえもついてきていいけれど、退屈なだけだよ、たぶん」
図書館と聞いて、レイフはたじろいだ。本当に本の虫であるクリスターは、図書館を訪れるとほとんど一日中動こうとしないし、それに一旦活字の世界に没頭し始めるとレイフの相手などしてくれない。レイフにとっては、できれば避けたい場所なのだ。
「ちぇっ、それならいいよ」
レイフはやっとあきらめたようだ。
「お土産を何か買ってくるよ」
がっくりと肩を落とす弟に、クリスターは少し罪悪感を覚えたが、自分だけの秘密の計画を今更中止にする気はなかった。
明日の探偵活動のために、クリスターは既にそれなりに下調べも行っていたのだ。
親しくしている事務員の所に遊びにきたふりをして、学校の事務室に保管されていた職員リストを盗み見し、アイヴァースの自宅の住所と電話番号を調べた。更には、電話帳で彼のクリニックの所在地も割り出した。明日はまず、ボストン市内にある、休業中の彼のクリニックを訪ねてみるつもりだった。
（アイヴァース先生が熱心に取り組んでいた仕事を放棄しなければならなかったのには、それなりの理由やきっかけがあったはずだ。あの写真に先生と一緒に写っていた若い男の人にも、何か関係があるのかも知れない。自分のことを失敗例だと書いていたあの人は、先生の何なのだろう。アイヴァース先生の仕事場に行って、その辺りのことを調査してみたら、先生の秘密が分かってくるだろうか）
いっぱしの探偵気取りのクリスターは、一夜明けて、よく晴れた土曜の朝、予定通り出発した。レイフとお揃いの愛用のリュックサックには、ノートと筆記用具、資料用のファイル。住所を書いたメモと例の写真はポケットに入れて、ボストン市行きのバスに乗った。

そうしてボストンの中心部まで出ると、今度は地下鉄に乗って、予めあたりをつけておいた駅で降りた。
後は、住所を頼りに、道行く人に尋ねたりして、クリスターはアイヴァースが営んでいたクリニックを探した。近くにビジネス街がある、なかなか小奇麗な場所だ。それらしい通りを半時間ほどうろつきまわって、やっとクリスターは目的のビルを探し当てた。
「間違いない、このビルの3階だ」
ビルの入り口にあまり目立たずにあったメンタル・クリニックの案内には、ドクター・アイヴァースの名前が記されている。
クリスターは彼に診察を希望する患者を装ってビルに入ると、一階の管理人室からこちらをじっと見ている男ににこりと笑って、エレベーターに乗り込んだ。
（堂々としろ。後ろめたそうな態度を取ると、それこそ怪しまれるぞ）
さすがに少し不安がつのってきたクリスターは、エレベーターの中、両手で頬を軽く叩いて、気合を入れた。やがて3階に着いたエレベーターから、意を決して、降りる。
アイヴァースのクリニックはエレベーターのすぐ正面にあったが、彼が以前語ったように、本日休診の小さな看板が出ていて、中に人のいる気配もない。
ドアの前に立ったクリスターは、そこに緊急連絡先の電話番号を記した張り紙があることに気がついた。アイヴァースの自宅の電話番号とは違う。ここで働いていた事務員のものであったら、幸いだ。クリスターはノートにその電話番号を書き込むと、再びエレベーターで1階に下りていった。
「あの…すみません…」
クリスターは先程自分をじろじろと眺めていた管理人のところに行くと、いかにも無害な学生といった顔をして、声をかけた。
「3階にあるクリニックなんですが、もう随分長いんですか、休診って…？」

「坊やは、ドクター・アイヴァースの患者さんかい？」
「昔、お世話になったことがあるんです。先生のおかげで、すごくよくなって…別に診察希望ではないんですが、今度この街から引っ越すので、その前にドクターにも一度挨拶をしたいなって思いついて、ここに」
「それは、残念だね。ドクターはこの所ここには姿を見せないよ。少し前までは事務員さんがいて急な患者さんの応対をしていた様子だけれど、診療はほとんどおこなっていなかったんじゃないかな」
「閉院になったということなんでしょうか」
「さあね、でも、このままだと近いうちにそうなるだろうね」
　初めは疑い深げだった黒人の管理人も、育ちのよさそうなクリスターの態度に心を和らげ、打ち解けて話すようになってきた。
「以前はすごくはやっていたクリニックなんだがね。いい先生だとの評判を聞きつけて、遠くからも患者がやってきた。いや、本当にアイヴァース先生はいい人だったよ。わしも、自分の子に何かあったら、あの先生を頼ろうと考えてたくらいさ。それが、もうかれこれ1年くらい前だね、ドクターが大変な災難に見舞われて、それ以来、すっかり調子を崩しちまって、仕事どころじゃなくなったのさ」
「災難？」
「新聞にも確か載ってたと思うけれどね。ドクターは、このクリニックで危うく殺されかけたんだよ、銃で」
「う、撃たれたんですかっ？！」
　この時ばかりは本当に驚いて、クリスターは思わず叫んだ。
　ほとんど一日中1人きりの仕事で退屈していたらしい管理人は、クリスターが事件について何も知らないことに興をそそられたらしい。深刻そうな顔つきをして、クリスターの方に顔を寄せると、声をひそめて囁いた。
「ああ、しかも、大きな声では言えないが、ドクターを殺そうとした犯人なんだが、何でも彼のもと患者らしいっていうんだよ。今の坊やみたいに、昔お世話になった先生のもとをある日思い出したよ

うに訪ねてきて、それから、ちょくちょく遊びに来ていたらしいな。近くの大学に通っている大学生ということだった。わしも、ちらっと見たことはあるよ。とても、あんな大それたことをするような子には見えなかったが…なかなか綺麗な顔をした、おとなしくて、頭のよさそうな少年だったよ」

「先生を撃ち殺そうとしたなんて、どうして…？」

クリスターは半ば呆然となって、呟いた。

「そのあたりの事情は、よく分からんよ。理解できないと言った方がいいかな。あんな人格者の先生を殺そうとするなんて、あの若者は頭をちょっとやられていたに違いないとわしは思うんだがね。タブロイド紙などでも、犯人は精神科の通院治療中だったと書かれてた。嘘か本当かは知らんがね。昔治療を受けたことのある先生を逆恨みでもしておったのかな」

クリスターはポケットの写真を取り出してこの男に見せたい衝動に駆られたが、怪しまれるのはまずいので思いとどまった。

「その犯人は、どうなったんです？」

すると、管理人は傷ましげな顔になった。

「死んだよ。ドクターに重傷を負わせて、犯人はすぐに頭を撃って自殺したんだ。まだ若いのに、気の毒な話さ」

「死んだ…」

写真の中でアイヴァースに寄り添うようにして笑っていた若者の姿が、クリスターの脳裏にうかびあがった。その笑顔を傍らのアイヴァースの笑顔と比べて、クリスターは少し違和感を覚えていた。何だか、心から楽しんで笑っているようには見えなかったのだ。

クリスターはそのビルを後にして、管理人に教えてもらった近くのカフェに立ち寄った。おいしいコーヒーを出す、くつろげる店で、アイヴァースもよく通っていたという。

クリスターはそこでも、カフェの店員相手に聞き取り調査をした。

「ドクターのことはよく覚えているわよ」

コーヒーを運んできた若いウエイトレスは、アイヴァースのこと

を尋ねる見慣れぬ客、クリスターの顔やスタイルにさっとチェックを入れるような視線を走らせた後、愛想良く笑って答えた。
「もう随分顔を見ていないけれどね。すごくお気の毒だと思うわ。いい先生だったのに、あんな事件に巻き込まれて…怪我が治って仕事には復帰したものの、立ち直ることはできなかったみたいね…事件後しばらくぶりにうちに立ち寄ってくれた時も、別人みたいな憔悴した顔つきだったわ…ねえ、噂なんだけれど、先生が殺されかけた犯人とはすごく親しく付き合っていて…もしかしたら恋人だったんじゃないかって話もあるのよ。本当にそうだとすると、先生のあの落胆振りの理由も分かるわ。あんまりショックだったから、ついには先生まで心のバランスを崩して、別の医者にかからざるを得なくなって、ついにはクリニックも閉めてしまったんだっていうのよ。本当に、可哀想なドクター…」
女の人が噂好きだというのは、本当らしい。一回話を振っただけで、聞かれたこと以上に詳しくアイヴァースについて話してくれたウエイトレスに感謝しながら、クリスターはカフェを後にした。
次にクリスターが訪れたのは、ボストンの公共図書館だ。そこで、アイヴァースが殺されかけたという事件の新聞記事を探そうと思ったのだ。
程なくして、クリスターは、ある地方紙に掲載されたその事件についての記事を見つけた。小さくはあるが、犯人の顔写真も載っていた。
クリスターはポケットから取り出した写真と新聞の顔写真を見比べた。
（やっぱり、この人だ…アイヴァース先生を殺そうとして、その直後に自殺した犯人）
クリスターは、若者の顔についにたどり着いた時、急にひどい疲労感を覚えて図書館の机に突っ伏してしばらくぐったりした。そうしながらも、彼の頭の中には、初めて知ったアイヴァースの過去の秘密がぐるぐると渦巻いていた。

アイヴァースは昔の患者に殺されかけた。アイヴァースに重傷を負わせた後自殺したそのもと患者とは、彼は個人的にとても親しい間柄だった。だから、アイヴァースはショックを受けて、仕事に対する情熱もなくして、クリニックが閉院寸前になるまで追い詰められたのだ。

この日クリスターが知ったのは、あまりにも悲惨で、根の深いものを感じさせる秘密だった。知ってしまったことに、今更ながらクリスターは幾分怖気づいている。反面、うかびあがった別の疑問について更なる好奇心を覚えている。

どうして、あの若者はアイヴァースを殺そうとしたのか。パトリック・バークスという名前だということも、今のクリスターは知っている。アイヴァースは、パトリックとても親しかったそうだが、恋人だったという話は単なる噂にすぎないのか。

（先生自身も医者にかからなくてはならないくらいに精神的に参っていたらしいけれど、今はもう大丈夫なんだろうか。学校での仕事は普通にできているみたいだけれど、セラピストに戻って患者を診るのは、やっぱり辛いのかな）

クリスターは、いつの間にかアイヴァースの心配などをしている自分に気がついた。会えば腹が立つばかりの相手ではあるが、他の大人とは違って、手強い、一癖あるアイヴァースには、クリスターは興味を引かれていた。好奇心に駆られるがままこんな探偵まがいのことをして、彼の過去をほじくり出して、そのことに少し罪悪感も覚えているかもしれない。行き着いた真実のあまりの暗さに、さすがに同情的になっているのかもしれない。

（いい先生だったとは、昔の彼を知っている人たちは口を揃えて言っていた。あの事件の裏にどんな深い事情があったのか知らないけれど、早く立ち直って、現場に復帰して、昔のような素晴らしい仕事を続けて欲しい…）

帰りのバスに揺られている最中も、クリスターはずっとそんなことを考えていた。

「クリスター、遅かったじゃないかっ！」
夕食の時間ぎりぎりにクリスターが家につくと、今か今かと待っていたらしいレイフがリビングから飛び出してきた。
「もう、オレにはいつも門限までに帰らなきゃってうるさいくせにずるいや、兄ちゃん」
「ごめん。図書館で、つい本を読むにのめりこんじゃって」
奥のリビングから、テレビを見ていたらしいラースが玄関の方に顔を覗かせた。
「クリスター、早く着がえてこい。もう夕飯にするぞ。おまえが帰ってくるのを皆待っていたんだ」
ラースも少し渋い顔をしていた。
「ごめんなさい。アイヴァース先生に教えてもらった心理学の本を、どうしても読みたくって…」
アイヴァースの名前を聞いて、レイフは不機嫌そうに顔をしかめた。
「またアイヴァース先生かよ。クリスターってば、すっかり影響受けてさ。そんなにいい先生なら、オレも、どんなふうなのか、いっぺんカウンセリングを受けにいってみようかな」
「駄目だよ」
強い声で言うクリスターを、レイフはびっくりしたように見つめた。
「必要ないのに、ただの冷やかしで行ったりしたら、先生に迷惑だよ」
「ク、クリスターだって冷やかしみたいなものなんだろっ」
逃げるように2階の部屋まで駆け上がるクリスターを、レイフは追いかけてきた。

「気に入らないぞ、クリスターのアイヴァースに対する態度っ」
部屋の中にまでついてくるレイフに、クリスターは溜め息混じり、リュックサックから取り出した箱を差し出した。
「はい、約束のお土産」
途端に、レイフの目が輝いた。
「あ、あ、ＮＦＬのトレーディングカードじゃないかっ」
街で見つけた大きなカードショップで買ったカードのセットを渡すなり、たちまち機嫌を直すレイフに、クリスターは脱力しそうになった。
（ほんとに素直というか単純というか…）
それでも、床に座り込んで早速箱を開け、中のアルミパックを嬉々として破って中身を確かめだすレイフに、気の張った一日を送ったクリスターは心が和むのを覚えた。
「カードをチェックするのは後にしようよ、レイフ。先に下に行って、食事にしよ」
レイフは顔を上げ、にこっと笑った。
「クリスター、ありがとうっ」
興奮に頬を紅潮させた弟は本当に可愛くて、思わず抱きしめたくなる衝動をクリスターはぐっと堪えた。

その翌日、クリスターは、アイヴァースのクリニックで控えて帰った緊急連絡先の番号に、家の近くの公衆電話から電話をした。
念のため、確かめておきたいことがあったからだ。
事務員らしい女性に、クリスターは低い大人の男の声を演じて、あるタブロイド氏の記者を名乗った。
「…実は例の事件の加害者である大学生のことで、アイヴァース先生にちょっと尋ねたいことがあるんですが…ええ、実は先生と加害

者が恋人同士ではなかったかという噂がありましてね…」
　クリスターは、カフェで聞いた『噂』の真偽をどうしても確かめたかったのだ。アイヴァースと一緒に写真に写っていた大学生パトリック、アイヴァースを殺しかけたもと患者は彼の『恋人』であったのか。
　新聞記者を装ってアイヴァースの連絡先を尋ねてみせるクリスターに、事務員の女性は、何か嫌なことを思い出したらしく、いきなり怒り出した。
「もう取材なんか真っ平！　１年以上も前の事件のことを今更蒸し返してどうしようっていうんですっ。ドクターがパトリックと同性愛関係にあったかなんて、私に聞いたって知るものですかっ。そんな話は、もうたくさんよっ」
　クリスターは幾分焦って言葉をつごうとしたが、彼女はすぐさま電話を切ってしまった。
　嘘の電話までして、知らない相手をあんなに怒らせてまで、どうして、そんなことを確かめずにいられなかったのか。
　クリスターは通話の切れた電話の受話器を見つめたまま、しばし考え込んだ。
（つまりは、それが事実ということ、か）
　アイヴァースはパトリックと恋愛関係にあった。
事務員は直接言葉で噂を肯定した訳ではないけれど、受け答えの雰囲気から、クリスターは何がしかの真実があの噂には含まれているということを確信していた。

SCENE7（前書き）

この話には性描写が含まれていますので、苦手な方はご注意ください。

SCENE7

休み明けの月曜の放課後。

クリスターはカウンセリングの予約を入れていたのだが、あんな秘密を知った今は、アイヴァースの顔を見るのは何となく気が重かった。できればもう少し気持ちが落ち着いてから会いたかったが、自分から約束を破るのもためらわれたし、それに、つい盗み出してしまった写真をアイヴァースに気づかれないうちに隙を見て元の場所戻したいという思いもあった。

「先生、クリスターです」

ノックをして、クリスターは部屋の中に入った。すると、アイヴァースは手を後ろで軽く組み、クリスターに背中を向けて窓の前に立っていた。

クリスターが入ってきても振り返ろうとしない背中は、いつも以上にとっつきにくく見える。決して溶けることのない氷でできた壁のようだ。

クリスターは視線を動かし、アイヴァースの手前にあるデスクを見た。そこに置かれた本に、クリスターは小さく息を呑んだ。

例の写真がはさんであった、古びた心理学の本だったからだ。

「その本は、私が親しくしていた子の持ち物でね。大学で心理学を専攻していたんだよ。分からないところがあったら、彼は私によく質問しにきてね」

クリスターは汗をかき始めた。心臓が急にせわしなく打ち始めるのを呆然と感じていた。

「ソファにかけたらどうだい、クリスター」

クリスターはすぐにこの場から逃げ出したい気分だったが、それをするには彼のプライドはあまりにも高すぎた。怖気づく自分を鞭打つようにして、クリスターはソファに腰を下ろした。

「コーヒーを煎れてこよう」

クリスターが何をしたのか知っていながら、いつもどおりに振る舞うアイヴァースは、だからこそ、余計に恐かった。
やがてアイヴァースはコーヒーのカップを2つ持って、隣の小部屋から戻ってきた。
アイヴァースがブランデーをコーヒーに入れるのを、クリスターは強張った顔で見守った。
その時、アイヴァースの目がすっと上げられた。
「君も、入れるかい？」
「え？」
「ブランデー」
子供には駄目だと前は言ったくせに。どういうつもりだろうといぶかりながらも、クリスターは頷いた。
アイヴァースはすかさず、クリスターのカップにもブランデーを注いだ。思わずクリスターが止めたくなったくらい、たっぷりと。
「苦い」
湯気に混じってたちのぼるブランデーの香りにむせそうになりながら、クリスターはコーヒーを一口飲んだ。やっぱり入れ過ぎだと思った。馴染みのない苦味が舌を刺す。しかし、まずいと言って飲まないのも、やはり子供だと侮られそうな気がして、クリスターは我慢してその苦いコーヒーを飲んだ。
「さて、クリスター、今日も例のゲームの続きをするのかい？」
先週クリスターが提案した、あのゲームのことだ。一瞬ためらった後、クリスターはこくんと頷いた。
「今回は、私から先に質問するよ」
クリスターは身を固くした。
「どうして、あれを盗んだりなどしたのかな？」
クリスターは、震える瞼を閉じた。
「盗むつもりではありませんでした」
クリスターは再び目を見開くと、自分を奮い立たせるようにはっきりとした口調で答えた。ポケットから写真を取り出し、アイヴァ

ースの前に置いた。
「すぐに返すつもりだったんです。すみませんでした」
アイヴァースは顎に指を添え、クリスターに探るような眼差しを向けている。相変わらず小刻みに震え続けるその指先を見ながら、込み上げてくる緊張を振り払おうと、クリスターは更に言葉を続けた。
「…あなたの本を眺めている時にその写真を偶然見つけて、とっさに持って帰ってしまったんです。僕は、あなたのことをよく知りたかった。この写真のあなたは今とは別人のように見えたし、一緒に写っているのが誰なのかも気になりました。それに写真の裏に走り書きされたメッセージにも何か深い意味があるようで…あなたがどうしてこんなにも変わってしまったのか、なぜセラピストの仕事をやめてしまったのか、この写真に隠された秘密を探れば分かるかもしれない、そんなふうに思ったんです」
「秘密を探る？」
アイヴァースの頬が微かに震えた。
「はい」
クリスターは、迷うように、一瞬口ごもった。
「実は先週末、僕はボストンまで出かけました。あなたのクリニックを訪ねて、その周辺で色々聞いてまわったり調べたりしたんです」
クリスターはうっすらと頬を赤らめた。
「パトリック」
アイヴァースがはっと息を呑む音を、クリスターは聞いた。
「あの大学生が原因なんですか？　あなたのもと患者で…たぶん恋人だった人…彼に撃たれて殺されかけたことが、その後で彼が自殺したことがショックだったから、パトリックのことを思い出すような仕事にはとても復帰などできなくなったんですか？」
こんな直截的な言い方をしては駄目だと、クリスターは内心思っていた。アイヴァースを傷つけてしまう。けれど、一端口を開くと、クリスターは自分でもとめられなくなっていた。

「あなたは、パトリックを大事に思っていたんですね。あの写真に写っていたあなたの顔を見れば分かります。心から楽しげで打ち解けて…あなたも、昔はあんなふうに他人に対して心を開いていたんだ。でも、今は…」
アイヴァースは相変わらずのポーカーフェイスだが、ソファの肘掛に乗せられた手は、ふつふつとたぎる感情を押さえ込もうとしているかのごとくいつの間にか固く握りしめられている。
「今のあなたは、昔とは別人のようです。僕が本を通じて知った優秀で熱意のある精神科医、かつてのあなたを実際に知っていた人が言うような人格者、あの写真の中で温かい笑顔をうかべていた人とも…かつては一流のセラピストと言われたあなたが、他人との接触を固く拒んで、心を完全に閉ざしている」
瞳をふっと揺らしたかと思うと、アイヴァースはクリスターから逃げるように目を逸らした。それを見て、クリスターはついかっとなった。
「僕が本気で話しても、あなたは正面から向き合おうとしないでするりと逃げてしまう。他人の心の中を見ることが、そんなに恐いんですか。あなたは卑怯だ」
気持ちが昂ぶるがまま、クリスターは続けた。
「いつまでも、そうやって昔の傷を引きずるつもりなんですか？　立ち直る気はないんですか？　当時の新聞記事を読んでも、パトリックがあなたを殺そうとしたのは逆恨みで、あなたのせいじゃない…」
「私のせいだよ」
いきなり激しい声に上から被せるようにして言われて、クリスターは黙りこんだ。
「君がこそこそと私の周囲をかぎまわって、何を見聞きしてきたのか知らないが、クリスター、私の過去についての君の勝手な憶測は間違いだらけだよ」
頭ごなしに否定されたクリスターは思わずソファから身を起こし

て怒鳴りかえしそうになったが、ぐっと我慢して、座りなおした。
「あなたのせい？　どういう意味です？」
それでも、クリスターは怒りに我を忘れることはなかった。用心深く探るような眼差しをアイヴァースの冷たい顔にあてて、鋭く問い返した。
「僕の考えが間違っているのなら、どうしてパトリックは、かつての恩人であり恋人でもある、あなたを殺そうなどとしたんです？」
アイヴァースは、仮面のような無表情のままクリスターを凝視していたが、眼鏡の下の瞳には普段はうかがえない強い光が宿っている。それが怒りや憎しみであっても構うものかとクリスターは思っていた。無関心よりは、よほどましだ。
「君を見ているとパトリックを思い出すよ、クリスター」
ふいにこんなことを言うアイヴァースに、クリスターは戸惑った。
「彼が最初に私のクリニックを訪れたのは、彼が１２才の時だった。君ほど鼻っ柱の強い子ではなかったが、頭がよくて、感受性の強い、大人びた少年だったよ。何かにひどく怯え、緊張して、追い詰められた目をしていたが、それを押し隠すことのできる子だった。実際、学校では何の問題もない優等生で通っていた。しかし、ほとんど無意識に自傷行為を繰り返すのと原因不明の頭痛と発熱を何度も起こすことから、私を紹介されたんだ」
アイヴァースは唇を笑みに形に吊り上げたが、クリスターに向けられた半分閉ざされた目はひどく暗かった。
「およそ半年間セッションを持つうちに、パトリックは私を信頼して、心を開いてくれるようになっていった。両親がうまくいっていないことや、母親の関心が障害を持つ妹にばかり向けられているといった、家庭内の悩みを話してくれるようになった。私はこの母親との関係が彼の問題の主たるものだと判断し、母親も呼び出して一緒にセッションを受けさせるなどして治療を試みた。彼はよくなったように見えたよ。表情も見違えるように明るくなったし、自傷行為もやみ、頭痛の症状も出なくなった。それで、私は彼の治療はひ

とまず終了したと判断したんだ」
　アイヴァースは一瞬言葉を切った。その端正な顔が、深い痛みを覚えたかのように僅かにしかめられるのを、クリスターは息を詰めて見守っていた。
「パトリックは私と別れるのを嫌がった。だが私は、もう君はよくなったんだからこれ以上のセッションは必要ないと言った。けれど、彼があんまり落胆していたので、話したくなったらいつでも電話をしておいでと付け加えて、彼を帰らせたんだ。本当は、あのまま帰らせるべきではなかったのにね」
　アイヴァースが急に立ち上がったので、クリスターはぎくりとした。彼はデスクの上からパトリックの持ち物だったという心理学の本を持ってくると、膝の上に置いて、その表紙をそっと撫でた。
「私は、取り返しのつかない過ちを犯していたんだ。パトリックの問題は、実際何も解決していなかった。私は肝心なことを見過ごしてしまっていた。パトリックを悩ませていたのは、母親とのギクシャクした関係ではなく、父親の方にあったんだ。パトリックの話の中では父親は影が薄かったので、私はつい彼の母親や妹の方にばかり気を取られてしまった。パトリックは、実は父親から性的虐待を受けていたんだよ」
「えっ？」
　クリスターは、思わず、小さな声をあげていた。
「そのことを母親を含めた誰にも打ち明けることができず、追い詰められていたんだね。私のことはかなり信頼できる相手だと思ってはいたものの、そこまで打ち明ける勇気も確信も持てないでいたんだ。パトリックの症状が改善したのは、父親が家を出て別居状態に入っていたからだ。パトリックが治療の終了を告げられた時に不安を示したのは、じきに父親が帰ってくることを知っていたからなんだ。私に助けを求めていたのに、気づいてやれなかった」
　アイヴァースはクリスターがテーブルの上に置いた写真を取り上げ、食い入るように眺めた。

「私がそのことに気がついたのは、9年も経った後だった。パトリック自身の口から真実が語られ、彼の撃った銃弾が腹を貫通して、初めて自分の犯した罪の大きさを思い知らされたよ。結局、私の治療が終了してすぐに家に戻ってきた父親から、彼はその後も虐待を受け続けたんだ。誰にも打ち明けることもできず、母親が離婚を決意して今度こそ父親と離れられるまで、3年間もそんな地獄を味わった。私と出会い、助けてもらえるという希望を抱きかけたのに打ち砕かれた、その後は、彼は本当に絶望してしまって、逃げ出すことをあきらめてしまったんだよ」

パトリックの写真を見つめるアイヴァースの顔にうかんだ苦悩の深さに、クリスターは居たたまれなくなってきた。彼を問い詰める気概も瞬く間にしぼんでいったが、クリスターが黙り込んでも、アイヴァースの懺悔めいた告白は止まらなかった。

「パトリックの治療が終了して9年が経ち、私が彼のことなど思い出すこともなくなった頃、再び彼は私の前に現れた。私の記事を新聞で見たと言ってね。私は児童精神科の分野での功績を認められて、そのことで市から表彰をもらったんだ。その記事を読んで懐かしくなったので、私に会いたくなったと言うんだよ。パトリックは、私の影響を受けて、将来はセラピストになろうと決意し、大学で心理学を学んでいると言った。嬉しかったよ。昔の患者が今は立派な若者になって、私に最高の感謝の言葉を述べてくれたんだ。パトリックは、それからも私のクリニックをしばしば訪れるようになった。たわいのないおしゃべりをしたり、時には彼が学ぶ専門的な分野についての質問に答えたりすることもあった。私がそんなふうに患者と個人的な関係を持つことはないんだが、治療終了後もう9年も経っているのだし、私にとって彼はもはや患者ではなかった。実際、最初は私にとってパトリックは若い友人でしかなかったが、次第に私は彼に惹かれていった。若く魅力的で、機知に富んだ話をする、明るく笑っているかと思ったらふとした折に憂いのこもった顔も見せる、彼のことが気にかかるようになった。パトリックも、私に対

し友情以上のものを期待する素振りを見せるようになった。それで思い切って彼の気持ちを確かめて、つまりは、めでたく恋人として付き合うようになった訳だ。全てが順調であるように思えた。私はとても幸せで満ち足りていたよ。仕事もうまくいっていたし、名声も恋人も手に入れた。あんまり幸せだったから、パトリックが時々見せるアンバランスな言動や私に対する謎めいたほのめかしについては、あまり重要視しなかったか、意味を取り違えていた。他人の心を見抜くプロが、相手が心を許せる恋人となると全くの盲目になっていたんだ」

アイヴァースの深甚な告白を見守ることしかできないでいたクリスターは、その時、いきなり妖しいめまいのような感覚に襲われた。視界がぼやけ、アイヴァースの姿が二重に見える。彼は震える手を上げ、とっさに額を押さえた。

「パトリックが私に近づいたのは、初めから意図的なものだったんだ。私の記事を読み、自分を救えなかったセラピストが世間では名声を得ていることに改めて怒りをかきたてられたんだろうね。私が幸福なのに対し、パトリックが子供の頃に受けた傷はずっと彼を苦しめ続けた。父親から逃れられた後も、彼は悪夢に取り付かれたままだった。人に対して心を開くことができず、いつも何かに怯え続け、自分を愛することもできない。パトリックは精神科のクリニックに通い続けていたが、そのことすら私は知らなかった」

クリスターは頭をはっきりさせようと激しくかぶりを振ったが、めまいはやむどころかますますひどくなってきた。語り続けるアイヴァースも声も、さっきから遠くなったり近くなったりを繰り返している。

「ある日、私の家で2人きりでいる時に、パトリックは私がかつて彼に施した治療のことを話題にした。自分のやり方は正しかったと今でも思うかとパトリックは私に尋ねた。私は、正しい治療判断を下したと思うと答えた。だからこそ君はよくなったのだろうと。すると、パトリックはいきなり興奮しだして、私を罵り、喚き散らし

た末、家を飛び出していった。それからしばらくパトリックは姿を見せなかった。私は心配になって探し回ったが、彼は住んでいるアパートにも、他のどこにもいなかった。それが、半月程経ったあの日、パトリックは前触れもなく私のクリニックを訪れた。ひどくやつれ疲れきった様子でね。その狂おしげにさ迷う目を見て、さすがの私もこれはただ事ではないと悟った。正直、危険を感じないわけではなかったのだが、私は彼を救いたかったし、救えるとも思っていた。まさか、パトリックが銃を隠し持っていて、私を道連れに自殺する覚悟だったとまでは予想できなかったんだ」

　クリスターは体から急速に力が抜けていくことに慄然となった。ソファの上にずるずると崩れていきながら、助けを求めるようにアイヴァースを見た。

「2人きりになるなりいきなり銃を向けるパトリックに、私はショックを受けたよ。そうして彼は、私が知らなかった真実を、私の犯した過ちと罪を語った。パトリックは幼い子供のように泣いたよ。私を罵ったかと思えば、また泣いて…その姿は助けてくれと訴えているようにも見えた。私は、もう一度チャンスをくれと彼に訴えかけた。今度こそ、君を救ってみせる、君を治してあげると…だが、パトリックは冷ややかに笑いながら首を横に振ったんだ。私には救うことなどできないと言って、私に向かって発砲した。私は…撃たれた瞬間、それも仕方がないと思った。当然の報いだと思った。だが、パトリックは…私にとどめを刺すことはなく、代わりに自分の頭を吹き飛ばしてしまった。もしかしたら、初めから私を殺すつもりではなかったのかもしれない。一命を取りとめ退院した私が、パトリックが私の蔵書の中に紛らせるようにして残した、この本を見つけた時、その中に挟まれた写真の裏のメッセージを読んだ時、これがパトリックの復讐なんだと絶望的に悟ったよ。罪の償いをしたくても、もう彼は取り戻せず、役立たずの私だけがこの世に残されてしまった」

　クリスターは息苦しさに喘ぎながら何とか身を起こそうとするが、

力が入らず、またずるずると崩れ落ちてしまう。ふと、彼は目の前のテーブルに置かれたコーヒーのカップを見た。舌を刺す苦い味を思い出した。まさかと思いつつ、顔を上げると、己を冷ややかに見下ろすアイヴァースと目があった。

「これが、君の知りたかったことの全てだよ、クリスター。満足かい、詮索好きの探偵君？」

クリスターは呆然とアイヴァースを見上げた。

「アイヴァース先生…一体、何を…僕に…？」

アイヴァースはクリスターが飲んだコーヒーのカップにちらりと視線を投げかけた。

「私が常用している薬を君のコーヒーの中に少しね。私にとってはどうということはないけれど、慣れていない君にはきついだろう。ましてや、アルコールと併用するなんて、最悪だ」

クリスターは一瞬、目の前が真っ暗になったような気がした。

「信じられない…生徒に薬を盛るカウンセラーなんて…知らない…」

悪徳カウンセラーは、冷たい笑いで答えた。

「先入観というものはくせものだと、私は前にも言ったはずだよ、クリスター」

アイヴァースはおもむろにソファから立ち上がると、窓の方に歩いていって、カーテンを引いた。外から差し込む光が遮られ、部屋に暗い影が下りた。

「クリスター、君は心理学に興味があると言ったね。だが、もしセラピストや精神科医になりたいなら、やめておくことだ。君には向かないよ。君は他人の心になど何の興味も持ってはいないし、敬意も払っていない。君が関心を覚えるのは、自分自身と、せいぜいもう1人の心だけだ」

アイヴァースの声音は低く、感情の抑えられたものだったが、何かしら刺すような響きがこもっていた。

「他人の心の中に土足で入り込んできて、触れて欲しくない傷にあえて触って、傷口を開いた。君の身勝手な好奇心や欲求を満足させ

るために、何故私がまたこんな痛みを覚えなければならないのかな」
平静を装った声に時折混じる不協和音。狂気の影。
逃げなければとクリスターはもがくが、体は完全に自由を失っていた。
「君は、自分がしたことの代償を私に払わなければならないよ。クリスター、今度は君が傷つく番だ」
アイヴァースはソファの上で何とか起き上がろうともがいているクリスターの脇を悠然と歩きすぎると、部屋の扉の鍵をかけた。
「何を…する気なんです…？」
クリスターは威嚇をこめて問いかけたつもりだが、その声は震え、アイヴァースには彼が恐がっていることが分かってしまっただろう。
アイヴァースはクリスターの質問には答えず、ゆっくりと近づいてきた。ソファの前に膝を着き、必死になって睨みつけているクリスターの顔を覗き込んだ。
「君は、どうしても私にパトリックを思い出させるよ、クリスター。憎らしくなるくらいにね」
アイヴァースはシルバーフレームの眼鏡をはずし、テーブルの上に置いた。
「あっ…」
クリスターは喫驚して思わず悲鳴をあげた。いきなりソファの上に押さえつけられたかと思うと、アイヴァースの体が覆いかぶさってきたからだ。
「な、何を…う…」
のしかかってくる相手の胸を押し返そうとするが、今のクリスターに抵抗できる力は残っていなかった。なす術もなく組み敷かれ、抗議の声をあげようとする口も覆いかぶさってくる唇にふさがれた。
クリスターは、衝撃のあまり、束の間硬直した。
（嘘…だ…こんな…僕がこんな目にあうなんて…）
これが普段だったら、細身のアイヴァース相手にクリスターがそう簡単に負けるはずはなかった。まんまと罠にはめられたことを知

り、恐怖も吹き飛ばすほどの怒りに満たされ、クリスターは低く唸った。
「つっ…」
アイヴァースがクリスターの上からとっさに身を引いた。噛み付かれた唇を押さえ、彼はつくづくとクリスターを眺めた。
怒りに打ち震え、獰猛な山猫のように歯をむき、金色の瞳を爛々と燃やしている少年の姿に、アイヴァースはふっと笑った。そうして首からネクタイを解いた。
アイヴァースは再びクリスターの体を捕まえると、うつ伏せに押さえつけた。手を背中に回してネクタイで縛ると、彼はクリスターをまた仰向けにした。
「口もふさがれたいかい、クリスター？」
アイヴァースを睨み上げるクリスターの顔が、屈辱に真っ赤になった。
アイヴァースはどうあってもクリスターを許すつもりはないらしい。クリスターには彼に逆らって逃げ出す力はないし、助けを求めて叫びたくても声もろくに出ない。それに、カウンセリングの約束でもない限り、放課後、生徒や教師がこの部屋の付近に立ち寄ることはない。これ以上の抵抗は無駄と悟り、クリスターは怒りに身を震わせながら、ぷいっと顔を背けた。
「おとなしくしていれば、それ程ひどい目にはあわせないよ」
アイヴァースの低い含み笑いに、クリスターはきつく目を閉ざした。
アイヴァースは噛み付かれることを恐れてか、クリスターの唇に再び触れようとはしなかった。
シャツの中に忍び込んでくる、彼の手の冷たさにクリスターは一瞬身をすくめた。
突発的な怒りに紛れてかけていたが、薬物の作用による妖しい酩酊感が再びクリスターを圧倒していた。胸苦しく、ともすれば暗い奈落の底に引き込まれていきそうな不安感。半ば麻痺したように体

の自由はきかないが、どうしたことか、肌に触れられる感触だけはいやに鮮明だった。
　むき出しにされた胸を滑るアイヴァースの骨ばった手。その乾いた感触に肌が泡立つ。怖気とも快感ともつかぬ震えが触れられた部分から全身に広がっていく。滑らかな指先にいきなりきつくつねり上げられて、クリスターはとっさに出かかった悲鳴を歯を食いしばって堪えた。
「本当に君は強情だな、クリスター。泣いて許しを請えば、私を止められるかもしれないのに」
　アイヴァースの揶揄に、クリスターは最後の意地とばかりに、冷ややかに返した。
「やめる気など…ないくせに…」
「確かに、そうだな」
　アイヴァースの頭がクリスターの胸の上に下りてきた。温かい吐息がかかるのにさえ、敏感になった肌は反応してしまう。鎖骨の上に唇が押し当てられきつく吸われるのに、クリスターは、たまらず、身をよじって逃げようとしたが、すぐに引き戻された。
　クリスターの体は次第に熱くなってきた。息が上がって、ついには堪えきれずに、彼は小さな声を漏らした。
「あ…っ…」
　慄いたようにクリスターは唇を引き結んだ。羞恥心が、余計に体を熱くする。こんなことなら、いっそ口も塞いでもらった方がよかったかもしれない。
　他人の体なのに勝手を知ったようなアイヴァースの愛撫に、体の芯にもとっくに熱がともってしまっていることが、クリスターは情けなかった。クリスターの意思に反して、体はしっかり快楽を覚えている。しかも、１１才の夏休みに訪れたキャンプ場でのアリスとの初体験よりも、もしかしたら、こちらの方が気持ちいいかもしれないのだ。
（最悪）

苦い敗北感を味わいながら、クリスターはアイヴァースがズボンに手をかけ、下着ごと手際よく下ろしてしまうのを意識した。
（ひっ…）
アイヴァースの体がクリスターにのしかかってきた。今度は押し返すことはできない。背中に回されて縛められている手首を何とか自由にしようと悪戦苦闘しながら、顔を背け、クリスターは己を圧倒しようとする快感と恐怖に必死で耐えていた。
ついに、クリスターは手首に巻きつけられていたネクタイを解いた。瞬間、彼はアイヴァースの体に打ちかかった。
しかし、その手は掴まれ、呆気なくソファの上に押しつけられた。クリスターはきっとなって目を見開き、己を見下ろす男の顔を睨みつけた。
クリスターははっと息を飲んだ。残酷な揶揄や皮肉を含んだ、勝ち誇った顔がそこにあると思っていたのだが、クリスターにひたとあてられたアイヴァースのブルーグレーの瞳は何かしら真摯で思いつめた表情をうかべていた。
だが、そう思ったのも一瞬のこと、クリスターは悲鳴をあげて背中を弓なりにそらせた。
「やっ…嫌だ…やめろ…！」
クリスターの意地も誇りも、この一瞬消し飛んだ。精一杯の力を込めて抵抗し、アイヴァースの胸に腕を突っ張り逃れようとしたが、再び両手とも押さえつけられてしまう。
「嫌だ、こんな…離せ…痛…っく…」
その声にこもった自分のものではないかのような淫らな震えに、クリスターは愕然とした。固い内壁を探り、ぐるりとかき回す指の感触にぞくりとした快感の炎が背筋に走る。
唐突に指が引き抜かれ、クリスターはほっと全身の力を抜いた。
「あっ？！」
視界が暗転した。
次の瞬間、クリスターは絶叫した。目から涙が迸った。アイヴァ

ースのワイシャツに爪を立て引き裂かんばかりに引っ張るのが、彼が示せる最大の抵抗だった。
更に奥深く体の内部を突かれて、再び彼は叫んだが、体に回った薬のせいか、それは弱々しくかすれた悲鳴にしかならなかった。
「あっ…や…あぁ…！」
細身の割に力のあるアイヴァースはクリスターの腰を手で支え固定して、何度も責めたてた。
クリスターの頭はぐらぐらと揺れ、貫かれる度、体は痙攣を起こしたように反り返った。力をなくし、振り回されるだけとなったクリスターは、ソファからずり落ちそうになったが、アイヴァースの手が彼の腕をつかんで引きずり起こし、体の上に跨らせた。
「いっ…つ…」
クリスターは喉を引きつらせ、固めた拳をアイヴァースの肩に叩きつけた。
「こんなこと…よくも…よくも……あぁっ」
アイヴァースの腰が再び力強くうねり始めるのに、クリスターは激しく打ち震え、滑り落ちないよう彼の体にしがみ付いた。
クリスターは汗びっしょりになっていた。引き裂かれる痛みと自分の意思に反して蹂躙される屈辱に、どうしようもなく涙が溢れてくる。
「クリスター…」
鉄面皮のアイヴァースも、さすがにここまで来ると冷静さを保っていることなどできないらしい。クリスターの耳元でなされる囁きは熱く濡れている。
首筋に押し付けられる唇から逃れようと、クリスターは頭をずらした。そこで、ふいに目に入ってきたものに、はっと息を飲んだ。
「あ…」
クリスターの目が張り裂けんばかりに見開かれた。彼が見つけたのは、壁にかけられた大きな鏡だった。鏡はアイヴァースに抱かれているクリスターの姿を映している。

クリスターは慄いたように目を閉ざし、また開いた。
彼の瞳は吸い付けられるように鏡に映る自分の顔に行った。男の肩越しにこちらに向けられているその顔は上気し、体を駆け抜ける快感に我を忘れ、目には濡れたような光をたたえている。とても自分の顔だとは思えなかった。だとすれば、誰のものなのか。クリスターをそっくりそのまま写し取ったような、この顔は―。
突然、理由の分からない異様な昂ぶりがクリスターを襲った。内側からはぜてしまいそうな、凄まじい興奮だ。
アイヴァースに深々とえぐられてのけぞる彼の口からあがったのは、紛うかたない悦びの叫びだった。クリスターはアイヴァースの頭を抱きしめ、もっとと要求するように腰を揺すった。そうしながらも、その目は鏡に映し出された己の姿から離れなかった。
アイヴァースはいぶかるように一瞬動きを止めたが、怒った猫のような呻き声をクリスターが発し髪を引きむしろうとするのに、再び腰を使い始めた。
クリスターはもう逃げようとはしなかった。積極的に相手が与えてくる快楽をむさぼり、貪欲に求めた。
アイヴァースは戸惑いつつも、感極まったような叫びを漏らした。彼は一瞬、クリスターがおかしな薬のせいでハイの状態にぶっ飛んだのかと疑ったかも知れない。しかし、やがてアイヴァースは、己の上で乱れ狂う少年が何かをひたと見つめていること、その口から低い呟きが漏れていることに気づいた。
「…ふっ…レイ…く……レイ…フ……」
クリスターは、鏡の中のもう1人に向かって陶然と呼びかけていた。心臓が破裂しそうなほど高鳴っている。こんな悦びは他には知らない。肌までもが歓喜に震え、ちくちくと疼いている。
「レイフ」
熱い息と一緒に、クリスターはその名前を胸の奥から押し出した。
アイヴァースは数瞬の間凍りついたように動きをとめ、それから一転怒りに駆られたような激しさでクリスターを責めたて、解放を

迎えるための最後のステップを一気にのぼりつめた。

「クリスター」
車の助手席の窓から夕闇に沈み始めた校舎の方をぼんやりと眺めていたクリスターは、その呼びかけにゆっくりと振り返った。
「はい、アイヴァース先生？」
ハンドルに手をかけたまま、アイヴァースは深い思案に暮れている様子だった。
クリスターは首を傾げて、そんな彼を眺めた。
「もしかして、後悔しているんですか？」
アイヴァースは、皮肉っぽく笑った。
「さあ、どうかな」
そう言いながら、アイヴァースはクリスターの言ったことについて考えを巡らせている。ポケットからタバコを取り出すと、ライターで火をつけた。
「あなたが僕にしたことを僕は誰にも言うつもりはありませんから、その点では安心してください」
アイヴァースのライターの火が微かに震えた。
「だからと言って、許した訳ではありません。あなたは僕に半殺しの目に合わされても文句の言えないようなことをしたんですからね」
「半殺しか。過激だね」
アイヴァースは軽く肩をすくめてみせた。
「でも、僕が先にあなたの心を傷つけたのも本当だから、その分は差し引いて、これからあなたとどう付き合うか考慮するつもりなんです」
アイヴァースは、思わずクリスターの方に顔を向けて、まじまじと彼を見た。

「あなたが僕を騙して薬を盛ったことも、力づくでレイプしたことも許せないけれど、どうやら、僕は同性愛自体にはそれ程嫌悪を覚えていないらしい」
意外な発見をしたというように、クリスターはクスッと笑った。
「それにね」
クリスターの声に、一瞬険がこもった。
「僕は惨めな被害者ぶるのは好きじゃない。それなら、いっそ共犯者になった方が、僕のプライドは痛まないし、たぶん性にあっているんです」
車のハンドルをきつく握っているアイヴァースの手の上に、クリスターは自らの手を重ねた。
「次のセッションはいつ予約したらいいのかな、先生？」
にっこりと無邪気な子供の顔を演じてクリスターは問いかけるが、その眼差しは鋭く、容赦がなかった。
「クリスター」
アイヴァースの瞳に不安の翳りが過ぎった。恐れているのかもしれなかった。
「君は…まだそんなことを言っているのか。今の私は、薬の力を借りなければ自らをコントロールすることもできない。他人の悩みを聞いて解決するセラピーなどできるはずもないんだ。君の悩みが何なのか問題がどこにあるのか分かる気はするが…解決方法を教えてあげることも助けてあげることもできないよ」
「あなたがそう思い込んでいるだけではないのかな、先生？」
アイヴァースは嘆息した。
「それほど僕が恐いですか？」
クリスターが手を撫でるのに、アイヴァースはさりげなくハンドルから手を離し、タバコを吹かしている口元に持っていった。
その肩が軽く揺れた。アイヴァースはハンドルの上に顔を伏せるようにして、低く笑った。
「クリスター」

アイヴァースは頬杖をついて、クリスターの顔を下から覗き込んだ。顔は笑っているが、その目は真剣そのものだった。
「君は、悪魔か？」
タバコを灰皿に押しつけると、アイヴァースは観念したように言った。
「木曜の放課後、カウンセリングルームに来なさい。その日は他の予約は入れないようにするよ。君のための特別セッションだ。これで満足かい？」
「ありがとうございます」
アイヴァースは助手席に行儀よく座っているクリスターを、何か言いたげな目で見つめた。
「クリスター…覚えているのか…分かっているのか？　あの時、君は…」
「ああ、そうだ、アイヴァース先生」
ふいに思いついたようにぽんと両手を打ち鳴らすクリスターに、アイヴァースは続く言葉を飲み込んだ。
「差し引き分、こういうことにしませんか。口止め料として、やっぱり僕は欲しいものがあるんです」
アイヴァースは呆れたような顔をした。
「それは恐喝という犯罪行為だよ」
「あなたが僕にしたことこそ立派な犯罪ですよ」
さらりと切り返すクリスターにアイヴァースは軽く片方の眉を跳ね上げると、あきらめたような吐息をもらし、車のエンジンをかけた。
「分かったよ、クリスター。それで、一体何が欲しいんだい？」
「レイフ！」

夕方遅くに帰ってきた双子の兄が大きな段ボール箱を抱えて部屋に入ってくるのに、レイフは目を真ん丸くした。
「何だよ、それ？」
クリスターは箱を床の上に置くと、何でもないことのようににっこり笑った。
「アルバイト料代わりに買ってもらったんだよ、アイヴァース先生に。今日は先生の蔵書の整理を手伝っていてね、それで遅くなったんだ」
ダンボール箱を開けると、レイフがコレクションをしているＮＦＬのトレーディングカードの箱が出てきた。その数、ざっと１ダース。
「す、すごい、大人買いかよっ」
興奮して鼻をぴくぴく動かす弟の横顔を、傍らにしゃがみこむようにしてじっと眺めながら、クリスターは尋ねた。
「嬉しい？」
レイフは喜色満面振り返ると、クリスターに体ごとぶつかるように抱きついてきた。
クリスターはちょっとよろけたが、何とかその場に踏みとどまった。
「うん、うん、ありがとう、兄ちゃん！」
レイフはクリスターの顔にぐいぐい頬を擦り付け、ついでに唇も押し付けてきた。クリスターは小さく息を飲んだが、レイフが気づくことはない。
「そ、それは…よかったね」
クリスターの心臓はドキドキと高鳴っていた。
無邪気にはしゃぐ弟の体をなだめるように叩きながら、腰に覚えた鈍い痛みに、クリスターは密かに顔をしかめていた。

SCENE8

この頃のクリスターはどこか変わったような気がする。
レイフは、漠然とした不安を覚えていた。
少し前からクリスターがレイフに隠れてこそこそと何かしていたのは分かっている。そう、クリスターはレイフに秘密を持っている。アイヴァースが赴任してきた頃からだ。
レイフには、どうしてクリスターがアイヴァースにそれ程興味を抱くのか、それなのにレイフには彼を近づけまいとするのか、さっぱり分からなかった。何でも共有してきた間柄だというのに、この頃のクリスターはレイフから遠いところにいってしまったようで、寂しかった。
態度が余所余所しいだけでない。雰囲気までも何か違う。
もともとクリスターの方がレイフより早熟なのは認めざるを得なかったのだが、ここしばらくクリスターは一段と大人びてきたようだ。ふとした仕草が大人っぽいというか、それともセクシーと言うのだろうか、こういう雰囲気を。
クリスターが現れると、クラスの女の子達の視線が磁石に引きつけられるように一斉にそちらに向く。
レイフは、彼女らの前に立ちはだかって、そんな風にじろじろ見るなと叫びたかった。やきもちだとは自覚していたが、クリスターに対してか、それとも女の子達に対してなのか、レイフ自身にもよく分からなかった。
まるでクリスターだけ先に大人になってしまったようだ。いつものように無邪気にじゃれつくのもためらわれるような、とっつきにくさが漂っている。
それに、気のせいか、クリスターはレイフを避けているようだ。放課後は相変わらずアイヴァースの所に入り浸っているし、クラブに行くのもレイフとは別々だ。柔道教室だって、何かと理由をつけ

てさぼっている。
　クリスターのレイフに対する接し方や態度の何が変わったという訳ではないが、レイフにはピンときてしまうのだ。クリスターの奥深いところで何かが変わったこと、それを彼がレイフには明かしてはくれないということも。
　こんなことがあった。
　ある夜、レイフは珍しくも寝苦しくて熟睡できず、うとうとと浅い夢を見ていた。たぶんホラー系の悪夢も入っていたのだろう、軽くうなされて目を開くと、何かが上からぶら下がるようにしてレイフを覗きこんでいた。
　逆立った紅い髪、闇の中できらきら光る金色の目をしたお化け。
　ひいっと叫んで飛び起きたレイフは、ベッドの天井に頭をしたたかにぶつけ、再び布団の上に沈没した。
「ご、ごめん、おどかしたみたいだね」と囁いたのは、上のベッドから身を乗り出してレイフを眺めていたクリスターだった。
「な、何だよ、コウモリみたいに、何してんだよ、クリスター？」
　クリスターはしばし黙ってレイフを見つめた後、もう一度ごめんと謝ってベッドの中に戻っていった。
　レイフは心配になって、ベッドから這い出すと、はしごを上ってクリスターを覗き込んだ。
「恐い夢でも見たのかよ？」
「おまえと一緒にするなよ」
　レイフはむっとした。しかし、クリスターのことがやはり気になって、少しの間迷った後、彼の布団を引っ張りあげて中にもぐり込んでいこうとした。
　すると、どうしたことか、クリスターはすごく怒り出した。
「バカッ、おまえのベッドは下だろう、勝手に入ってくるなっ」
　びっくりするレイフの顔に、クリスターが振り回した手が当たった。
　レイフはしょんぼりと自分の寝床に帰るしかなかった。

やっぱり、クリスターはどこかおかしい。
叩かれてひりひりする頬っぺたをさすりながら、レイフは1人、哀しい気分でそんなことを考えた。
一体、何が原因なのだろう。
唯一の心当たりは、やはり、あのへっぽこカウンセラー、アイヴァースだ。
（あのインテリ野郎、クリスターに何かしやがったんじゃないだろうな。クリスターに何か吹き込んで、オレに対して余所余所しくなるように仕組んだ訳じゃないだろうな。双子だからっていつまでもくっ付いているのはおかしいとか何とか、父さん達が言うようなことを。クリスターってば、アイヴァースには一目置いてるみたいだから、奴の言うことなら案外素直に聞き入れてしまうかも）
半分当たって後は大間違いの自分勝手な憶測をめぐらせるうちに、レイフは段々本気でアイヴァースに腹が立ってきた。クリスターを取られたような気がして、彼のことはもともと気に入らなかったのだ。
（一度ガツンと言ってやった方がいいかもしれない。クリスターに変なことを教えるな、オレの兄貴に手を出すなって…クリスターのことはオレが一番よく知っているんだから、ぽっと出の訳知り顔のカウンセラーになんか負けるものか。そうだ、アイヴァースと勝負するんだ…勝負…）
しばらくは怒りと闘志を燃やしていたものの、レイフの集中力は長持ちしない。やがて彼はとろとろとし始め、二段ベッドの上のクリスターがまだ寝付けずに寝返りを打っているにも気づかず、いつの間にかぐっすり眠り込んでいた。
昼下がりの明るい日差しも、カーテンを引いたこの部屋の中には

届かない。
仄暗い部屋の空気はよどんで、胸苦しくなる熱をはらんでいるようにクリスターには感じられた。
放課後も遅く、学校の中は静まり返っている。少なくとも、この一角には誰も近づかない。
熱くなった耳に届くのは、クリスターと床の上でこうして絡み合っている男かそれともクリスター自身の口から時折漏れる喘ぎや呻き声、汗ばんだ肉体がこすれ、密着する音、交接した部分がたてる、湿ったような淫らな音くらいだ。
「クリスター…クリスター…！」
興奮に我を忘れた男が腰を突き上げ、激しく揺するのに、クリスターも抑制を外れた高みに一気に上り詰める。既に慣れ親しみ、おなじみのものになった感覚だ。
クリスターは口を開いて叫ぼうとする。だが一瞬、この相手が誰だったのか、呼び違えそうになった。
「…アイヴァース…先生…」
慎重に呼びかけ、アイヴァースの動きに合わせながら、この交わりの中で生まれる一瞬の快感をクリスターは貪った。
「あぁーっ」
世界が暗くなり、弾け飛んだ。
アイヴァースが動きをやめ、クリスターの胸の上にぐったりとのしかかってくる。
その重みを味わいながら、クリスターはやはり違和感めいたものを覚えていた。
欲しいものとは、やはり違う。肌の感触や温もりが違う。匂いが違う。それらの全てを超えた何かが、これとは違うのだ。
終わったとたんにすっと冷めた頭の片隅でぼんやりと思いながら、クリスターは無意識に伸ばした腕で『恋人』の体を抱きしめた。

行為の終わった後の重くだるい体を起こして汗や汚れを拭き取ると、クリスターは脱ぎ散らかした服を身に着けた。立ち上がろうとして、奥深くに覚えた痛みに一瞬動きを止める。
「辛いのかい？」
声のした方を振り返ると、早々と着衣を直したアイヴァースがクリスターに気遣わしげな目を向けていた。
「心配してくれるんですか？」
クリスターがにこりと笑うと、アイヴァースはすぐに顔を背けた。
一見以前と変わらぬポーカーフェイスを装ってはいるが、それでも、アイヴァースの自分を見る目が変わってきていることをクリスターは知っている。もはや無関心ではいられなくなったということだ。
クリスターがここを訪れる日は、アイヴァースは他の予約は入れないようにしていた。そうして、クリスターのためだけに、場合によっては時間超過で特別な『セッション』を持つ。
あんな目にあった後もカウンセリング・ルーム通いをやめないクリスターに、アイヴァースは半ば戸惑い半ば恐れに近い感情を抱いているようだ。
初めに強引にクリスターを奪ったのはアイヴァースだったが、２度目以降はクリスターが求めたものだ。クリスターの誘いにアイヴァースが応える形で、いや、むしろクリスターの要求にアイヴァースが従うようにセックスし、その後は以前と変わらぬスタイルのカウンセリングとなる。
クリスターが提案した、お互いが相手の質問に交互に答えるゲームも相変わらず続いていた。だが、性的な関係も含めて、互いの真意や秘密を推し量り探り出そうというやり取りの全てが、今や２人の間でなされるゲームだった。
食えない相手だということは互いに知っている。攻略し征服する

ことの難しい敵だからこそ、挑発し、煽り、相手の隙を突いて攻撃しあう、このスリルを楽しめるのだ。
少なくともクリスターはそう思っている。きっとアイヴァースも同じだろうと考えていた。
「先生」
「何だい？」
アイヴァースが煎れてくれたコーヒーをソファに彼と向かい合って座って飲みながら、クリスターは2人の間に流れるどこか緊張をはらんだ長い沈黙を味わっていた。アイヴァースが己に向けてくる眼差しの強さを味わっていた。
「そんな風に熱心に見られると、何だか居心地が悪くなります」
アイヴァースはコーヒーを口に運ぶ素振りで視線をはずす。
「僕はそんなに似ていますか？」
クリスターは、少しアイヴァースの弱みをつついてやりたくなった。
「あなたのパトリック。憎らしくなるくらいだと、あなたは言いましたよね」
アイヴァースは一瞬刺すような目つきでクリスターを見やった。薄い唇に温みには欠ける笑みが広がった。
「いや、今はそうは思わないな。私の勘違いだったよ。君は彼とは似ても似つかない」
「よかった。昔の恋人に似ているなんて、また言われたら、僕はきっと笑ってしまったでしょうね」
クリスターは軽く肩をすくめた。
「あんまり陳腐で」
アイヴァースはソファの背もたれに身を預け、嘆息した。
「そんな毒舌を誰彼となく向けていたら、君の周りから友達は1人もいなくなってしまうよ、クリスター」
「もちろん、話す相手によりますよ。でも、あなたに対しては、これくらいきつい本音を言ってやっても構わないと思うから」

「レイフに対しては、どうなのかな？」
クリスターは口を閉ざした。
「何でも分かち合い理解し合える相棒にも、やっぱり、そんな調子で傷つくことを平気で言うのかい？」
「まさか」
クリスターは居心地悪げに身じろぎした。
「レイフは、他の誰とも、あなたとも違う…あの子が傷つくようなひどいことを言ったりしたりしない…」
「それじゃあ君も、レイフに対して本心を全て言える訳じゃないんだね。例えば私とのことなど、君は口が裂けても弟には言いたくないと思っている」
「あなたとのことは、レイフには何の関係もないじゃないですか」
「そうだね。では、君が前に話してくれた、あの女の子、アリスの場合はどうなんだい。君は、彼女との初めての体験をレイフにも共有して欲しかったんだろう？　それができなくて、残念だった」
クリスターは少し落ち着かなくなってきた。
どうしてアイヴァースにアリスのことなどを話してしまったのだろう。この部屋で抱き合うようになってしばらく経った頃、行為の後の気だるさにぼんやりしている時に尋ねられたのだ。同性とはともかく誰かと性交渉を持ったことは以前にもあったのだろうと聞かれて、うっかり打ち明けてしまった。確かに、アイヴァースは人の心の秘密を聞き出すことにかけてはプロなのかも知れない。
「それを聞いて、私はちょっと考え込んでしまったよ。もしかしたら君はここにも弟を連れてくる気ではないだろうか、とね」
クリスターは本気で焦って、言い返した。
「どうして僕がレイフをここになど連れてくるはずがあるんです！あなたみたいな人を大事な弟に近づかせたくなんかありません」
頬を紅くして不愉快そうに睨みつけるクリスターに、アイヴァースは目を細めた。
「成る程。すべてを弟と共有することなどできないということは、

君ももう分かっているんだね。弟に対して秘密も持っていれば、嘘をつくこともある」
「だって…仕方がないじゃないですか…こんなことにレイフを引き込む訳にはいかないし…知ったら、レイフは傷つくだろうから…」
クリスターは言いよどみ、うつむいた。
心配そうな問いかけるような目をした弟の顔が思い出されて、クリスターの胸は痛んだ。
「僕はレイフを大事に守って、幸せにしたいと思っています。そのためになら、多少の嘘や黙っていることの後ろめたさも我慢しないといけないんです」
「君がレイフのためにそうすることが正しいと考えているとしても、レイフの方はどうなのかな？」
アイヴァースの穏やかな問いかけに、クリスターははっと顔を上げた。
「君が私のもとに通うことをレイフは面白く思っていないだろう。君が彼の知らないところで自分だけの世界を持つことに不安を覚えているはずだよ。そんな弟の気持ちを君はどこまで思いやっているのかな」
クリスターは何かしら呆然となりながら大きく息をついた。胸の鼓動が早くなり、体が汗ばんでくるのを覚えた。
「君はレイフを幸せにしたいと言う。だが、もしも君が望む幸せをレイフが望まなかった場合、君は一体どうする気なんだい？」
クリスターはソファから荒々しく立ち上がっていた。瞬時に噴出した怒りに、手は拳となり、歯は剥き出されていた。
「僕は…僕は…！」
「クリスター？」
クリスターはしばし火を噴くような激しい目でアイヴァースを睨んでいたが、やがて、どうにか気持ちを落ち着けると再び腰を下ろした。
「話したくない」

アイヴァースは肩をすくめた。
「言いたくないなら仕方ないさ。それがルールだったね」
クリスターは唇を舌で湿すと、用心深く言った。
「僕はあなたにパトリックのことを聞いていたのに、話をすりかえるなんて、ずるいですよ」
「そもそも君はここに自分の話を聞いてもらうために通いだしたんじゃないか。君に私の個人的な話を聞かせる必要はあまりないと思うがね。私が君のセラピストであり、このセッションは君のためのものだ」
クリスターは目をしばたたいた。
「セラピストは廃業したんじゃなかったんですか、アイヴァース先生？」
アイヴァースは苦笑し、ポケットからシガレットケースを取り出した。
「気の進まない私を、無理やり引きずり込んだくせに」
タバコを一本くわえかけたが思い直したようにケースに戻し、テーブルの上に置いた。
「君が、私を本気にさせたんだよ、クリスター」
クリスターはとっさに何と応えればいいのか分からなかった。
「僕を…治してやろうとでも言うつもりですか？」
「さあ、どうだろうね。君が本当に私の助けを求めているのなら、私もそれに真剣に応えようと今は思っているよ。けれど、実際のところはどうなのか、私は疑っている」
シルバーフレームの眼鏡の下からクリスターを観察しているアイヴァースの眼差しの鋭利さに、クリスターは寒気を覚えた。
「どういう意味です？」
アイヴァースには自分の心の奥深くまで見通されてしまうかも知れない。クリスターが知らないことまで、もしかしたら彼は知っているのかもしれない。そんな不安感にクリスターは身がすくんだ。
「君が最後まで聞くつもりがあるのなら、話すよ、クリスター」

クリスターは眉根を深く寄せて、アイヴァースをつくづくと眺めた。
「話してください」
すると、アイヴァースはどう切り出すべきか迷うように沈黙した。クリスターが意外に思うほど真摯な顔でクリスターを見つめ、顎にそっと指を添えるようにしながら、しばし考えを巡らせていた。
「レイフのことを」
クリスターはぎゅっと手を握りしめた。
「君は、まるで自分の一部のように考えている。彼の体も心も意志も、全て自分の延長であるかのようにね。君達が子供のうちは、それでもよかったんだろう。君達のうち優位にあるのは、明らかにクリスター、君だ。弟もそれを感じていて、兄の言うことを正しいと思い、唯々として受け入れ、従ってきた。だが、これから先もずっとそんな関係を維持できるとは保証できない。2人がいつまでも同じ考えを持ち、同じ幸せを一緒に追求していけるとは限らないんだ。君達は別個の人間であり、それぞれが自立した大人になっていく運命は避けられないからね」
ここで、アイヴァースはためらうかのように言葉を切った。まるで、自分が発する一言が相手にどんな影響をもたらすのか、恐れているかのようだった。
「たぶんこれは、君を悩ましている、これからも悩ますだろう究極の問いだよ、クリスター。もしもレイフが君と共にいることを望まず、君から離れていこうとしたら、その時一体君はどうするんだい？　彼が自分自身の幸福を追求しようとすることを認め、彼を手放すことができるかい？　それとも―」
「やめろっ！」
クリスターは吼えるようにアイヴァースの言葉をさえぎった。
「あなたの言っていることは、みんな嘘っぱちだ！　あなたは、僕を混乱させ、惑わせようとしている。もっともらしい分析などして、それによって僕を思い通りに支配しようとしているんだ」

これ以上アイヴァースの言葉など聞きたくなかった。もしもアイヴァースがなおも話し続けようとしたら、クリスターは怒りに駆られて、彼に殴りかかってしまうかもしれない。

「クリスター…」

アイヴァースの顔には失望の色がうかんでいた。決定的なミスを犯したと後悔しているのだ。先程の言葉は、アイヴァースにとっては一種の賭けのようなものだった。クリスターが素直に聞き入れるか否かが、このセッション自体の重要な鍵となる。

だが、クリスターは受け入れるどころか、最後まで耳を傾けることすらできなかった。

クリスターは普段の彼からは想像もできないほど気持ちを昂ぶらせ目をらんらんと輝かせながら、憎い敵に飛び掛る機会を狙うかのようにアイヴァースに対して身構えていた。

抑えようもなく溢れ出す怒りのあまりこめかみの辺りがずきずきする。アイヴァースに言い返す毒の言葉を探し回るうちにも、クリスターは拳を握りしめて、何度も振り上げそうになった。

「そうだ、僕はずっとあなたに聞いてみたかったんだ」

口元を震わせて、クリスターはアイヴァースに向かって囁きかけた。

「他人のセラピーをして、患者達の心の中を探りまわって、秘密を知って…それによって彼らが問題を克服できるよう導く、それって一体どんな気分なんです？」

アイヴァースは眉をひそめ、問いかけるかのごとく首をかしげた。

「他人の心を治療している時、あなたは優越感を覚えたことがあるんじゃないですか？　その患者はあなたに頼りきり、依存している。あなたの意のままだ。そんな時、自分こそが相手の心を操り、支配し、コントロールしているのだという心地よさを、あなたは感じたんじゃないですか？」

アイヴァースは深い嘆息でクリスターの悪意に満ちた追求に応えた。

「クリスター…」
アイヴァースは哀しげに首を振った。それから、改めてクリスターを正面からじっと見据えた。以前のような冷ややかさや無関心さは、確かにアイヴァースの態度から払拭されていた。しかし、その目が真摯で真率であるからこそ、クリスターは余計に反発を覚えずにはいられなかった。
「他人の心を支配し、コントロールする」
アイヴァースは危うげなものを見つめるようにクリスターを見守りながら、真剣に語りかけた。
「そんなことを考え付く君は、一体『誰』のことを、そんなにも支配したいと思っているんだい？」
クリスターの体が雷にでも打たれたかのように大きく震え、硬直した。
「誰…のこと…？」
クリスターは愕然と目を見開いていた。体から力が抜け、胸の前まで上げられていた手もだらりと垂れ下がった。
「僕…は…」
クリスターの中で、激しい2つの感情がせめぎあっていた。生きながら引き裂かれてしまいそうだった。
「違う、支配しようなんて…僕はただ…あの子が…」
呆然となっていたクリスターの顔が、苦しげに引き歪んだ。
「クリスター」
アイヴァースは、たまりかねたかのようにソファから身を起こし、クリスターに向かって手を差し伸べた。
だが、クリスターはその手を振り払うと慄いたようにソファから跳ね起き、アイヴァースから退いた。
「クリスター…行くんじゃない…」
アイヴァースの必死の懇願をはねつけるように、クリスターは激しくかぶりを振った。
「あなたの言うことなど、僕は信じない」

アイヴァースに対してよりも自分自身に言い聞かせるように、クリスターは言った。
瞬間、クリスターはアイヴァースの制止も聞かずに、部屋から飛び出していった。
クリスターはアイヴァースから逃げた。
アイヴァースが突きつけた自らの心の秘密に恐れおののき、打ち震え、傷ついて、そうすれば逃げ切れるというかのごとく、クリスターは走った。
校舎を飛び出し、学校の門の傍まで来て、ようやくクリスターは足を止めた。アイヴァースが追ってこないことを確認するかのように後ろを振り返った。
（アイヴァースの言うことなんか、間違っているに決まっている）
思い出し、ぞっとしたようにクリスターは我が身をかき抱いた。
（僕は、あの子を幸せにしたいと思っている。あの子が不幸になって傷ついたり哀しんだりするようなことは、絶対しない）
その時、クリスターは己の両目から涙が溢れていることを自覚した。震える手で目元を押さえた。
ああ、神様―。
クリスターは、泣いていることを誰かに見咎められるのを恐れるように、すぐにその場を後にした。
（アイヴァースとのゲームは、もう終わりだ）
深い憤りを込めて、クリスターは心の中でそう宣言した。

SCENE9

レイフは、はしごに足をかけて、二段ベッドの上をひょいと覗き込んだ。

「クリスター？　眠れないのかよ？」

こちら側に背中を向けてじっとしているクリスターに、レイフは気遣わしげな声で尋ねる。

今日のクリスターは何だか様子が変だった。カウンセリングの後はクラブにも出ずに先に帰ってしまったし、夕食の時も、その後皆と一緒にテレビを見る時も、子供部屋で2人きりになってからも、ずっと何かしら沈んだ様子で物思いにふけっていた。

母へレナはさすがに怪訝に思って何かあったのかと尋ねていたが、クリスターは大したことじゃないと答えるだけだった。

大したことじゃない筈がない。クリスターの中で渦巻く不安や混乱や悲しみや伝わってくるかのように、レイフまで憂鬱な気分になってしまった。絶対、何かあったのだ。

「寝たふりなんかするなよ。分かるんだぞっ」

この間叩かれたことを思い出して、レイフははしごによじ登ったものの、クリスターに直接触ることはためらっていた。

「なあ、嫌なことがあったんだろ？」

レイフがそこでいつまでも粘っていると、クリスターは溜め息をついて、やっとレイフを振り返ってくれた。

「レイフ」

レイフは一瞬クリスターが何でもないと言い張るのではないかと思った。頑なに心を閉ざしたまま、レイフを追い返すのではないかと不安になった。

「いいよ、入っておいで」

クリスターは、レイフが入ってきやすいようにベッドの奥の方に移動した。

「わぁっ」
レイフは嬉々として、クリスターのベッドに飛び込むと、布団を捲り上げて兄に擦り寄っていった。
「一緒に寝るのって久しぶりだよな、クリスター」
クリスターがたじろいだように奥に逃げようとするのを、レイフは腕を伸ばして捕まえ抱きついた。
クリスターは微かに震えた。
「やっぱり窮屈だよ」
クリスターの言うとおりだった。もう子供だとは言い切れないほど大きくなった双子が一緒に寝るには、このベッドは小さすぎた。
「少しくらい構わないだろ。後で、ちゃんと自分のベッドに戻るからさ」
レイフは、クリスターが瞬きも忘れたようにひたと自分を見つめていることに気がついた。暗がりの中でも、その瞳が明るい星のようにきらきらと輝いているのが分かる。
レイフは妙に落ち着かない気分になった。
「こら、何をするんだっ」
レイフは、奇妙な緊張をほぐそうと、クリスターの脇腹に手を伸ばしてくすぐった。クリスターは笑い声をあげ身をよじって逃げようとするが、レイフは余計にその気になって追いかけた。
「ば、馬鹿…こんなの子供じみてる…よ…っ」
レイフは笑いながらクリスターの上に馬乗りになって、彼をくすぐった。その体を今度はクリスターが捕まえ、ベッドに引き倒し、上から覆いかぶさった。
「あははっ…兄ちゃん、重い…」
レイフは上に乗ったクリスターを抱きしめながら、くすくす笑った。
「クリスター？」
クリスターが答えないのを不思議に思って問いかけると、彼はいきなりレイフを強く抱きすくめた。

「レイフ」
「うん？」
　レイフはクリスターと抱き合ったまま、兄のいうことに耳を傾け、大人しくじっとしていた。
「僕のこと、好き？」
「大好きだよ」
　レイフは首をかしげた。
「何で、そんなこと聞くんだよ？」
　クリスターはレイフの肩に頭を押し当てたまま、しばらく黙っていた。
「僕と一緒にいて、幸せ？」
　クリスターは、自信なさげな小さな声でおずおずと尋ねた。ひどく恐がっているようだった。
「クリスターってば、やっぱり変だ」
　レイフはびっくりして叫ぶと、クリスターの肩をつかんで体をずらし、その顔を覗き込んだ。息を飲んだ。
「兄ちゃん…」
　クリスターがあんまり深刻な思いつめた表情をうかべていたので、レイフは一瞬言葉を失った。
「ごめん、レイフ」
　クリスターが身を引こうとするのを、レイフはとっさに手を伸ばして引き止めた。
「幸せだよっ。オレ、クリスターが傍にいない生活なんて考えられない」
　言葉にしなくともそんなことは分かりきっているはずなのに、あえて尋ねるクリスターの想いがレイフにはよく分からなかった。
「あいつに…アイヴァースの奴に何か言われたのか…？」
　それ以外に考えられなくて、レイフはクリスターの体をひしと抱きしめながら囁いた。
「なあ、あんな奴の言うことなんか信じるなよ。人の言葉を鵜呑み

にして悩むなんて、兄貴らしくないぜ。オレ達のことを赤の他人のあいつになんか分かるはずがないじゃないか」
慰めるようにクリスターの背中をさすりながら、レイフは優しい口調でかき口説いた。
「オレは、他の奴らが何と言おうとクリスターと一緒にいたいよ」
クリスターがレイフの上で身動きした。彼は体をずらして、レイフの顔を真上から覗き込んだ。
レイフは、クリスターの唇が何か言いたげに震え、その瞳が飢えたような切迫した光をたたえて自分を見つめていることに、また少し落ち着かなくなってきた。
クリスターが覆いかぶさってきて、レイフの頬に唇を押し当てた。
「クリスター」
レイフは、カッと頬が熱くなるのを覚えた。
「オ、オレさ、やっぱり一度アイヴァースに会ってみるよ。そうして、きっちり話をつけてやる。変なことを言ってクリスターを悩ませるのはやめろって」
ドキドキいっている胸の鼓動が兄に聞こえることを恐れるように、レイフは言った。
「いいだろ？」
クリスターはしばし押し黙って、考えをめぐらせているようだった。
「いいよ」
やがて返ってきた応えにレイフは少し意外な気がした。レイフがアイヴァースに会おうとすることに、クリスターは頑強に反対していたのだ。
「あさっての放課後、僕はアイヴァース先生のカウンセリングを予約しているから、僕の代わりにおまえが行ってきたらいいよ」
クリスターはレイフの傍らに横たわった。
「そうだ、こうしたらいい。おまえは僕になりすまして、アイヴァース先生を騙してやるんだ。途中まで僕の代わりに話を聞いて、い

きなり正体を明かしてやれ。先生は、さぞかしびっくりすると思うよ」
この悪戯の提案に、レイフは目を輝かせた。
「いいな、それ。よし、あの取り澄ましたインテリ野郎の肝をつぶしてやるぞ。クリスターを苛めた仕返しにうんと驚かせて、それから、双子の区別もつかないくせにカウンセリングなんかするなって笑ってやる」
すっかりその気になって打倒アイヴァースの闘志を燃やしているレイフは、クリスターが謎めいた微笑を漏らして己の思索の中に沈みこんでいくのには気づかなかった。
やがて、レイフはそのまま眠り込んでしまった。朝起きると、傍にクリスターの姿はなく、下の自分のベッドに移動しているのを見つけた。
（ちぇっ）
レイフは不満げに唇を尖らせたが、あのまま一緒に寝てしまったら、狭いベッドの中で寝返りもろく打てなくて、さぞかし不自由だったろうということは認めない訳にはいかなかった。

SCENE10

「アイヴァース先生、クリスター・オルソンです」
兄のふりをしてこの日計画通りにカウンセリング・ルームを訪れたレイフが行儀良くノックをして待つと、一瞬の間を置いて、中から返事があった。
「入ってきなさい」
レイフは緊張と興奮を押し隠してカウンセリング・ルームの扉を開いた。
（うっ）
一歩足を踏み入れた瞬間、レイフはひるんだように立ち止まった。スクール・カウンセラー、デイビッド・アイヴァースは、奥のデスクから立ち上がって、中に入ってくるレイフを食い入るように見つめていた。その眼差しの強さは、とっさにレイフを戸惑わせるくらいだった。
「クリスター…」
レイフが扉を閉じることも忘れて立ち尽くしていると、アイヴァースは昂ぶった気持ちを静めようとするかのごとく肩で息をついた。
「ドアを閉めなさい」
すっと視線を逸らせ平静さを取り戻した様子でアイヴァースが促すのに、レイフは慌てて従った。
「まさか君が今日約束どおりにカウンセリング・ルームに現れるとは、さすがに私も思っていなかったよ」
アイヴァースはこめかみを軽く指先で押さえながら苦笑した。そうして、デスクをまわって、ソファの前でじっと身を固くして立っているレイフの傍までやってきた。
「何と言えばいいのか分からないが…いや、ともかく君がここに戻ってきてくれて私は嬉しく思うよ、クリスター」
レイフの方こそ、何と答えればいいのかさっぱり分からなかった。

口を開くとぼろが出そうなので、じっと押し黙って、アイヴァースの視線を避けるようにうつむいた。
「そこに座って…今、コーヒーを煎れてこよう。いつもどおりブラックでいいかな？」
レイフはこくんと頷いた。本当はコーラの方がいいのだが、今はコーヒーで我慢しよう。それにしても、クリスターの奴、ブラックのコーヒーなど普段は飲まないのだが。
レイフが密かに首をかしげていると、アイヴァースがコーヒーのマグカップを手に戻ってきた。
「ブランデーは…もう入れないことにしたんだ」
レイフの向かい側に腰を下ろしたアイヴァースは、カップを手に穏やかな声で彼に話しかけた。
「何となくね…君の前では、そんな逃げの態度は取りたくない気分になってしまったよ。私の中にも、まだそんなプロとして男としてのプライドや意地が残っていたらしい」
レイフは内心焦りながら、アイヴァースの顔を見返した。
どうしよう。話がさっぱり見えてこない。
ここに乗り込んでいく前に、クリスターがアイヴァースにいつもどんなカウンセリングを受けていたのか、大雑把な話を聞いておくべきだった。
今更ながら自分の無計画さを後悔しながら、レイフは、これは早いうちに自分の正体をぶちまけてしまった方がいいかもしれないと思った。
しかし、アイヴァースが向けてくる眼差しのあまりの真摯さに、その態度の真剣さに、『実は弟の方なんだよ』と打ち明けるタイミングを見つけられないでいた。
アイヴァースは、レイフが抱いていた嫌味なインテリ男のイメージとはかなり違っていた。クリスターが一目置くのも納得できそうな、高い知性と教養を感じさせる、落ち着いた物腰の大人の男だ。父親のラースとは全くタイプが違うので、レイフは彼の深い含みを

感じさせる言葉や態度にどう対応すればいいのか分からなかった。
「クリスター…今日は、いつもと違ってだんまりなんだね」
アイヴァースは幾分不審そうに囁く。
それを聞いて、レイフは脇の下に汗をかき始めた。口を開いたら、絶対にばれる。
レイフは膝の上に置いた手をぎゅっと握りしめ、再び視線をテーブルの上に落とした。
外見はそっくりでも、レイフにとってクリスターの芝居をするのは実際困難だった。もの思わしげな表情を作って黙ってさえいれば、レイフにも兄のふりをすることは可能だ。しかし、クリスターのような『賢そうな』話し方をすることなど、レイフには土台無理なのだ。
(どうしよう、いつまでも黙りとおす訳にもいかないし、やっぱり、ここで潔く正体をばらした方がいいじゃないだろうか。でも、どうしよう、やりにくいや…アイヴァースってば、何でこんな真剣な顔つきでオレのことを見やがるんだ)
レイフの沈黙を、アイヴァースは何やら違う意味に受け取ったらしい。その顔に微かな不安感がうかびあがった。
「クリスター、私がこの間した話を君はまだ…受け止められないでいるのかい？　自分の中である程度消化でき、納得できたから、私と再び話す気になってここを訪れた、という訳ではないんだね…」
アイヴァースの声が何故か哀しそうに聞こえたので、レイフは慌てて顔を上げた。
「君にはまだ自分の心の真実を受け止められる準備ができていなかった…私も、そんな気はしていたんだ。だが、君が認めない限り、君の悩みも問題も一向に解決には向かわない。私は少し焦っていたのかな…君を救いたいと、どうやら自分で思っていた以上に私は本気で考え始めていたらしい…どうやら君に感情移入しすぎたようだな」
アイヴァースは微苦笑めいた吐息を漏らした。その端正な顔に漂

う苦渋に、レイフはただ戸惑うばかりだ。
アイヴァースがふいにソファを立ち上がるのに、レイフはびくっとなって、彼を見上げた。
「クリスター」
アイヴァースは一瞬躊躇うような素振りをした後、テーブルを回って、レイフの隣に腰を下ろした。
レイフは何だか居心地が悪くなって、ソファの端に移動しようとした。
その腕をアイヴァースが捕らえた。
「先生？」
やっと『クリスター』が口をきいたことに、アイヴァースはむしろほっとした顔になった。
「君が取り乱した様子で部屋を飛び出していったあの日以来、私はずっと君のことばかり考えていたよ。あんなふうに君の心の一番デリケートな部分に直接触れるようなアプローチは避けるべきだった。せっかく本気で取り組む気になったセラピーに失敗したという後悔や口惜しさのせいだけじゃない…君がこの先どうなっていくのか、純粋に気がかりだったんだ」
アイヴァースの骨ばった手がレイフの頬を包み込むように、触れた。
「認めたくはないが…私は、クリスター、君に惹かれているようだ」
レイフは何を言われたのか意味が分からず、まばたきした。
「え…？」
問いかけるかのように首を傾げるレイフに、アイヴァースは複雑な感情に揺れる眼差しを向け、ふっと笑った。
「君は本当に恐い子だよ、クリスター」
レイフの視界が暗くなった。
（え…えぇっ？！）
アイヴァースの体がレイフの上に覆いかぶさった。
頭の後ろに手を回され唇をアイヴァースの唇にふさがれても、レ

イフには、何が起こったのか一瞬分からなかった。
思考停止。
「クリスター…」
アイヴァースの濡れた唇が頬を掠め耳元で熱く囁くのに、レイフの中で何かが弾けた。
「違うっ！！」
レイフは絶叫した。
ひるんで身を引くアイヴァースの腹を膝で蹴り上げて、レイフはソファから勢いよく立ち上がった。
「な、な、何しやがるんだっ、こ、この変態野郎っ…！」
腹を押さえて退くアイヴァースの顔が衝撃に震えた。
「クリスターじゃない…レイフかっ？！」
ここに至って、アイヴァースもようやく気がついたが、後の祭りだった。
レイフは真っ赤な顔をして、わなわなと震えながら、ようよう身を起こすアイヴァースを睨みつけた。
「よ、よくも…オ、オレに…あんな…あんな…キ、キス…」
レイフの目に涙がにじんだ。怒りと恥ずかしさと悔しさに、目の前が真っ暗になった。さっきのあれは、１００パーセント、レイフのファースト・キスだった。
「レイフ…君をここに差し向けたのは、クリスターか？！」
アイヴァースははっとなって尋ねるが、レイフは聞いていない。
「畜生、畜生…許さねぇ、許さねぇぞ！」
レイフは激情に駆られて身悶えし、激しく足を踏み鳴らし、頭をかきむしった。ぎらりとつりあがった目で、呆然となっているアイヴァースを睨みつけた。
「ブチ殺す！！」
放課後の静かな校舎の片隅に、何かが壊れる大きな物音と人の悲鳴があがった。
身の危険に感じて逃げようとするアイヴァースに、レイフは素早

く追いつき、その体を捕まえると必殺の背負い投げをかけてやったのだ。アイヴァースの細身の体は呆気なく投げ飛ばされ、丁度がたのついていた扉をぶち壊して、廊下に転がり出た。
「レイフ…やめろ…！」
痛みに顔をしかめたアイヴァースは起き上がりつつ訴えるが、激昂したレイフを止めることはできなかった。
「この野郎…よくも…よくも…！」
ひくひくと泣きながらまたも拳を振り上げて追ってくるレイフから、アイヴァースは慌てて逃げた。
「逃がすか、この野郎！　待ちやがれっ！」
逃げるアイヴァースを追いかけ、レイフは喚き散らしながら校舎を駆け回った。彼の大声に、そのうち学校に残っていた教師やクラブに参加していた他の生徒達も気がついて、何の騒ぎだと様子を見に来た。
「レイフ・オルソン、何をしているんだっ！」
校舎からグラウンドに出たところで再びアイヴァースを捕まえたレイフに向かって、血相を変えた教師達が駆け寄ってきた。
アイヴァースの胸倉をつかみ拳を振り上げるレイフに、決死の教師達は3人がかりで飛びかかった。
「こらっ、レイフ、アイヴァース先生になんてことをするんだっ」
「畜生、離せ！　こいつだけは絶対に許さないっ！　絶対もうに3発くらいは見舞ってやらないと、腹の虫がおさまるもんかっ」
「アイヴァース先生を離すんだ、レイフ！」
怒り狂うレイフを押さえ込むのは、大人が3人がかりでも大仕事だった。それでも、教師達は何とか、既に散々殴られ蹴られてぼろぼろのアイヴァースからレイフを引き離すことに成功した。
「レイフ、落ち着くんだっ！」
担任のロスが耳元で怒鳴るように訴えるのに、レイフは泣きじゃくりながら、激しく頭を振りたてた。
「畜生…畜生…」

レイフは肩で大きく息をしながら、ぐったりと地面にうずくまり教師達に介抱されているアイヴァースを、火のような目でしばらく睨みつけていた。
「許すもんか…よくも…」
言った先から、またぽろぽろと涙がこぼれた。そんなレイフとアイヴァースを、ロスも他の教師達も困惑して見比べている。
ふいにレイフは、これ以上アイヴァースを見ていることが我慢ならないというように彼に背を向けた。校舎の方を振り返ったレイフは、興味津々この騒ぎを遠巻きにして見守っている他の生徒達の様子に顔をしかめた。
次の瞬間、レイフははっと息をのんだ。
「あっ？」
野次馬達の後ろの方、校舎の入り口前にたたずんでいるクリスターの姿を見つけたのだ。
瞬間、レイフは兄に駆け寄りたい衝動に駆られた。クリスターに抱きつき、その胸にすがっておいおい泣いて、傷ついた心を慰められたかった。
しかし―。
（クリスター？）
校舎の傍に佇んだままレイフと彼に叩きのめされたアイヴァースの様子を冷然と眺めているクリスターに、レイフの胸は凍りついた。
クリスターは、レイフをというよりもむしろアイヴァースの方を食い入るように見ていた。その顔の酷薄さに、レイフは激しく打っていた心臓が一瞬とまったかと思った。それは、レイフが初めて見るような、近寄りがたく、氷そのものに冷たい兄の姿だったのだ。
（どうして…？）
レイフは何かしらはっとなって、背後のアイヴァースを振り返り、またクリスターの方を見た。
レイフは頭がくらくらしてくるのを感じた。
（クリスター、まさか、おまえ…）

クリスターはちらりとレイフを見やったかと思うと、すぐに背中を向けて校舎の中に姿を消した。

レイフは愕然として、やがて怪我をしたアイヴァースがどこかに連れて行かれ、自分も担任のロスに肩を叩かれて校長室に行くよう促されるまで、兄が消えていった方を睨みすえていた。

SCENE11

事件のショックから立ち直れないレイフは、あれから1週間学校を休むことになった。

実際、あの後しばらくは学校中が大騒ぎになった。

アイヴァースはすぐさま病院に運ばれ、レイフは校長室で教師や校長から何があったのか問い詰められて、挙句の果てには両親まで呼び出された。

だが、レイフはカウンセリング・ルームであったことをなかなか語ろうとはしなかった。それでも、校長たちに追及され両親に促されて、アイヴァースから襲われかけたということをやっと打ち明けたのだった。

本来なら、学校職員に対して暴力を振って怪我まで負わせたのだから、よほどの理由がなければ退学になってもおかしくはなかった。しかし、レイフが言うことが本当なら、非はアイヴァースにあるということになる。初めは半信半疑だった校長も、芝居とは思えないほど動転したレイフの様子から、アイヴァースとの間に『何か』があったことは認めざるを得なかった。

それに加えて、レイフが起こした事件の前日、生徒から寄せられたの匿名の投書によって、アイヴァースがカウンセリング・ルームで喫煙と飲酒を習慣としていたことが明らかになった。

そうしてカウンセリングを受けていた生徒たちを呼び出して話を聞くと、アイヴァースから何かされたという者は他にいなかったものの、校内では禁止されている喫煙だけでなく時折アルコールの臭いをさせていたという証言も得られた。

アイヴァースを自らカウンセラーに推した校長の落胆は激しく、保護者達の動揺も大きかった。そうして、アイヴァースは免職になる前に早々に自ら辞職願を提出し、即日受理された。

うやむやに終わらせたいという学校側の意図が、若干感じられる

ような結末ではあった。

「レイフ、ただいま」
クリスターが学校から帰ってきた時、レイフは1人ベッドに寝そべって、考え事にふけっていた。
「母さんはまだ帰ってきていないのかい？」
「うん…」
レイフはベッドから起き上がって、部屋に入ってきた双子の兄を凝然と見つめた。
そう言えば、あの一件以来、この家の中で兄と2人きりになるのは久しぶりだった。レイフを心配してしばらく仕事を休んでいたヘレナは、今日からラースの警備会社を手伝う仕事に復帰している。
「どうしたんだい、そんな変な顔をして？」
クリスターは荷物を机の上に置くとレイフに向かって笑いかけ、近づいてきた。
「退屈だろう、1週間も学校を休んでいると？」
「そりゃ、退屈だよ。一緒に遊ぶ兄貴も友達もいないし、母さんは一緒にいてくれたからまだましだったけど、やっぱりずっと家にいて楽しいことなんか何もない」
「その様子なら、来週からは予定通り学校に戻れそうだね」
隣に腰を下ろすクリスターにレイフは何か言いかけたが、思い直したように口を閉ざした。
「いい知らせがあるよ」
何やら意味深な表情を浮かべているクリスターに、レイフは目をぱちぱちさせた。
「アイヴァースは学校をやめることになった。彼がおまえにしたことを考えると免職になっても当然だけれど、そうなる前に自分から

辞職願を出したんだ。だから、おまえが学校に復帰しても、もう二度と彼の顔なんか見ないですむから、安心したらいいよ」
「あいつ、学校を辞めたんだ…」
レイフはぼんやりと呟いて、顔をうつむけた。
「悪徳カウンセラーには、当然の報いだよ」
クリスターの険のこもった台詞に、レイフは何かしらはっとして、そちらを振り返った。
「父さんなんか、今でもまだアイヴァースを訴えてやるって息巻いているくらいだよ。いいカウンセラーだと聞いて安心していたのに自分の子供に悪戯をするよなんて許せないって、病院送りにしたくらいでは腹の虫がおさまらないらしいね」
「う、訴えるなんて…いくらなんでも、そこまでしたらアイヴァース先生が気の毒だよ。ただでさえ、オレのせいで全治1週間の怪我までしたんだから」
「おや、レイフ。おまえは被害者なのに、そんなにあっさりアイヴァースを許してしまっていいのかい？　あの時は、あんなに激昂して、アイヴァースをぼこぼこにしてもまだ足りないって様子だったのに」
「ゆ、許した訳じゃないけど…今だって、思い出したら、頭がかっとなってくるよ…あんなことされて…でも…」
レイフは口ごもり、クリスターの涼しげな顔を見返した。
「あんなこと…」
クリスターはレイフに眼差しを向けたまま、首をかしげた。
「アイヴァースに何をされたんだい、レイフ？　本当にキスだけ？　僕にだけはそろそろ本当にことを話してくれてもいいだろう？」
レイフの頬がカッと顔が熱くなった。
「ば、馬鹿、何てことを聞くんだよ？　キ、キ、キス以外には何もないよっ。あって、たまるか…」
「よかった」
クリスターは目をつむって、心底ほっとしたというように吐息を

ついた。
「おまえがそれ程ひどい目にあったわけじゃなくて、本当によかった」
いきなりクリスターに抱き寄せられて、レイフははっと息を飲んだ。
「おまえの動転ぶりがあんまりすごかったから、まさかとは思いながらも、僕も心配したよ。おまえを彼のところに1人でやったことを後悔した…おまえがアイヴァースなんかにどうかされてしまうなんて思わなかったし、様子がおかしかったら、すぐに助けに飛んで行くつもりだったけれど、でも…」
レイフの頬に頬を押し付けながらクリスターが愛しげにかき口説くのを、レイフは当惑しつつ聞いていた。何だか、胸が苦しくなってきた。
「クリスター…」
レイフは居心地悪げに身じろぎするが、クリスターの腕は弱まらなかった。
「ちょっと…離せよ…」
クリスターがやっと腕を緩めてくれたのに、レイフはほっと息をついた。
「あ…？」
自分を間近でじっと覗き込んでいるクリスターの顔にうかぶ真剣さ、ひどく飢えたような切迫した表情に、レイフはとっさに動けなくなった。
そんなレイフのぽかんと開かれた唇に、クリスターは軽く唇を押し付けた。
「へっ？」
何が起こったか分からず目を真ん丸くするレイフに向かって、クリスターは囁いた。
「消毒、だよ」
レイフは弾かれたようになってクリスターから飛びのくと、足を

もつれさせてベッドの下に転がった。
「うわぁっ?！　な、何をするんだよ、クリスター！！」
床にしりもちをついたまま真っ赤な顔で口元を押さえ叫ぶレイフに、クリスターはすっと目を細めた。
「本当に、キスだけでこんなに動転するものなんだね、レイフ」
ベッドから立ち上がってしげしげと己を見下ろし助け起こそうと手を伸ばす兄を、レイフは信じられないものを見るかのごとく睨みつけた。
「おまえは弟にキスするのかよっ！」
レイフはクリスターの手を払いのけると、他に何と言ったらいいのか分からず、そんなことを叫んだ。
「キスくらい、僕達は普通にしてたじゃないか」
「えっ…えっ…？」
「僕達がうんと小さかった頃、遊びの中で、鏡に向かってするように向き合って手を合わせたり、唇も重ねてみたり、一体どこまで僕達は同じにできているんだろうと確かめ合うような、そんなことを僕達はしたよ。覚えてない？」
レイフは必死になって、首を横に振った。
「そう…」
クリスターは残念そうに顔をしかめ、溜め息をついた。
「ク、クリスター、おまえ…おまえ…」
レイフは赤くなったかと思えば今度はさっと青ざめて、突然見知らぬ人のようになってしまった兄を呆然と見上げた。
その時、レイフの頭の中に、あの日自分がアイヴァースを傷めつける様子を冷ややかに眺めていたクリスターの姿をうかびあがった。
「そ、そうだ、おまえ―あの時、オレをはめやがっただろう？！」
あのクリスターの姿を見た時から喉の奥に引っかかって取れない小さな骨のように気になっていた何かが、その瞬間、レイフは腑に落ちたような気がした。
「あの日、カウンセリング・ルームでアイヴァースがクリスターだ

と信じ込んだオレに向かって話したこと、あいつの態度…オレの知らない何か深い意味があるようで、ずっと気になってたんだ」
　レイフは、己の前で両腕を体の脇に垂らしたまま静かにたたずんでいるクリスターに向かって、胸の奥で渦巻いていた不安と不審を一気にぶちまけた。
「それに…それに、あんなにオレがアイヴァースに近づくことを嫌がっていたのに急に会えばいいなんて言って…しかもおまえになりすまして騙してやれなんてオレをけしかけた…あれっ、クリスターの言うことが変わったって不思議に思ったんだ」
　クリスターは、レイフが必死で頭の中でまとめた考えをどもりながらも懸命に語るのを、奇妙なほど平静に聞いていた。
　レイフは、まさかという不安と疑いに押しつぶされそうだった。
「アイヴァースは…あの時のオレは、あいつの言葉の意味を推し量ることなんかできなかったけれど…でも、あいつはすごく真剣な目をしてた…戸惑うくらいにオレを…いや、クリスター、おまえのことを本気で心配していたよ…」
「だから、どうだって言うんだい？」
　クリスターは一瞬ひどく冷酷な微笑を口元にうかべた。レイフは、またカッとなった。
「クリスター、オレをはぐらかすのはやめろよっ。オレは…オレはずっと悩んでたんだぞっ。お、おまえとアイヴァースの間で何かあったんじゃないかっ！」
　レイフは床から飛び起きると、クリスターの肩を両手でつかんで揺さぶった。
「クリスター、俺には本当のことを言えよっ！　嘘なんかつくなっ。アイヴァースとおまえは一体どういう関係だったんだよ？！」
「どういう関係だったかって？」
　激しく詰め寄る弟を、クリスターは目をすがめるようにして見つめた。
「肉体関係があったかどうかを尋ねているのなら、その通りだよ、

レイフ」
ひどく淡々とした口調であっさり答える兄の体から、レイフはとっさに手を離した。
「に、にくた…い…かんけい…」
後は言葉にならず口をぱくぱくさせるレイフに、クリスターは悪びれもせずに続けた。
「カウンセリングという名目でアイヴァース先生を訪ねては、あの部屋で僕は彼とセックスしていた。僕の言ってる意味は、分かるよね？」
レイフは力のぬけた両腕をだらりと垂らし、呆然となって、全く理解できないことを冷めた口調で語る兄を見守っていた。
「別に初めからそんなつもりでアイヴァースに近づいた訳ではないけれど…確かにアイヴァースには興味はあったけれど、それは彼のプロとしての知識や能力に惹かれたに過ぎなかった。けれど、僕はアイヴァースをひどく傷つけることをしてしまって、怒った彼は僕を無理やり…つまり、強姦したんだ。そう、きっかけは僕の意志には全く反したものだったよ。けれど、その後も彼との関係を続けたのは、僕の意志だった」
「ど、どうして…？」
レイフは、自分のものとはとても思えない掠れた声で、半ば無意識のまま尋ねた。
「そうだね」
クリスターは、自分の言おうとすることを吟味するかのように、一瞬言葉を切った。
「別にアイヴァースのことが特別好きだった訳じゃないよ。ただ…僕は、同性愛とはどんなものなのか、知りたかったのかもしれない。経験として試してみたかったのかもしれない」
ふっと微笑するクリスターは、レイフが知っている双子の片割れではなかった。こんなクリスターをレイフは知らない。何だか打ちのめされた気分になりながら、レイフは鼻の奥がつうんとし目がし

ばしばしてくるのを意識した。
「お兄ちゃんって…オカマだったの…？」
「う」
大きな目にいっぱい涙をためてそんなことを素で尋ねるレイフに、さすがのクリスターも一瞬怯んだらしく、憎らしいくらいのポーカーフェイスを崩した。
何だか急に恥ずかしくなったかのように、クリスターはレイフのまっすぐな眼差しから顔を背けた。
その瞬間、レイフの中で何かが弾け飛んだ。
「うう…あぁぁぁっ…！」
レイフは突き上げてくる激情に身悶えし、頭を両手でかきむしり、足を激しく踏み鳴らした。
「ク、クリスターのば、馬鹿、変態、この裏切り者！　オ、オレとおんなじ体をあんな奴に触らせるなーっ！！」
たじろぐクリスターに向かって、レイフは大声で怒鳴った。同時に目から涙が迸った。
「クリスターなんか、大嫌いだぁっ！」
そう絶叫すると、レイフは兄の体を突き飛ばすようにして、泣きながら部屋から飛び出していった。
後ろでクリスターが何か叫ぶのを聞いたが、レイフは耳を塞いだ。兄から逃げたい一心で家を飛び出し、泣きじゃくりながら近くの公園まで走っていった。
（信じられない…クリスターが…オレの兄貴が、あんなことを言うなんて…お、男とセッ…セックスした…なんて…嫌だ…そんなの…他の誰かがクリスターに触ったなんて…）
体の大きいレイフが顔をくしゃくしゃにして泣いているのを他人に見られたら怪しまれそうなので、彼は公園の人気のない場所にある大きな樫の樹の下に1人隠れるようにうずくまっていた。
（どうして…どうしてなんだよ、クリスター）
クリスターに裏切られた。

そんな想いが、レイフの胸に突き刺さっていた。
生まれた時から一緒にいた、一番身近で、全てを共有してきた相棒が突然見知らぬ他人のようになってしまったことが、何よりも深くレイフの心を傷つけていた。

SCENE12

『アイヴァース先生。ええ、僕です、クリスターです。突然学校を辞めることになったと聞いて、どうされているのかと思って。…怪我の具合はどうです？　ああ…それは、よかった。…レイフは、あれからショックで学校を休んでしまいました。…そうですよ、僕が、悪戯っ気を出して、彼をあなたの部屋に行かせたんです。…そう、あなたの悪癖について匿名の投書をしたのも僕ですよ。あなたのことを人格者だと信じている校長が、あなたに対する信頼を失い、襲われたというレイフの訴えをちゃんと聞いてくれるように、僕が前もって裏工作したんです。復讐？　さあ、どうでしょうね。…先生、そのことも含めて、あなたに一度会って話をしたいんです…最後のカウンセリングを受けさせてくれませんか…？　あなただって、このまま僕と別れてしまうのは心残りでしょう？　そうですね…次の土曜日の午後3時はどうです。…場所は…いいですよ、そこで待っています。ありがとうございます、先生。では、土曜日に』

アイヴァースと電話で交わした約束の土曜日の午後―。

クリスターがよく利用する図書館近くの路上にとめられたアイヴァースの車の中で、クリスターは彼と2人きりでいた。

助手席におとなしく座って、クリスターは横目でアイヴァースを眺めやる。

「眼鏡は、どうしたんですか？」

「あの時、君の弟に壊されてしまったからね。今新しいものを作っているところだよ」

アイヴァースは正面を向いたまま、冷静さを装って答える。

レイフに殴られた傷跡や青あざがまだ残る、その横顔を見ながら、せっかくのハンサムが台無しだなとクリスターは思っていた。
「僕の芝居を一目で見抜いたあなたが、僕とレイフを取り違えたなんて信じられない」
クリスターは、心底意外だったというように言った。
「全くだな」
アイヴァースは苦笑した。
「なぜ、そんな失敗をしたんだと思いますか？」
クリスターは首を軽く傾げて、僅かに低めた声で謎かけをするかのごとく尋ねた。
「あなたは、カウンセリング・ルームを訪ねてくるのは、間違いなく僕だと思い込んでいたからですよ」
アイヴァースは胡乱げにクリスターを見た。
「先入観というのはくせものだと、あなたが言ったとおりです」
鋭い平手打ちくらったように、アイヴァースの頬が微かに震えた。確かに彼はそんなことを言った覚えがあった。レイフになりすましたクリスターの正体を見破った時、そして、クリスターに一服持って体の自由をきかなくしてから、無理やり彼を抱いた時―。
「クリスター…」
ハンドルの上に手を置き、その上に額を押し付けるようにして、アイヴァースは深く嘆息した。
「君は、ただでは人を許さない子だ。自分を傷つけた相手には、容赦なく復讐をする…だが、それでも、まさか君が大切にしている弟を使うなんて、さすがに私も予想できなかったよ」
クリスターはアイヴァースに見えないところで、手をぎゅっと握りしめた。
「…それも先入観というものですよ、先生」
クリスターが窓の外を何気なく見ると、少し離れた歩道を親子連れが歩いていた。両親のまわりをまつわりつき、互いにじゃれあっている幼い兄弟の無邪気さに、クリスターはふと目を細めた。

「これから、どうするつもりなんです？」
「そんなことを君が気にするのかい？」
「ええ、少しは。でも、あなたが答えたくないのなら無理に答える必要はありませんよ、先生」
　窓の外の幸福そうな兄弟から視線を離し、クリスターはアイヴァースを振り返った。
「君のおかげで仕事は失ったし、クリニックもあのざまだ。…まだはっきりとは決めていないが、どこか他の街に移ってやり直そうかと思っている。自暴自棄になってこの１年を無駄に費やしてしまったが、私も残りの人生の全てを放棄してしまう気にはなれないようだ」
「それは、よかった。あなたのような優れたセラピストがこのまま専門から完全に手を引いてしまうなんて、やっぱり惜しいですからね」
「皮肉にしか聞こえないよ、クリスター」
「今の言葉だけは僕の本心ですよ、先生」
　２人の間に沈黙が下りた。
「クリスター、君の方こそ…これから、どうするつもりなんだい？」
　アイヴァースは、ためらいがちに再び口を開いた。
「レイフのことを…私は聞いているんだよ」
　クリスターはアイヴァースの顔から視線をはずし、シートに体を預けるようにして正面を見た。
「君は、弟に対する自分の気持ちには薄々気づいていた。だからこそ悩んで、迷って、どうすればいいのか、自分なりに答えを探し求めてきた。そうして、私がスクール・カウンセラーとして君の前に現れた時も、君は迷わず私に近づいた。救いを求めていたのだと言ったら聞こえがいいが、君は私を利用しただけだよ、クリスター。君は、私が何を言おうが、初めから聞くつもりなどなかったんだ。ただ、他の誰にも打ち明けられない秘密を誰かに聞いてもらいたかった。それは、君にとっては、自分の本心を再確認するための行為

に過ぎなかっただろう」
「僕は、そこまで利己主義じゃありませんよ」
クリスターは眉間に軽くしわを寄せた。
「僕はあなたのことが好きでしたよ、アイヴァース先生。尊敬もしているし、あなたが仕事に復帰するつもりだと聞いて本当に嬉しい」
熱心に訴えかけるかのように、クリスターは言った。
「そう、僕は父さんや母さんのことも愛しています。だから、両親にいつも誇りに思ってもらえるような息子でありたい。友達だって、大切です。けれど、レイフの前では、それらはみんな何の意味もなくなってしまうんです」
クリスターは言葉を切った。顔をうつむけ、しばし己の内側に向き合うかのように沈黙した。
「僕は、結局、あの子しか欲しくないんです」
ポツリと漏らしたクリスターの言葉は、何故か哀しげに響いた。
「僕がずっと不安を覚えていたもの、夢にうなされるほどに悩まされていたものは、僕のあの子に対する、この感情だったんです。あの子が愛しくて可愛くて…僕だけのものにしたいあまりに、いつか僕自身があの子を傷つけてしまうのではないかと恐かったんです。どうしたら僕の手からあの子を守れるか、どうしたら自分を抑えられるのか—そんなことをずっと思いつめていたんです」
クリスターは、胸にためていた息をゆっくりと吐いた。
「僕の中のあの子に対する所有欲に、あなたが気づかせてくれた。それだけでも、僕はあなたに感謝しなければならないのかもしれない」
クリスターは傍らのアイヴァースを振り返った。固い表情をして、息を殺してクリスターの話に聞き入っていたアイヴァースと目が合った。クリスターは、にこりと微笑んでみせた。
「あなたは、僕達がこれから先もずっと一緒にいて同じ幸せを追求していけるとは限らないと言いましたね。確かに、いつかレイフは、僕といるよりも1人で生きる方がいいと、僕から離れていこうする

かもしれない。大人になったら、僕よりも好きな人を見つけて…その人と一緒になりたいと思うようになるのかもしれない」
　クリスターは唇を震わせた。頬がかっと熱くなってくるのを意識した。
「でも…でも、そうなるとは限らないじゃないですか。僕は、レイフさえいれば他には何もいらない、あの子と一緒にいられればそれで幸せだと思う。それに、あの子だって、僕の傍にいたい、それが幸せだと言ってくれました。こうなったら、認めるしかないけれど、僕は他の誰にも弟を渡したくなどない、僕のものにしたい。身勝手な所有欲かもしれないけれど、もし…もしレイフが…レイフも同じように僕のことを想ってくれていたら…。そう、僕はレイフを支配しようというんじゃない…レイフが嫌がることを無理強いして、彼を混乱させたり傷つけたりはしない。けれど…もしかしたら、レイフだって…同じように僕のことを欲しいと思ってくれるかもしれない…父さんや母さん、友達もみんないらないから、僕だけが欲しいと…確かめることも恐くてできなかったけれど、もしかしたら―」
　クリスターは、熱に浮かされたように、半ば自分に言い聞かせるように切々と訴えた。
「クリスター」
　押し殺した、しかし、強い響きを帯びたアイヴァースの呼びかけに、クリスターは慄いたように黙り込んだ。
「それは、許されないことなんだよ」
　クリスターは、途方に暮れたような目でアイヴァースを見つめ返した。
「分かっています」
　出会ったばかりの頃とは違うアイヴァースの真摯な態度には心を揺さぶられたが、クリスターには、自分は彼の言うことなど聞かないだろうと分かっていた。
　アイヴァースの言ったことは、やはり正しかったのかもしれない。クリスターは彼を利用しただけなのかもしれない。

「でも、どうしても…抑えられないんです」
こんな常軌を逸した執着を、アイヴァースとのやり取りを通して、クリスターは自らのものとして認め受け入れていった。
だから、今はこんなにも率直に言える。
「あの子は僕のものです」
アイヴァースは息を吸い込んだ。クリスターを見つめる瞳を揺らした。
「クリスター…君は…」
アイヴァースは堪えかねたかのように座席から身を起こし、クリスターの肩に手をかけようとしかけたが、思い直したかのようにかぶりを振った。
気持ちを静めようとするかのごとく、アイヴァースは深く息をした。
「私が何を言っても、君を思いとどまらせることはできない…そうだね？」
クリスターはアイヴァースをまっすぐに見つめ返し、頷いた。
アイヴァースは無力感を漂わせた表情で、クリスターに向けて薄く微笑んだ。
「それで…一体君は、弟を道連れに、どこまで行くつもりなんだい、クリスター？」
クリスターの顔にもほのかな微笑がうかんだ。
「分かりません。でも、たぶん…行ける所まで行ってみようと…僕達が一緒にいても許される場所が見つかるまで」
クリスターの心は、一瞬、遠くに飛んだ。弟を連れて茫漠たる平原をさ迷った、あの冷たい冬の一夜に戻っていた。
あの時、あんなにも幸福だったのは、自分達が一緒にいることを邪魔する他の人間達のいない世界のただ中で、レイフと2人きりでいられたからだ。世界から隔絶された2人だけの楽園を夢見ることができたからだ。
「世界の果てまでも…」

クリスターは瞑目し、しばし追憶に浸るかのごとく黙り込んだ。
再び目を開いた時、クリスターは何かしら吹っ切ったような顔をして、息を詰めて己を見守るアイヴァースに笑いかけた。
「クリスター？」
アイヴァースの口から戸惑いの声がもれた。
クリスターは助手席から身を起こすと、アイヴァースの肩に手をかけ、彼の体をシートに押し付けた。そのまま彼の口に唇を深く重ね、吸った。
やがて身を起こすと、呆然となっているアイヴァースの目を覗き込み、クリスターは低くささやいた。
「さよなら、デイビッド」
そのままクリスターはアイヴァースの車から降りた。
一度も後ろを振り返ることなく、クリスターは背の高い街路樹の並ぶ歩道を歩いていった。角を曲がり、やがて見慣れた図書館の赤茶けたレンガ色の建物が見えてきたところで、クリスターは足を止めた。
長い緊張からやっと解き放たれたかのように、クリスターは肩の力を抜き、全身で大きく息をした。
ふと思い出して、アイヴァースに最後のキスをした唇に指を持っていった。クリスターは苦笑し、かぶりを振った。
「家に…帰らなきゃ…」
ポツリと呟いた後、クリスターは急に心細くなって、己の腕をぎゅっと掴みしめた。
逃げ場所を探すかのごとく、不安げな眼差しで周囲を見渡した。
他に行く所などどこにもないことは、知っていたけれど―。
クリスターは、手のひらに爪を立てるように拳をきつく握り締めた。
「レイフの所に、帰るんだ」
クリスターは躊躇う自分にそう言い聞かせて、再び歩き出した。

SCENE13

その夜、広々としたリビングの片隅で、クリスターは母ヘレナを相手にチェスをしていた。

クリスターは学校のチェスクラブにも入っていて、今度州の中学生トーナメント出ることになっているため、ヘレナに特訓してもらっているのだ。顧問の数学教師も舌を巻くくらいの腕前のクリスターだが、ヘレナにだけはまだ一度も勝ったことはなかった。

レイフは同じリビングの一角でラースと一緒にぼんやりとテレビを見ている。クリスターは時折彼が何か言いたげな視線を自分に送っていることに気づいていた。だが、クリスターが顔を上げると、レイフは慄いたように顔を背け、再びテレビの画面に目を戻してしまう。

言いたいことがあるのなら、はっきり言えばいいのに。全くレイフらしくない態度だ。

クリスターがアイヴァースとの関係を打ち明けてからずっと、クリスターとレイフとの間にはこんな緊張した空気が流れている。

どんな大喧嘩をしても、口などきかないと宣言しても、兄を無視することなど、レイフにはいつだってできたためしはなかった。だが今回は、彼にしてはなかなかがんばっている。

「オレ、もう寝るよ。おやすみ、父さん、母さん」

まだ就寝時間には少し早かったが、レイフはこらえ切れなくなったようにいきなりそう言って、ソファから立ち上がった。

「もう寝るのか、レイフ」

「うん、何だか今日は疲れちゃって…柔道の稽古がハードだったからかな」

そんなのは大嘘だ。いつだってエネルギーがありあまって、元気すぎるくらいに元気なレイフなのに。

「そうだ、レイフ、もうじきおまえ達の誕生日だろう。いくらなん

でも、そろそろあの子供部屋は卒業した方がいいと思うんだ。実際、あのベッドじゃ、おまえ達も不自由だろうしな。今度の休みでも、新しいベッドをショッピングセンターに見に行かんか？」
　クリスターは思わずそちらを見た。レイフも、いきなりのラースの提案にたじろいだようだ。
「新しいベッド…？　そりゃ、確かに今の子供用ベッドじゃ窮屈なのは本当だけれど…」
　レイフは助けを求めるようにクリスターを振り返ったが、兄と目が合うと慌てて視線を逸らした。
「う…うん…そのことは…また考えるよ。お、おやすみっ」
　もごもごと答えて、レイフは逃げるようにリビングから出て行った。
　クリスターは溜め息をついて、目の前のチェス盤に注意を戻した。
「レイフと喧嘩でもしたの、クリスター？」
　穏やかな声で呼びかけられて、クリスターが顔を上げると、ヘレナが気遣わしげな眼差しを向けていた。
「うん、ちょっと…」
　クリスターはとっさに口ごもった。
「でも、大したことじゃないよ。レイフはすねてるだけなんだから。いつだって僕がレイフを子供扱いする、僕が1人で何でも先に決めてしまうって…最近僕にちょっと反抗するんだ。でも、ほら、そういうのって思春期にはよくあることだよね？」
「そう言うあなただって、同じ年じゃないの」
　ヘレナはクスリと笑った。
　化粧っ気のないヘレナの顔は、30を過ぎた今でも充分に美しい。炎の滝のような髪、すっと通った鼻筋、ふっくらと形のいい唇。男性の目を釘付けにしそうな大柄でよく目立つ華やかな容姿をしているが、琥珀色をした瞳は研ぎ澄まされた知性に溢れている。美しく賢い母親は、幼い頃からクリスターの自慢だった。
　感情的になった姿をほとんど見たことのない、いつも落ち着いた

理性的な母の傍にいたものだから、学校に入って、むしろ感情の生き物であることが多い他の女の子達と知り合うようになって、最初のうちクリスターは戸惑ったものだ。
「仲のいいあなたたちが、こんなに長い間冷戦状態にあるのを見るのは初めてよ」
ヘレナの綺麗な手が、チェス盤の上の駒を進めた。
「あっ」
思わずクリスターは声をあげ、悔しそうに顔をしかめた。自分が劣勢に立たされたことに、持ち前の負けん気がむくむくと沸きあがってくる。
「あなたの言うとおり、大したことじゃないのならいいのだけれど」
クリスターははっとなって顔を上げた。
「本当なのかしら？」
瞬きもせずに正面からクリスターの目を見つめる母に、クリスターは珍しくも反抗心を覚えた。やはりこれも思春期って奴かなと、内心少し思った。
「もし僕が母さんに負けたら、本当のことを言うよ」
挑戦的に答えるクリスターに、ヘレナはくっきりとした眉を軽くはねあげてみせた。
「クリスター、自分にとって大切な問題や、信条や生き方に関わるような重要な事柄を馬鹿げたゲームにしてしまうのは、どんなものかしらね」
クリスターはさっと赤面した。恥ずかしくなって、顔をうつむけた。
「…ごめんなさい」
クリスターは素直に謝った後、しばらくじっと考え込んだ、ヘレナならば、クリスターの悩みを理解してくれるかもしれない。アイヴァースよりも、もしかしたらクリスターの助けになってくれるかも知れない。
クリスターは大きく息を吸い込み、思い切って口を開いた。

「お母さん…あの…あの…」
その時、廊下に置かれた電話が鳴った。
「俺が出よう。いいから、おまえはクリスターの相手をしてやってくれ」
ラースがテレビの前から立ち上がって、電話の応対をするためリビングから出て行った。
「誰からかしら…？」
ヘレナは低く呟いた後、再びクリスターに注意を戻した。問いかけるかのごとく首を傾げる母を、クリスターはためらうように見返した。
「お母さん、僕は…」
廊下の方から、いきなりラースが叫ぶのが聞こえた。
「まさか！　嘘だろう、ジミーの奴が事故にって…！」
ヘレナはまばたきし、廊下の方を振り返った。
ラースは取り乱した声で電話の相手と話している。ジミーというのは、確かラースのプロ時代からの親友だった。今はカリフォルニア州に住んでいるが、何回か家にも遊びに来たので、クリスターも覚えている。
「クリスター、ちょっと待っててね」
ヘレナは立ち上がって、ラースの様子を見るためにリビングから出て行った。
「ちぇっ…」
勝負のつかないままのチェス盤を見下ろし、クリスターは舌打ちをした。
それから、自分でもおかしくなって苦笑した。ヘレナに打ち明けようなどと本気で思ったのだろうか。
「でも、母さんなら、僕を止められるかも」
クリスターはしばらく母が帰ってくるのを待っていたが、落ち着かなくなって立ち上がると、リビングのドアを開けて廊下の様子をうかがいみた。

「ラース…しっかりして……」
親友に関する何かよくない知らせを受け取ったらしい、電話の傍でたくましい肩を落としてうなだれているラースをヘレナがそっと抱きしめて、慰めるように囁いている。
クリスターはつい顔を背け、リビングのドアを閉じた。
チェス盤の前の椅子に戻ると、溜め息をついた。
ヘレナにとっては、子供達よりも、ラースが一番の存在なのだろう。時々大きな子供のようになってしまうラースを、芯の強いヘレナがいつも支えている。
だが、相手が父親とはいえ、ヘレナを取られることには、クリスターはあまりいい気分がしなかった。
「エディプス・コンプレックスっていうのかな…これって」
ぼんやりとつぶやいて、クリスターは放置されたチェス盤に見入った。
「母さんは父さんのものだから、仕方がない。それじゃあ、僕は…？」
クリスターは立ち上がって、リビングから出ると、低い声でささやきあっている両親を眺めやった。
クリスターに気がついたヘレナが何か言いたげな眼差しを投げかけるのに、クリスターは、僕は大丈夫だからというように頷き返すと、そっと2階へ続く階段を上がっていった。
レイフが待っている、2人の子供部屋へと―

SCENE14（前書き）

この小説には性描写が含まれていますので、ご注意ください。

SCENE14

金曜日。双子の両親は、ラースの親友の葬儀に参列するため、一泊の予定でカリフォルニア州へと向かった。

その日の朝、しっかりもののクリスターにレイフのことは任せて、意気消沈のラースと彼を励ますようにして家を出て行くヘレナを双子は見送った。

レイフは、できれば彼らを引き止めたくて仕方がなかった。

「帰るのは明日の夜遅くになるけれど、大丈夫ね、クリスター？」

「うん。僕達のことは心配しないで、母さん。父さんも、気をつけて行ってきてね」

心細いレイフとは違って、クリスターは平然としている。両親を玄関先で送り出した後は、母親の代わりは自分だと言わんばかりの態度で、ぐずぐずしているレイフを奥のキッチンに追いやった。

「ほら、そんな不安そうな顔をしていないで、僕達も早く食事をすませてしまおう。学校に遅れるよ」

別に両親がいなくなるから、レイフは不安な訳ではない。この家で兄と2人きりで過ごさなければならないことが、気詰まりなのだ。

「そんなにオレのことを構うなよ。うるさいぞ、兄貴」

レイフは、クリスターの腕を振り払うようにして、テーブルに着いた。黙々とチョコレートシリアルをかき込み、食べ終わると、すぐにリュックを引っつかんで、クリスターを置いて先に家を飛び出した。

レイフは意図的にクリスターを無視したのだが、クリスターは何も気づかないふりをして、いつもどおりに振舞っている。クリスターのああいうところは、今更ながら腹が立つなとレイフは思った。

あれだけのことがあった後で何も変わったことはないかのようにレイフに接してくるなんて、どういう神経をしているのだろう。

「レイフ！」

バス停でスクールバスを待っている間にすぐにクリスターはレイフに追いつき、いつもどおりの笑顔で話しかけてきた。
「いい加減すねるのはやめろよ、レイフ。僕のしたことが気に入らないから無視するなんて、子供っぽいな」
「何だとっ？！」
カッとなるレイフを、クリスターは冷たい目で見つめ返した。レイフはひんやりとしたものを背筋に覚えた。
「父さんや母さんがいなくなったのは、もっけの幸いだよ。この際だから、今日は、家に帰ってからとことん話し合おう。明日の夜まで時間はたっぷりあるからね。おまえの言い分を僕はみんな聞いてあげるから、おまえも僕の話を聞くんだ」
バス停に到着したスクールバスに他の生徒たちに混じって先に乗り込んでいくクリスターを、レイフはそこに立ち尽くしたまま呆然と見送った。
（クリスターと…話し合う…）
兄と正面から向き合って、ずっと避けていたアイヴァースとの一件について話すことをひどく恐れている自分に、レイフはその時初めて気がついた。

学校から帰ってきたレイフは、子供部屋に入るとすぐに窓を開けて、外の新鮮な空気を部屋に入れた。
その時、窓辺につるしてある硝子のウインド・ベルに手が当たって、涼しげな音が鳴り響くのに、とっさに目をしばたたいた。
「あ…」
硝子でできたイルカが2匹、互いに追いかけっこをするように揺れている。
3年前の夏休み、海辺に遊びに行った時、土産物店で見つけて父

親にせがんで買ってもらったのだ。双子のイルカだ、自分達と同じだと、レイフは欲しがった。
「双子かどうかなんて、分からないのにさ」
ぼんやりと呟いて、レイフは目の前で揺れている硝子のイルカをつついて、澄んだ音が鳴るのに耳を傾けた。
「レイフ」
クリスターが部屋に入ってきた。レイフは振り向きもせずに、揺れるウインド・ベルを眺め続けた。
クリスターはしばらくレイフが答えるのを待った後、自分のデスクから椅子を引っ張り出して、腰を下ろした。
「恐がってないで、こちらを向いたらどうだい、レイフ」
レイフは瞬時に振り返り、悠然と椅子に座っている兄を睨みつけた。
「今日は学校でも1日僕を避けとおしたね、レイフ。双子が喧嘩をしているって、クラスの噂になってしまったよ」
「噂になったら、どうだって言うんだよっ。他の奴らが何と言おうが、関係ないだろっ」
「もちろん、おまえの言うとおりだよ、レイフ。僕達2人は、他の人間の干渉など受けない」
レイフはクリスターの言葉の意味をはかりかねて、まじまじと彼を見返した。
「クリスターって、時々訳が分からねぇよな！」
クリスターは問いかけるかのごとく、軽く頭を傾けた。
「僕のことが理解できないのかい、レイフ？　生まれた時からずっと一緒にいた、誰よりも近しい相棒が何を考えているのかも、おまえはもう分からなくなったのかい？」
レイフは唇を噛み締めた。何の感情もうかべていない、自分とそっくり同じクリスターの顔を凝視した。
顔だけでなく、レイフとクリスターは何もかも同じに作られているはずだった。小さい頃から、レイフはそのことを当たり前のよう

に思ってきた。
（同じ遺伝子、同じＤＮＡのなせる技だよ）
いつだったか、友達とその兄弟達は皆似ているといってもそっくりという訳じゃないのに、どうして自分達はこんなに似ているのだろうと不思議がるレイフに、クリスターはこう答えた。レイフがさっぱり分からない顔をすると、クリスターはもう少し分かりやすい説明をしてくれた。
（僕達はもともとは１つの卵だったんだ。それが何かの拍子で２つに分かれてしまった。僕達は、全く同じものからできているんだよ。同じものを分け合って生まれてきたんだ。だから、ほら…この手を比べてごらんよ。指や爪の形だけじゃない、手の平のしわもうっすらと浮かんだ血管のパターンも皆そっくりだろう。こんな相手、世界中探しても他にはいないよ）
その話を聞いて、レイフには合点がいったような気がした。どうして、クリスターとくっついていると、とても安心できるのか、それが一番自然な状態のように感じられるのか。２つに引き裂かれてはいるけれど、クリスターはレイフの一部、もう１人のレイフ自身だからだ。
「昔は、こんなじゃなかった」
今は全く本心の読めないクリスターの奇妙な態度をもどかしく思いながら、レイフは首を振った。
「クリスターのことは、オレとどこかつながっているに違いないって思うくらいに何でもよく分かったよ。でも、いつの頃からかおまえはどんどん変わっていって…今じゃ、何を考えてるのかさっぱり分からない、他人みたいになっちまった…」
途方に暮れ、泣きそうな気分で、レイフはクリスターに向かって切々と訴えた。
「なあ、どうしてなんだよ…どうして、いつもいつも、オレを置いておまえばかりが先に行っちまうんだよ。オレはクリスターのことが分からなくなるなんて嫌だ…置いていかれたくないよ。でも、オ

レが必死になってついていこうとしても、おまえは少しも立ち止まってくれないで、オレの手の届かない所に行っちまう。オレの理解できない世界を勝手に作って、オレの知らない奴らと勝手につるんで…」

「いつまで、そんな子供みたいなことを言ってるんだよ」

いきなり、クリスターは冷ややかな声でレイフを叱り飛ばした。

「おまえもそろそろ大人になれよ、レイフ。僕がおまえを置いていく、勝手に何でもやってしまう、自分の世界を作ってしまうって…そんなの、当たり前じゃないか」

クリスターの叱責に、レイフはびくっと身を縮めた。

「何もかも同じに生まれて、いつも一緒に生きてきた双子の僕達だって…いつまでも子供のままではいられないんだよ」

クリスターの声は、どこか哀しげに響いた。

「おまえと僕は気性も考え方も違う。全く同じ人間になることは、そもそもできないんだ。それぞれが違う世界を持った独立した大人になっていくしかないんだ。それでも―」

クリスターは、胸の奥から突き上げてくる激しいものを堪えかねたかのように、ふいに言葉を切った。

「僕は、この先もずっとお前と一緒に歩いていきたいと思っているよ。大人になっても、僕の傍らにいるのは、やっぱりレイフ以外には考えられないから…」

クリスターは椅子から立ち上がると、窓の前で息を詰めて待ち受けているレイフに近づいてきた。

「父さんも母さんも、友達のことも僕は大切に思っているけれど、おまえは別格なんだ。僕はレイフが一番好きなんだと言ったら、おまえにも分かってもらえるのかな？」

「あ…」

レイフは目を見開き、喘ぐように息をしながら、すぐ前で立ち止まったクリスターの顔を見つめた。急に早くなった胸の鼓動を意識した。

「で、でも…それじゃあ、アイヴァースは…そうだ、ど、どうして…あんなことをしたんだよっ」
クリスターの衝撃的な告白を思い出し、かぁっと頭に血がのぼるがまま、レイフは怒鳴った。
「アイヴァースのことは別に好きでもなかったなら、どうして…あいつに触らせたんだよ…そんな関係続けたんだよ。興味があったからなんて、そんなこと言うクリスターが信じられないっ。大体、女の子ともまだ…したことなんかないくせにっ」
その瞬間クリスターの顔を過ぎった微妙な表情に、レイフは自分が間違いを口にしたことに気がついた。
女の子とも、とっくに経験済みだったのだ、この悪党は。
「い、いつ…どこで、誰と…？！」
レイフは怒りに駆られ、クリスターにつかみかかった。
「アリスだよ」
弟の激昂ぶりに圧倒された訳ではないだろうが、クリスターはあっさり答えた。
「アリス・ゴールドバーグ。３年前の夏休み、アッシュフィールド湖のキャンプ場で会った…彼女のことは覚えているだろう？」
レイフは、とっさに、クリスターの胸倉をつかんでいた手を離した。
「ア…アリスだって…？」
レイフは愕然となっていた。
「ちょ…ちょっと待てよ…３年前のあの時って…オレ達まだ１１才になったばかりだったじゃないか…お、おまえ…本当にしたのか…？」
「うん」
レイフは、まるでクリスターに殴られたかのようによろめき、後じさりした。
「できたらおまえも誘いたかったんだけれど…おまえってば、まだ全然ねんねだったから…あきらめたんだよ」

残念そうに顔をしかめるクリスターに、レイフはぐうっと唸って、力が抜けたようにへなへなとその場に崩れ落ちた。
「クリスターって…クリスターって…」
レイフは床に座り込んだまま、あくまで落ち着き払っている兄を呆然と見上げた。
レイフとそっくり同じ顔だが、今は全く違って見える。『大人の男』と、そこに大きく書いてあるような気がする。
レイフは、急に自分が乳臭い幼児であるかのように思えてきた。金髪巨乳モデルのグラビアごときで、鼻血を吹いている場合ではなかったのだ。
「ひどいや…オレの知らない間に自分だけさっさと『筆おろし』だなんて、あんまりだよ、兄ちゃん…」
げほっと、クリスターは軽く咳き込んだ。
「レイフ…」
困ったように見下ろすクリスターの視線の下で、すっかり自信を喪失したレイフは、がっくりと頭をうなだれてしまった。
「レイフ、別に…そんなこと、僕がたまたま早かっただけなんだから…機会がなかったからって、おまえが落ち込むようなことじゃないんだよ…」
「慰めんなよ、馬鹿…」
レイフは力なく頭を振るばかりで、とても、これ以上クリスターを責めたり彼の言い分を聞いたりする気力もなくなってしまった。
第一ラウンドで完全にKO負けした気分だった。
（クリスターの奴は、オカマなだけじゃなく、スケコマシだったんだ）
ショックのあまり、クリスターと話し合うどころではなくなってしまったレイフは、その後もずっと悩み続けた。
（ああ、オレって、クリスターのこと、実はあまり知らなかったのかもしれない。同性愛に興味があるって、アイヴァースと関係を持ってしまうことも信じられないし、アリスとのことだってさ、クリ

スターだけ初体験しちゃったなんて…双子の片割れがそんなことしてたのに、オレ、全然気がついてなかった。何だか、すごく情けないや…）

初めは、またしても裏切られたという衝撃と怒りにはらわたが煮えくり返っていたレイフだったが、次第にその思いは、自分に対する情けなさに変わっていった。

（クリスターの言う通りなのかもしれないな。オレ、今までがあんまり子供すぎた。何も知らず、分かろうとせず、クリスターがオレを置いていく、何でも勝手にやってしまうって一方的に責めるのも間違っていたのかもしれない…）

そこまでぼんやりと考えて、レイフは慌ててかぶりを振った。

（だからって、クリスターのしたことを認めた訳でも、許した訳でもないぞ。あいつがオレを裏切って、オレに嘘をついて、騙したことは確かなんだから。それに、オレをはめて、アイヴァースのところに行かせたのだって、よく考えたら、とんでもなくひどいことじゃないか。おかげでオレは、アイヴァースの野郎にクリスターに間違えられて、キ、キスまでされたんだぞ…）

ヘレナが用意していってくれた夕食を温めて一緒に食べた後は、双子達だけの夜は何事もなく更けていった。いつも見るテレビのクイズ番組を見、順番にシャワーを浴びて、そろそろ就寝時間になると、クリスターはテレビを切って、レイフに2階に上がるよう促した。

親がいない時くらい夜更かししてもいいじゃないかと普段のレイフなら逆らったところだが、今の彼にはそんな気概はなかった。

さっさと寝てしまって、この自己嫌悪と自己憐憫の気持ちを忘れたかった。

しかし、部屋の灯りを消して寝床に入ると、またしても悶々と悩みだし、レイフは寝付くことなどできなかった。

（クリスター…やっぱり、オレには理解できないよ。おまえが考えていること、悲しいけど、オレにはもう分かることはできない。お

まえはオレが一番好きだって言ってくれたけど、そんなおまえがオレにしたのは、好きだという言葉とは全然違うようなことで…分からない。だって、もしオレがおまえだったら…おまえにだけは嘘じゃなく本当のことを言いたいと思うもの。騙すなんてとんでもないし…ましてやアイヴァースのところに無防備のまま送り込むなんて、できるわけない。なあ、クリスター、おまえにとって、オレって、何？）

レイフがいつまでも終わらない煩悶に捕らわれていると、上のベッドでクリスターが身じろぎする気配が感じられた。

「レイフ？」

クリスターは上のベッドから滑るように降りてくると、寝床の中でじっと息を殺しているレイフを覗き込んだ。

「眠れないのかい？」

レイフが答えずに押し黙っていると、クリスターはおもむろにレイフの布団を捲り上げて中に入ってこようとした。

「ちょっ…ちょっと…何、勝手に人の寝床の中に入って来るんだよっ」

何故かうろたえ、レイフはクリスターを押し戻そうとした。

「眠れないのなら話の続きをしようよ、レイフ」

クリスターはレイフの手を捕まえ、低い声でささやいた。

「僕達の話しあいは、まだ終わっていないよ」

レイフは息を飲んだ。薄闇の中、己を覗き込むクリスターの瞳は今にも燃え上がって噴きあがりそうな昏い炎をはらんでいるようで、何だか恐かった。

「レイフ」

レイフの腕を捕らえるクリスターの手に力がこもる。

「痛い」

レイフが小さく叫ぶのに、クリスターは手を緩めた。その隙に、レイフはクリスターの脇をすり抜けて、ベッドから脱け出していた。

「そんな恐い顔をする兄貴と話し合いなんかしたくないよっ。オレ、

今夜は父さんのベッドで寝るからっ」
レイフはそう叫ぶと、部屋から出て行こうとした。
「逃げ出すのかい？」
扉に向かって歩いていくレイフの背中に、クリスターの嘲るような声が突き刺さった。
「僕と正面から対決するのが恐いから尻尾を巻いて退散するなんて―男らしくないね、レイフ」
こんな挑発を聞くなり、素直なレイフは扉の前でくるりと回れ右をして、クリスターの所に戻ってきた。
「ば、馬鹿を言うな。オレは恐がってなんかいないぞ。怖気づいて逃げ出すような、そんな弱虫じゃないぞ！」
顔を真っ赤にして拳を振り上げ怒鳴るレイフを、クリスターはまじまじと見返した。
全く、素直と言おうか、単純と言おうか。こんな愉快な弟を相手に吹きだしそうになるのを堪えるかのごとく、クリスターはすっと視線を逸らした。
「じゃあ、こっちにおいでよ」
クリスターは誘いかけるようにレイフの布団を捲り上げた。レイフは、一瞬ひるんだ。
「パジャマのままでうろうろしたら、寒いだろ」
「う、うん」
クリスターが滑るようにレイフのベッドの奥に入っていくのを眺め、レイフも観念したように後に続いた。
「どうしたんだい、固くなって。いつもは、隙あらば僕の寝床にもぐりこんでこようとするのはおまえの方なのにね、レイフ」
「兄貴とは、喧嘩中だから」
「何だよ、それ」
クリスターは、ぷっと吹き出した。
「喧嘩だなんて、大体おまえが一方的に僕に腹を立てて、いつまでもすねてるだけじゃないか」

クリスターが脇腹をつつくのに、レイフは怒って、言い返した。
「怒って当たり前じゃないか。おまえ、自分がしたこと、分かってるのかよっ。ク、クリスターはオレにずっと嘘をついてたんだ。オレは疑ったこともなかった、兄貴を信じきっていたのに、あんなふうに裏切られたら、腹が立って当たり前だろうっ」
「僕がおまえを裏切った？」
「ああ…アイヴァースのことだって、そうだよ。クリスターは絶対そんなことしないって、オレは思ってた。他の誰かから聞かされたら、絶対嘘だって主張する。オレは…おまえがアイヴァースと寝たって聞いた時、すごく嫌だったよ。自分があの野郎にキスされた時よりも、もっとショックだったかもしれない…オレの一番大切なものを汚されたような気分で…我慢できなかった…」
クリスターは黙り込んだ。
「なあ、どうして、あいつと寝ようなんて気になったんだよ？　オレがどう思うか、おまえには分かっていたはずだろう？　それって、やっぱり裏切りじゃないか。それに…アイヴァースのところにオレを騙すようにして送り込んだのも…オレを使ってアイヴァースを追い出そうとしたってことなのか…？　おまえはオレを利用したのかよ、クリスター？」
レイフは哀しげに頭を振った。
「おまえはオレを好きだって言ったけれど…信じてもいいのか、俺には分からない。だってさ、オレは、もう前みたいにお前のことを１００パーセント無条件で信じることなんて、できないよ。おまえの言葉のどこまでが本当で後は嘘なのか…オレには、分からない」
クリスターは小さく息を吸い込んだ。
「レイフ、僕は確かにおまえに色々嘘をついたけれど、一番大切なところまで嘘をついたりしないよ。おまえが…おまえだけが好きだってことは本当だよ。信じてほしいよ」
クリスターは切々と訴えた。
「僕がアイヴァースを学校から追い出そうとしたのは本当だよ。僕

は誰にも言えない悩みを抱えていて、アイヴァースなら助けてくれるかもしれないと彼のカウンセリングを受け始めたんだ。でも、彼は僕の心の奥に隠された秘密に深く入り込みすぎた。僕が望んだ以上に僕の心を暴き出してしまった。だから、切り捨てたんだ。僕には、彼の忠告をこれ以上聞くつもりもなければ、受け入れる意志もなかったから…」

「クリスターの悩みって、何？」

クリスターは言葉を切った。

「それを言ったら、おまえに嫌われるかもしれないようなことだよ」

耳を澄ませていないと聞き取れないような低い声で呟く兄に、レイフは不安を覚えた。

「おまえをアイヴァースの部屋にやったことは、今ではとてもすまないと思うよ、レイフ。そこまでおまえが動揺するなんて、考えなかった…僕が割と平気で受け入れてしまったものだから、おまえも耐えられるだろうなんて、勝手な思い込みをしていた」

「ひ、ひどい奴…」

「僕は、たぶん…おまえに気づいて欲しかったんだ。僕が何をずっと思いつめていたのか、そのためにどんな犠牲を払って、救いや逃げ道を必死になって探してきたのか…レイフには、こんな辛い思いをさせたくない、何も知らず幸せに笑っていて欲しいと願う反面…いつまでも1人無邪気な子供でい続けるおまえに腹が立った。僕が味わった苦い思いの切れ端でもおまえに味わわせたかった…」

クリスターの手が肩にかかるのを、レイフは呆然となったまま意識した。

「僕は…アイヴァースとセックスしたけれど…彼が欲しかった訳じゃない。僕は…レイフ、おまえが欲しかったんだ」

肩にかかったクリスターの手に力が込められ、レイフはベッドの上に押さえつけられた。問いかける間もなく、クリスターが覆い被さってきた。

レイフの唇を塞ぐ、クリスターの唇の濡れた感触。それは、微か

に震えていた。
「レイフ」
声も出せないでいるレイフの顔をクリスターは上から覗き込んだ。
「おまえを愛してる」
レイフの硬直した頬を、クリスターはおずおずと伸ばした手で触れた。
「あ…ぁ…」
レイフは愕然と目を見開いたまま、大きく胸を上下させた。
「だ…あぁっ！」
頓狂な奇声を発して、レイフはクリスターを押しのけ、ベッドから跳ね起きた。その拍子に、天井にしたたかに頭をぶつけ、彼は再び布団の上に沈没した。
「レ、レイフ、大丈夫…？」
布団の上で頭を抱えてうずくまり悶絶している弟を、クリスターは彼らしくもなくおろおろして見下ろした。
「このベッド、やっぱり僕らにはもう狭すぎるね」
どこか寂しげにクリスターは呟いた。
「ク、クリスター…お、おまえ、オレに今、何を…？」
すっかり動転している弟をクリスターは見下ろし、ふっと笑った。
「クリスター？！」
いきなりクリスターに強く抱きすくめられ、レイフは当惑して叫んだ。
「好きだよ、レイフ…おまえに…触れさせてくれ」
「ク、クリスター？　な、何するんだよっ。離せ…よ…」
びっくりして逃げようとするレイフを、クリスターは再びベッドの上に押し倒した。
「おまえだって…興味があるだろ？　僕がアリスと…アイヴァースとどんなふうにしたのか…？」
レイフの頬が紅潮した。
「ば、馬鹿言うなっ」

のしかかってくるクリスターの胸を、レイフは必死に押し返した。
「オレ達、兄弟じゃないかっ！」
「分かってるよ、そんなこと。だから—僕は、悩んできたんだ」
クリスターの顔が悲痛な表情をうかべて歪むのに、レイフは一瞬抵抗を忘れた。
「僕達は小さい頃から何でも共有してきたけれど、これだけはきっと許されないことだと…おまえを欲しいと思ってしまう自分が恐くなったよ。僕はたぶん黙っているべきだったんだろう。おまえが無邪気に僕にじゃれついてくる度に、抱きすくめてキスしたくなる、そんな衝動を抑え続けていればよかったんだろうね。おまえを傷つけないためには。でも、ごめんよ、レイフ…どうしても、できないんだ」
クリスターの苦痛が、レイフの胸にひしひしと伝わってくる。レイフは、クリスターの体の下で、彼の告白に呆然と耳を傾けることしかできないでいた。
「僕はおまえを愛してるよ。でも、レイフ、おまえだって、同じように僕のことを欲しいと、もしかしたら思ってくれるかもしれない…いつだって僕達は同じものを好きになって、欲しがった…そうだろう？」
クリスターは、レイフの額になだめるような優しいキスをした。
「う…」
レイフは激しく身を震わせた。
「レイフ、レイフ…お願いだよ」
クリスターは震える手でレイフの頬に触れ、首筋に滑らせた。パジャマのボタンを外そうとした。
「ク、クリスター…駄目だよ…」
レイフはとっさにクリスターの手をつかみ、ベッドから上体を起こした。
「レイフ…」
レイフを見つめるクリスターの顔が歪んだ。慄いたような大きく

目を見開き、唇を震わせて、その顔はまるで今にも泣き出しそうに見えた。
「僕を拒まないで…嫌いにならないで…」
今にも崩れ落ちてしまいそうな自分を精一杯の気概を奮い起こしてかろうじて支えているような、こんなクリスターをレイフは初めて見た。
いつものような支配的な態度でクリスターが押し通したら、レイフは反発できたかもしれない。しかし、クリスターの意外なもろさが、レイフを無力にした。
レイフはつかんでいたクリスターの手を離した。途方に暮れたように、兄を見返した。
「クリスター、オレ…オレだって…クリスターのことは、誰より好きだよ、でも…」
クリスターの瞳が再び強い光を帯びた。彼はレイフのパジャマに手を伸ばして、1つずつ、ボタンを外していった。
レイフは、なぜか、やめろとは言えなくなった。クリスターの指先から伝わる震えのせいかもしれなかった。
「こんなことなら、僕達はしたことがあっただろう、昔…」
それは、レイフも今思い出していたことだった。幼い頃、裸になって肌を寄せ合って眠ると、彼らはとても安心できた。
「うん…」
でも、2人はもう幼い子供ではない。
レイフのパジャマの上着を脱がせると、クリスターは自分も上半身裸になって、レイフを抱き寄せて横になった。
「気持ちいいだろう？」
クリスターの肌の温もり、その感触、その匂い。こんなにも近くに感じたことは、レイフにとって久しぶりだった。
レイフがじっと押し黙っていると、クリスターは再びレイフの上に乗ってきた。
「もっとよくしてあげるよ、レイフ…乱暴なんかしないから…」

クリスターの手がパジャマのズボンにかかるのに、レイフは動揺した。
「ちょっ、ちょっと…待て…って…」
焦ったレイフが振り回した手が、クリスターの肩にあたり、よろめいた彼は二段ベッドの梯子に体をぶち当てた。
「あ、ごめん…」
梯子にぶつけた腕をつかんで顔をしかめているクリスターに、レイフはつい謝ってしまった。
気まずい沈黙が、双子達の間に流れた。
「くそ…っ…」
レイフはどうしたらいいのか分からなくなって、うつむき、それから、再び兄を見た。
クリスターは哀しげにレイフを見つめ返すばかりだ。
レイフの中で、何かが弾けた。
「分かった…分かったから、もう、そんな目でオレを見るなよ、クリスター！」
カッとなるのに任せて、レイフはクリスターに向かって叩きつけるように叫んでいた。
「クリスターがオレをどうしても欲しいって言うんなら、いいよ。おまえにやるよ」
言ったとたん、火がついたように全身が熱くなるのをレイフは感じた。
「でも、ここじゃ、いくらなんでも狭くて不自由だよな…よしっ…」
はたと思いついたように手を打って、レイフはベッドから脱け出すと、クリスターが何事かと見守る中、上のベッドによじ登った。クリスターの寝床のマットレスをはずして、シーツごと床に放り投げた。
「オレのベッドのマットレスも外せよ、クリスター。床に並べて敷いたら、広くなって、オレたち2人が寝るには丁度よくなるだろ」
一瞬呆気に取られた様子のクリスターだったが、レイフの提案に

従って、彼もベッドからマットレスを外し、床に敷いて、その上からシーツもかけて、レイフと2人がかりで仮の寝床をこしらえた。
「結構いい感じじゃん」
クリスターのベッドから下ろしてきた布団を体に巻きつけて、マットレスの上に座り込んだレイフは、傍らのクリスターに笑いかけた。
しかし、クリスターが笑い返さず、相変わらず思いつめた顔でレイフを見つめるのに、レイフの顔からも微笑が消えた。
「ええと…」
再びつのってきた緊張感にレイフは焦った。クリスターはレイフがかぶっている布団を押しやって、彼をそっと抱きしめた。
「もう、いいだろ？」
「う…うん…たぶん…」
レイフは、クリスターが自分のパジャマのズボンと下着を脱がせる間、赤い顔をして、おとなしくじっとしていた。しかし、クリスターが同じように裸になった瞬間、激しくうろたえて顔を背けた。
「僕を見ろよ、レイフ」
「見なくたって分かるよ。どうせ同じなんだからっ」
「同じだから…余計に見たいんじゃないか」
クリスターが小さく笑うのに、レイフは何だか恥ずかしくなって、うつむいた。
「あ…」
クリスターがレイフの手をつかんで、彼をシーツに引き倒した。
「恐がらなくていいよ…僕がおまえにひどいことをするはずないじゃないか…？」
「クリスター」
クリスターはレイフの唇に口付けをすると、胸の上に置いた手をゆるやかに滑らせた。途端にレイフの肌が泡立つ。
クリスターは、つい歯を食いしばったまま息をとめているレイフの緊張をほぐすように、優しく唇をついばんだ。ついに堪えなくな

ったレイフが口を開くと、更に深く唇を重ねてきた。
「ぷはっ…」
クリスターが離れた瞬間、レイフは大きく空気を吸い込んだ。むせて咳き込んだ。そんな彼の体をゆるく抱きしめ、クリスターは唇を首の方に滑らせた。
「あっ…」
クリスターに首筋を強く吸われ、レイフはつい変な声を漏らしてしまった。びっくりして、目をしばたたいた。
「双子って…感じるところまで、一緒なのかな…？」
レイフの手を取って甲に唇を押し当てるクリスターを、レイフは呆然と見上げた。
そんなレイフの胸から腹にかけて、クリスターは慎重に撫で下ろしていく。薄い胸の下でわなないている心臓の鼓動を確かめるかのごとく、クリスターはレイフの胸の上にそっと頭を置いた。
レイフの体がクリスターの下で大きく震え、跳ね上がった。
「ちょっ…ちょって待て…そんなとこ、触んなっ…！」
体の中心にある敏感な部分をクリスターの手に包み込まれて、レイフは反射的に暴れ、クリスターを押しのけようとした。
しかし、クリスターも本気を出したらしい。レイフの抵抗にもひるまず、痙攣する彼の体を強く抱きすくめ愛撫し続けた。
「クリス…ター…」
のけぞったレイフの喉が低く鳴った。そこにも、クリスターは唇を押し当てた。
「好きだよ、レイフ」
その囁きに、レイフの興奮は一層掻き立てられた。目を閉じて激しく頭を振り、腕を上げて、レイフは顔を隠そうとした。その腕をクリスターは押しのけた。
「見せてくれよ、おまえの顔を…」
レイフは快感に打ち震えながら、目を見開いた。
自分を見下ろすクリスターの顔がいつもと違っていることにレイ

フは何かしらはっとした。興奮に我を忘れ、身のうちを駆け回る飢渇に狂わんばかりになっている、切迫した若い雄の顔に、つい目が釘付けになった。
レイフ自身も今、こんな顔をしているのだろうか。そう思った途端、かつてないほどの興奮にレイフは襲われた。
「クリスター…クリスター…」
レイフは快感に身悶えし、クリスターの体を無我夢中で捕まえて、引き寄せた。
「レイフ…じっとしていてくれよ」
クリスターはレイフの汗ばんだ背中に手を回し、腰から尻の方へ撫で下ろした。
「あっ…あぁっ?!」
クリスターの指がいきなり内部に押し入ってくるのに、動転したレイフは激しくもがいた。
「ば、馬鹿、何すんだよ?!　早くそれ、抜けっ…気持ち悪い…」
「慣らしておかないと、おまえが辛いんだよ。じっとして…すぐに気持ちよくなるからさ」
クリスターは暴れるレイフを押さえ込み、殴られ髪を引っ張られてもひるまずに、誰にも触れられたことのない固いそこを辛抱強くほぐしていった。
「ひっ…い……」
レイフにとっては信じられないことだが、微妙な刺激を与えながら内壁を探りかき回すクリスターの指の感触が、本当に気持ちよくなってきた。これだけでは足りない、もっと刺激が欲しくなってきた。
「ほら、僕の言ったとおりだろ?」
揶揄を含んだ声で言うなり、クリスターはもう1本指を増やした。レイフの体が弓なりに反り返る。
「う…そ……」
レイフが初めて知る快感だった。こんなにも興奮したことは、か

つてなかった。
　レイフの体を翻弄していたクリスターの指が唐突に抜かれた瞬間、レイフは不満げに唸った。
「レイフ、力をぬいて…ひどくはしないから…」
　クリスターはレイフの脚を高く持ち上げ開かせた。
「いっ…いた…痛いっ…クリスター、やっぱり嫌だ…やめろよっ…」
　貫かれた瞬間、レイフは悲鳴をあげた。ひどくしないと言ったくせに、全然嘘だと思った。
「もうやめてくれ…よぉ…」
　レイフは拳でクリスターの肩を叩き、脚をばたつかせ、何とか逃げようするが、ずり上がった体はクリスターによって再び引き戻される。
「クリスター！」
　レイフは泣き喚いた。
「レイフ…レイフ…目を開けて…」
　固く目を閉ざして泣いていたレイフは、クリスターがあがった息の合間に呼びかけるのに、うっすらと目を開けた。
「僕を見て…」と、クリスターは甘く掠れた声でささやいた。
　己を食い入るように見つめるクリスターの上気した顔に、レイフは大きく息を吸い込んだ。交接の痛みも抵抗することも忘れ、呪縛されたように、レイフはクリスターの顔から目を離せなくなった。いつもとは違うクリスターの顔を、いつまでもこうして眺めていたいような気がした。
「感じて…僕を…」
　束の間動きを止めていたクリスターが腰を動かした。途端に、レイフの口から、自分のものとは思えないような嬌声が漏れた。
　クリスターの顔に、会心の笑みがうかんだ。
「ほら、やっぱり…いいじゃないか」
　レイフは、己の中にともった火が全身に燃え広がるのを覚えた。抑制が弾け飛んだ。引き裂かれる痛みを凌駕する興奮が込み上げて

くるのに震え、クリスターが突き上げるのに合わせて、レイフは悦びの叫びをあげた。
「クリスター…あぁ…っ…」
レイフが快感に我を忘れ、乱れていくのに、クリスターもますます昂ぶっていった。
「レイフ…レイ…フ…僕の…可愛い弟…」
快感の波に襲われ、押し上げられ、揉みくちゃになりながらも、レイフは目だけはしっかりと見開いて、己の上でやはり乱れ狂うもう1人の姿を見つめていた。
「クリスター…兄…ちゃん…」
レイフもクリスターも汗みずくになって、ふいごのように胸を激しく動かして息をし、そっくり同じ体を絡ませあってうごめきながら、快感のあまり狂わんばかりの形相をしている。
レイフは、よく知っているものなのに初めて見たような気がする、この顔が誰のものなのか次第に分からなくなってくるという、妖しい惑乱に圧倒されていた。
それはレイフと同じ顔。空気を求めて大きく開かれて口から漏れる喘ぎも嬌声も、同じに響く。一体と化した生き物のように絡まりあう、その体もレイフとそっくり同じものなのだ。
抱いているのは誰なのか？　抱かれているのは誰？　レイフか？
それともクリスターか？
熱に浮かされた目をして、クリスターもレイフをむさぼるように見続けている。
2人は共に高めあい、頂目指して一気に登りつめていった。
「あぁ…ああーっ」
ふいに、クリスターの体がぐんと反りかえり、大きく打ち震えた。
レイフもほとんど同時に最後の絶叫をあげて、体を硬直させた。
クリスターの汗ばんだ頬がぴくぴくと痙攣し、ついで、ふっとあらゆる緊張が解かれた。
クリスターはレイフの頭の傍に手をついて、水から上がったばか

りの人のようにしばし苦しげに喘いでいたが、その顔から先程までの切迫した表情は消えうせ、満ち足りた穏やかさが漂ってきた。
「レイフ」
クリスターはレイフを見下ろし、優しく微笑んだ。レイフは瞬きも忘れて、兄の表情、その仕草の全てに魅せられたかのように見入っていた。
クリスターは身を屈めて、レイフの唇にキスをした。レイフは不思議なほどの幸福感にひたりながら、それを素直に受け入れた。
「愛しているよ」
レイフは、こくんと頷いた。
クリスターが名残惜しげにレイフの体の中から退いた時には、レイフも残念に思ったくらいだ。
それでも、クリスターが己の隣に身を落ち着けて、熱のこもった肌をすり寄せレイフを抱きしめてくれるのにほっとした。
こんなにも完璧な体験をしたことは、レイフにはかつてなかった。こんな悦びを知ってしまった後でも、これまで接していた世界は以前と同じに見えるだろうか。
「クリスター、好きだよ」
レイフは傍らの熱い体に自分も腕を回して、うっとりと目を閉じた。
かけがえのない人と他には見つからない特別な体験を共有したのだという満足感しか、今のレイフには感じられなかった。
何もかもが自然なことのように思えた。レイフとクリスターはそうなるべくなったのだと、直感的にレイフは確信していた。
この2人きりの子供部屋、急ごしらえの寝床の中で互いの体に回した腕の中に存在する、暗く温かい小宇宙の中に漂いながら―。
（クリスターはオレのもので、オレはクリスターのものだ。それだけでいい、他には、何もいらない）
彼ら2人の幸福な楽園には、まだ罪の慄きも後ろめたさも入り込んでくる余地はない。

実際レイフは、自分達以外の所にある他の世界の存在を忘れ果てていた。
（クリスターと一緒に…こうして、ずっと…）
少なくとも、兄と2人で過ごす、この完成された一時においては―。

SCENE15

『お父さん、お父さんっ、ねえねえ、空中ブランコしてよっ』
もうずっと昔、幼い双子達が子犬のようにじゃれかかって、そんな遊びをせがむと、子煩悩の父親はわずらわしげにすることなくいつも相手をしてくれた。
小さかった兄弟には、父親は今よりももっと強く逞しく見え、その太い腕にぶら下がってぐるぐる回してもらうのが楽しくて仕方がなかった。
きゃあきゃあとはしゃいだ声をあげる、そっくり同じ顔をした小さな息子達を見る父の目はいつも優しく温かくて、自分達が愛されているのだということを幼いながらに彼らははっきりと感じとっていた。
『お父さんの一番の宝はおまえ達だよ、クリスター、レイフ。父さんは昔追いかけた夢は失ったけれど、その代わりにおまえ達を授かることができた。おまえ達を守って大きくしてやることが、立派な大人になったおまえ達を見ることが、父さんの今の夢だな。だから…生まれてきてくれて、ありがとうな』
いつだったか、双子の誕生日にそんなことを語りかけてきたラースのことを、レイフは夢うつつに思い出していた。
(ああ、どうして、こんな昔のことなんか思い出すのかなぁ)
きらきらと何かが目の辺りできらめくのに、レイフは眩しげに顔をしかめ、上げた手で光をさえぎった。
(朝なんだ…)
一瞬学校に行かなくてはと思ったが、今日が休みであることを思い出してほっとする。
レイフがうっすらと目を開けると、窓から差し込む光を受けてきらきらと輝く硝子のイルカのウインド・ベルが視界に入ってきた。
そう言えば、あれも父親に買ってもらったものだった。双子が揃

って一生懸命にねだれば、ラースは結局駄目だとは言わなかった。いつだって子供に甘すぎるくらい甘い親だった。
ぼんやりと窓辺にぶらさがった双子のイルカを眺めていたレイフの顔が、次第にはっきりとしたものになっていった。
「あ…？」
レイフは瞬きをした。
とっさに寝床から跳ね起きた。瞬間腰に覚えた馴染みのない痛みに、レイフは顔をしかめた。
「えっ…え…？」
レイフは、そこに見出すものを恐れるかのように己の傍らを見下ろした。すると、やはりそこにはレイフと同じ裸の兄がいて、満ち足りた幸福そうな微笑を口元にうかべて眠っていた。
クリスターのむき出しになった胸や首筋には、暗い薔薇色をした跡が幾つも残っている。レイフが残したのだ。同じ跡はレイフの体のそこかしこにも残っている。クリスターがつけたものだ。
ドキドキと、レイフの心臓は激しく打ちはじめた。慄き、打ち震えていた。
「オレ…オレ達は…一体、何をした…？」
朝の光と共に、昨夜見た幸福な夢も一気に覚めてしまったようだ。様々な現実が一気に頭の中に押し寄せてきて、レイフは、いまや自分たちが越えてはならない一線を踏み越えてしまったことへの罪の意識に恐れおののいている。
「どうしよう…どうしよう…」
混乱したレイフは、低い声で呟きながら頭をかきむしった。その目は、怯えながら、依然として安らかな眠りを貪っている兄に向けられている。
その瞼が次の瞬間にでも開いたら、クリスターににっこり笑いかけられたら―。
想像して、レイフは身震いし、我が身をかき抱いた。
たぶん、レイフは、またクリスターに捕まってしまうだろう。今

でもまだ昨夜の高揚と幸福感の名残はレイフの中にある。レイフの半分は、まだ惹かれている。
「クリスター…」
レイフは後ろめたさを覚えながらも、クリスターの薔薇色をした頬に唇を押しあてずにはいられなかった。恐くなってすぐに身を引いたが、クリスターを今でも欲しがっている自分に否応なく気づかされた。
「でも、こんなこと…やっぱり…続けられない…」
レイフは兄を起こさぬように気をつけながら、そっと寝床から抜け出した。
脱ぎ散らかしたパジャマを拾い集める間にも、昨夜の行為を思い出させる熱っぽい痛みが感じられた。
レイフは、束の間、途方に暮れたようにクリスターを見下ろした。
「シャワー…浴びてこよう」
ポツリと呟いて、レイフは子供部屋を出、浴室に向かった。
体を洗い流しても、レイフがクリスターと一緒に犯した罪が洗い落とせる訳ではないとは百も承知していたけれど―。

その後しばらくして起きだしてきたクリスターは、リビングでぼうっとテレビを見ていたレイフにいつもと何も変わらぬような笑顔でおはようと言って、彼を抱き寄せ頬に唇を押し当てた。
レイフが戸惑うくらい、クリスターには少しも後ろめたがっている様子はなかった。
（クリスターってば、恐くないのかよ、不安にならないのかよ。おまえは、オレ達がしてしまったことを平気で受け入れられるのか？）
レイフは心の中で兄に向かって訴えかけたが、それを実際口に出して、クリスターに詰め寄る勇気は持てなかった。

両親のいない休日を、2人は、近くのリクリエーション・センターに出かけて、そこで会った友達と一緒にボウリングをしたり、その友達の家に遊びに行ったりして過ごした。家の中で兄と2人きりで過ごしたくはなかったレイフは、密かにほっとしていた。

友人達と遊んでいる時も、レイフが鼻白むくらい、クリスターにはいつもと変わった所はなかった。楽天的で悩みらしい悩みなど抱えたことのないレイフが、こんなに深刻な気分になっているというのに、どういうことだ？

家に戻って、夜になると、レイフはまた不安になってきた。昨夜のようなおかしな事態になったらどうしようと警戒していたのだが、クリスターがレイフに迫ってくることはなかった。

もしかしたら、クリスターは昨夜のことは一度だけの過ちとして忘れるつもりなのだろうか。それはそれでレイフには何やら釈然としなかった。なかったことになど、できるはずがない。

それでも、夜遅くになって両親が帰ってきた時、彼らの車が家の前で止まった、その瞬間―。

圧倒的な安堵とほのかな落胆が入り混じった複雑な気分で溜め息をついたレイフに、ふいにクリスターが身を寄せてきたのだ。

「レイフ」

クリスターはレイフを強く抱きすくめ、その顔を覗き込んだ。

「僕は、レイフが一番大切だから―父さんや母さんよりもだよ。僕がおまえを誰よりも愛しているってことを、覚えていてくれ」

その意思的な瞳がクリスターの本気を語っている。

レイフが答えられないでいると、クリスターは素早くレイフの唇にキスをした。熱く激しい恋人同士のキスだ。

玄関の扉の鍵をあける音がした。

「クリスター、レイフ、今帰ったぞ。おお、起きて待っていてくれたのか？」

ラースの声にレイフが身震いした瞬間、クリスターは身を離した。

「お帰りなさい、父さん、母さん」

クリスターはレイフの肩をぽんと叩くと、何事もなかったかのように両親を出迎えに玄関に向かった。
レイフは、その場に1人呆然と立ちつくしていた。
クリスターに抱きしめられキスされた途端、体はすぐに反応しそうになった。クリスターの体に腕を回して、あの激しいキスに自らも応えたかった。
なかったことになどするつもりは、クリスターには全くないのだ。自分達は兄弟だけれど、同時に恋人同士なのだと、当然のことのように考えている。
一度レイフを手に入れてしまったクリスターは、もはや彼を逃がしてはくれないだろう。
「どうしよう…」
レイフは、今更ながら、実の兄を心底恐ろしいと感じていた。

その夜は、何事もなかった。
両親の顔を見てしばらく話した後は、レイフとクリスターは2階に上って、それぞれのベッドで眠った。
レイフはまんじりとしてほとんど眠れなかったが、クリスターは熟睡できたようだ。
（オレは、やっぱり恐いよ、クリスター…こんなこと、父さんや母さんに知られたらって想像すると、本当に恐い。おまえは考えないのかよ？　父さん達がどんなにショックを受けるか、どんなに苦しむか。オレ、やっぱり父さん達を悲しませるのは嫌だよ）
翌日のレイフは、寝不足のせいもあるが、起きてからずっと憂鬱な顔をしていた。
ラースは急な葬儀に参加するために離れなければならなかった仕事の様子を見るために、朝から出かけていた。

（でも、母さんがいてくれるからよかったよ。母さんの前では、さすがの兄貴も変なことはできないだろうし）
それに、母親を交えると、クリスターとレイフの関係も怪しげなものではなく、何となくいつもと同じ雰囲気に戻って、普段と変わらぬ会話をすることができた。
「母さんがいない間、何も変わったことはなかった？」
「うん、僕達2人でちゃんとやれたと思うよ。食事もちゃんと食べて後片付けもしたし、夜更かしもせずにいつもの時間に寝たし」
しれっとした顔で母に対して嘘をつくクリスターはやはり悪党だと、レイフは思った。だからと言って、レイフが本当のことを打ち明けるわけにはいかないが。
クリスターがヘレナと話している一方、昼食のテーブルについて料理ができるのを待っている間もレイフは悶々と考え事をしていた。
（母さんは取り乱したことのない人だけれど、自分たちが留守の間息子達はセックスしてましたなんて聞かされたら…いくらなんでも動転するよなぁ）
やがて、ヘレナは出来上がった皿を双子達の前に置いた。
「おなかが空いたでしょ。母さんは、ちょっとだけ父さんのオフィスを覗いてこようと思うから、あなた達だけ先に食べなさい」
食べ盛りの子供達のためのボリューム満点の今日のランチは、いつも買っている肉屋のスペシャルサイズのジャーマン・ソーセージだ。レイフの好物なのだが、何と言おうか、よりにもよって今、これだけは見たくなかった形状だ。
「どうしたんだよ、レイフ。早く食べないと冷めるよ」
平気な顔をして、クリスターはフォークでソーセージを突き刺し、かぶりついている。
もしかしたらクリスターより自分の方がナイーブなのかもしれないと、おいしそうにソーセージを食べている兄からうろたえつつ視線を外し、レイフは思った。
固まったまま、うつろな目で皿の上の大きな肉色のソーセージを

凝視している弟に、やがてクリスターも気がついた。
「馬鹿…何、想像してるんだよ」
クリスターが顔をしかめて囁くのに、レイフは居たたまれなくなった。
「ほっとけ、馬鹿兄貴！」
恥ずかしさに真っ赤になったレイフは、そう怒鳴ると椅子から立ちあがり、昼食のテーブルから逃げ出した。
「あら、どうしたの、レイフは？」
外出の準備をしていたヘレナが、キッチンに再び顔を覗かせた。
「今、2階に駆け上がって行ったわよね。レイフが食事にほとんど手をつけないなんて、信じられないわ」
クリスターは一瞬答えにくそうな顔になった。
「心配しないでいいよ、母さん。レイフも思春期だから、色々悩んだり不安定になったりすることもあるんだよ。僕が後でなだめておくからさ」
ヘレナは、美しい髪に指を滑らせながら、探るかのような眼差しをクリスターに向けた。
「クリスター、私達が留守の間、レイフと何かあったの？」
クリスターの心臓が、胸のうちでびくんと震え上がった。
「どうして？」
「レイフの態度を見ていれば分かるわ。あの子は嘘のつけない子ですもの。あなたに接する時のぎこちなさやあの不安そうな目…喧嘩をしたという雰囲気でもない…後ろめたそうにしていると言えばいいのかしら。いずれにせよ、レイフらしくない様子よ」
勘の鋭い母を必死の自制心を働かせてまっすぐに見返しながら、クリスターは、レイフが恐がる気持ちを少し理解していた。
愛する母親にあのことを打ち明ける勇気は、やはりクリスターにも持てなかった。一生の秘密として抱えていくしかないのだろう。
「確かにちょっと喧嘩というか…僕はレイフのことを、いつまでも子供いる気かって馬鹿にしたような言い方をして、レイフがすねた

ことはあったけれど、そんなに深刻な争いはしていないよ」
クリスターはつとめて平静さを装いながら、ゆっくりと答えた。
「たぶん、まだレイフはアイヴァースとの一件を引きずっているんだと思うよ。昨日もそれで嫌な夢を見たらしくて、だから朝から憂鬱そうだろう？」
「まあ…レイフが、まだそれほどあの事件を引きずっているなら…やっぱり、それこそ専門のセラピーにかかった方がいいのかもしれないわね。でも…」
ヘレナは納得しきれないかのように首をかしげ、クリスターを凝視した。
母親にこれ以上追及されても自分は持ちこたえられるだろうかとクリスターは警戒したが、ヘレナは込み上げてくる嫌な考えを振り払うかのごとく頭を振ると、クリスターに向けて優しく微笑んでみせた。
「分かったわ、クリスター。私はあなたを信じます。レイフのことをお願いね、お兄ちゃん」
ちくんとクリスターの胸の奥が痛んだ。
ヘレナが外出するのを玄関まで見送った後、クリスターは深い溜め息をついた。胸をそっと押さえた。平気だと思っていたはずなのに、案外辛いものだ。自分を愛し信頼してくれている母や父を裏切ることは。
だから、レイフの辛さも理解してやるべきなのだろう。しかし―。
「もっと辛いのは、自分自身を裏切ることだよ、レイフ」
クリスターは、階段の下からレイフが逃げていった2階を見やった。
意を決したように、クリスターは階段を上っていく。目指すのは、レイフがいる子供部屋だ。
「レイフ、入るよ」
自分の部屋でもあるのだが、一応ちゃんと断ってからクリスターは扉を開けた。

クリスターから隠れるようにベッドの中にもぐりこんでいるだろうと思っていたレイフは、開けた窓の前に立っていて、風に揺れるウインド・ベルを眺めていた。
「レイフ？」
クリスターが呼びかけると、レイフは一瞬身をすくめた。それから、躊躇いがちに兄の方を向いた。
「母さんは出かけていったよ。今この家にいるのは僕達２人だけだ、レイフ」
レイフの琥珀色の瞳が心細げに揺れるのに、クリスターは苛立ちを覚えた。
「どうして、そんな目で僕を見るんだ、レイフ？」
クリスターは、ついきつい口調でレイフを問い詰めてしまった。
「僕を恐がるのはよせよ。僕がおまえを傷つけるとでもいうのか？言っただろう、僕はおまえを愛しているって…おまえだって僕を愛している。それなのに―」
「クリスター、やめろよっ」
レイフはさっと青ざめて、両手で耳を塞いだ。
「そんなこと、もう言うなっ。兄弟で、あ、愛しているだの、セックスだのって、やっぱりどう考えても異常だよ…ゆ、許されるはずがない…」
「ふうん、そう言うレイフは誰に許してもらいたいのさ。神様？父さんや母さん？　僕は誰にも許してもらおうなんて、思わないよ。おまえさえいてくれれば、他のことは僕にはどうだっていいんだ」
クリスターはつかつかとレイフに近づくと、その体を抱きすくめ、強引にキスをした。
「クリスター！」
レイフは必死になってもがき、兄の抱擁から逃げた。
「オ、オレの体に勝手に触るなよっ。嫌がってるのにキスするなんて、反則だぞ」
守るかのごとく自分の体に腕を回すレイフの上気した顔を眺めつ

つ、クリスターは皮肉っぽく唇を歪めた。
「嫌がっているふうには見えないよ。レイフってば、本当に嘘がつけないんだね。今だって、しっかり感じたじゃないか。正直に言えよ、レイフ。僕にキスしたい。父さんと母さんがいない、この隙に僕とまたやりたいって」
レイフは火を吹かんばかりに真っ赤になった。
「僕を欲しくないなんて言わせないよ」
クリスターは凄みを含んだ声でささやいた。
「あの夜のことを思い出せよ、レイフ。忘れることなんて、お前にはできないはずだよ。僕はよく覚えている…あの時のおまえの顔…おまえが、どんな可愛い声をあげて僕にしがみ付き、体を押し付けてきたのか。僕とやっててすごく気持ちよかっただろう？　あんまりよかったものだから、二度目は、おまえは自分で僕を抱きたがった。はっきり言って、おまえは救いようがなく下手だったけれど、おまえが望むなら、僕はまた受身をしてあげてもいいよ」
クリスターは腰に手をつき、誘いかけるように目を細め、傲然と顎をそびやかした。
「う…うう…」
レイフは、激昂のあまり、言葉がうまく出てこないようだった。込み上げてくる怒りと恥ずかしさに涙ぐみながら、殺してやりたいとばかりにクリスターの不敵な顔を睨みつけた。
「あぁぁっ、くそぅっ！」
レイフは、癇癪を起こした幼児のように、激しく足を踏み鳴らした。
「そうさ、その通りだよっ。オレはクリスターとやってて、ものすごく感じたさっ。もう、この世の中にこんなに気持ちがいいことがあったなんて信じられないってくらい、死ぬほどよかったさ。あのままやりすぎて死んでしまってもきっと本望だった。こんなおいしい体験をさせてくれてありがとう、ごちそうさまって、おまえに礼を言いたいくらい、強烈によかったともさっ！」

頭に血が上ったレイフがこんな馬鹿なことを大声で怒鳴り散らすのに、さすがのクリスターも怯んで、うっすらと頬を染めうつむいた。
「それは…言い過ぎというものだよ、レイフ」
はあはあと息を切らせているレイフと恥ずかしそうに目を伏せているクリスター、双子達の間にしばし空虚な沈黙が流れた。
「オレ…」
先に口を開いたのは、頭が冷えてきたらしいレイフだった。
「オレはクリスターを愛しているよ。おまえが、オレにとってはこの世で一番の存在だと思う」
考えをめぐらせながら、ゆっくりと自分の言葉で、レイフは本当の気持ちを語りだした。
「でも、オレには…たとえおまえと2人で幸せになれたとしても、それによって傷つくだろう他の人達を忘れてしまうことはできないよ…父さんや母さんを悲しませたくない…友達だってなくしたくないし…オレ達だけがよければ他はどうなっても構わないなんて…そんなのオレには無理だ…」
レイフが哀しげに顔を歪めながら語るのに、クリスターは呆然と聞き入っていた。
「なあ、クリスター、オレ達はどこまでいっても兄弟でしかありえないんだよ。双子ってもともとは1つの卵だったんだって、おまえはいつか教えてくれたけれど…確かにオレは時々おまえを自分の一部のように感じることがあるよ。おまえと、その…してた時も、引き裂かれたオレの半分が戻ってきたような満ち足りた幸せを感じた…でも、それも錯覚なんだ。オレ達はやっぱり別の体と心を持っていて、それらは絶対あんなふうに結びついちゃ駄目なんだ。クリスターはオレの大切な兄貴だ。オレはおまえの弟だ。これからもずっと…それ以外のものにはなれない」
クリスターは、体の脇でだらりと垂らしていた手を握りしめた。
「レイフ…」

頭ががんがんと鳴り響いている。レイフの言ったことは嘘だとクリスターは叫びたかった。
「レイフ…僕を拒むのかい、そんなこと…おまえにできるはずがない…」
不覚にも涙が溢れてくるのを、クリスターは熱くなった意識の片隅で感じた。
「そんなこと―許さないっ！」
クリスターは怒りと悲しみに体を震わせながら、叫んだ。
「許すものか、レイフ…レイフ…おまえは使い慣れない理屈で自分をだましている…僕をだましている…この僕がおまえのためなら捨てられるものを…おまえに捨てられないはずがない…」
兄の激昂に怯えたように後ずさりするレイフに、クリスターは狂おしげに手を伸ばした。
「逃げるな、レイフ！　おまえは、僕の―」
言いかけた瞬間、クリスターの顔つきが変わった。
（クリスター。もしもレイフが君と共にいることを望まず、君から離れていこうとしたら、その時一体君はどうするんだい？　）
アイヴァースがクリスターに突きつけた究極の問いかけを、今、クリスターはまざまざと思い出していた。
レイフの不安げに慄いた顔を見つめながら、クリスターは愕然となっていた。
（彼が自分自身の幸福を追求しようとすることを認め、彼を手放すことができるかい？　それとも―）
窓際までレイフを追い詰めていたクリスターの手は、レイフの肩にかかる直前で震え、止まった。
クリスターは、喘ぐように肩で息をした。
「違う…そうじゃない…僕は、レイフ…おまえを支配したい訳じゃない…一緒に幸せになりたかっただけだよ」
クリスターは、己の顔がくしゃくしゃに歪み、目から熱い涙がとめどなくこぼれ落ちていくのを感じた。

「おまえが…ただ好きなだけだよ…」
耐えられなくなったように、震える手で顔を覆った。
「クリスター…」
レイフが掠れた声で呼びかけるのをはねつけるように、クリスターは背中を向けた。
「レイフ」
心を静めようと何度も深呼吸した後、クリスターは後ろで息を殺して自分を見守っている弟にささやいた。
「分かったよ、レイフ、おまえを苦しめるようなまねなんか、僕はしない。あのことは、一度だけの過ち、僕達だけの秘密にして忘れてしまおう」
そんなことは不可能だと分かっていながら、クリスターは感情を欠いた声で続けた。
「そうだ、レイフ、この部屋も…おまえが使うことにしたらいい。僕はゲストルームの1つを自分の部屋にするよ。今度の休みにでも、父さんと一緒に新しいベッドや家具を見に行こう」
レイフが息を吸い込む音をクリスターは聞いた。
「ちょっ、ちょっと待てよ、クリスター」
クリスターの宣言にレイフが動揺し反対しようとするのに、クリスターは苦く笑った。
「大きくなりすぎた僕達には、この子供部屋を2人で使うことは、もう無理なんだ」
胸に広がるほろ苦い感情を味わいながら、クリスターは弟と共有してきた部屋の全てをさっと見渡した。2人の思い出が、そこにはいっぱい詰まっている。
「僕達は、もう大人の男なんだよ。お前も自覚するんだな、レイフ」
そう言い捨てて、後ろを振り返ることもなく、クリスターは部屋を出て行った。
「ク、クリスター…！」
扉を閉じる瞬間、弟のすがりつくような叫びを聞いたが、クリス

ターは黙殺した。今、扉を開いて、部屋の中に戻り、たった1人で哀しみの涙を迸らせているだろう弟を抱きしめたら、彼を取り戻せるかもしれないと分かっていたが、クリスターはそうはしなかった。
（僕が何より望むのは、おまえの幸せ…おまえが僕から離れ、自分だけの幸せを求めたいというのなら、僕にはおまえを阻むことなどできない）
クリスターは頬に残る涙を手の甲で乱暴にぬぐった。
扉の向こうから聞こえてくる弟の啜り泣きを振り切るように、クリスターはその場から離れた。
母が帰ってくるまで、リビングでぼうっとしていようと思った。それまでには涙の跡も乾いているはずだ。
（レイフは僕から離れることを望んだ。さあ、僕はどうしようか…？）
他に欲しいものなど、クリスターには何一つなかった。
今更ながら自覚した寒々とした事実に、震えが込み上げてくるのを覚え、クリスターは己をひしと抱きしめた。
レイフと一緒に歩むことのできない人生になど、さして面白みが残っているとは思えない。クリスターは自分の能力や頭脳には自信があったが、それを一体何のために使えばいいのかさっぱり分からなかった。
（それでも時がたてば…僕も変われるのかな…もう少し大人になったら…色んな人と会って、一生懸命勉強して経験を積んで…そうしたら、レイフが言ったように、あの子のことはただの兄弟として愛しながら、僕もいつか自分1人で立って歩いていけるようになるんだろうか。自分のだけの将来の計画、友達、好きな人を見つけて、普通に生きられるようになるんだろうか？）
そんな日がいつか現実に訪れることなど、今のクリスターは全く想像もできなかった。信じることもできなかった。
「レイフ」
せっかく一度は手に入れたと思ったのに、今度は決して越えるこ

とのできない壁の向こうに遠ざかってしまった半身が恋しくて、また涙が込み上げてきそうになる。
クリスターは、ここにはいない相手に向かって、そっと囁きかけてみた。
「好きだよ」
空しさがクリスターの胸をふさいだ。
クリスターはリビングのソファに力なく横になり、胎児のように体を丸めて、そっと目を閉じた。
片翼をもぎ取られたような、ひどく不安定でよるべない心のまま、クリスターは1人途方に暮れるしかなかった。

SCENE15（後書き）

ここまでこの話を読んでくださった方々、ありがとうございました。
一線を越えてしまった兄弟、今回はこんな感じで落ち着きましたが、
続きは第三部の高校生編で描く予定です。
彼らがどうなるのか、もうしばらくお付き合いいただけたら、嬉しいです。（＊＾　＾＊）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2907a/

ある双子兄弟の異常な日常　第二部

2010年10月8日14時29分発行